

令和3年度
文部科学省委託調査

**令和3年度
WWLコンソーシアム構築支援事業
におけるEBPMに向けたデータ収集・
分析、効果検証等のための調査研究**

調査報告書

令和4年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

目次

第1章 調査概要	1
1-1 調査目的	1
1-2 調査内容	2
第2章 カリキュラム開発拠点校へのアンケート調査	3
2-1 調査概要	3
2-2 回答校の属性	4
2-3 AL ネットワークの形成・実施体制	5
2-4 カリキュラムの研究開発・実践	8
2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果	20
2-6 管理機関の活動	26
第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査	29
3-1 調査概要	29
3-2 WWL 事業について	30
3-3 学校生活について	40
3-4 高校卒業後の進路について	46
3-5 WWL 事業参加生徒の成長の状況	53
3-6 熱心度による違い	66
第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査	72
4-1 調査概要	72
4-2 WWL 事業への関わり	76
4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務	84
4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い	85
第5章 卒業生へのアンケート調査	86
5-1 調査概要	86
5-2 高校時代の生活	87
5-3 高校時代の SGH 事業や WWL 事業の経験	92
5-4 考えや行動について	96
5-5 高校卒業後から現在までについて	107

第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング	118
6-1 事例紹介	118
6-2 カリキュラム開発・実施のポイント	167
第7章 まとめ.....	176
7-1 WWL 拠点校の活動や WWL 事業に参加した生徒の状況	176
7-2 「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力」「PPDAC」	176
7-3 教員からみた WWL 事業	177

第1章 調査概要

本調査研究は、文部科学省からの委託を受けて実施したものである。調査概要は、以下のとおり。

1-1 調査目的

社会の大きな変革として Society 5.0 が訪れようとする中、我が国の新たな社会を牽引する人材の育成が求められており、平成 30 年 6 月に文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」においてまとめられた「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」の中で、新たな時代に向けた学びの変革、取り組むべき施策（Society 5.0 に向けたリーディング・プロジェクト）の一つとして、文理両方を学ぶ高大接続改革に基づく、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム（以下「WWL コンソーシアム」という。）の創設が提案された。

WWL コンソーシアムは、高度かつ多様な科目内容を、生徒個人の興味・関心・特性に応じて履修可能とする高校生の学習プログラムの開発と実践を担うものとして想定されており、将来的に、高校生 6 万人あたり 1 か所を目安に、各都道府県で国立、公立及び私立の高等学校等を拠点校として整備し、全ての高校生が選抜を経てオンライン・オフラインで参加することを可能とする仕組みを持つことが目指されている。

WWL コンソーシアム構築支援事業（以下「WWL 事業」という。）では、Society 5.0 において共通して求められる力（①文章や情報を正確に読み解き対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力等）を基盤として、将来、新たな社会を牽引し、世界で活躍出来るビジョンや資質・能力を有したイノベティブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」（以下「AL ネットワーク」という。）を形成した拠点校を全国に配置することで、将来的に、WWL コンソーシアムへと繋げることを目的としている。

本調査研究においては、WWL 事業の各事業拠点校の管理機関内に設置された AL ネットワーク運営組織における政策効果検証（測定）と評価、その成果の普及を行うとともに、併せて、成果効果の測定に重要な関連を持つ情報や統計等を活用した EBPM を推進し、政策

の有効性を高め、国民の行政への信頼確保に資する機能を果たすことを目指す。

1-2 調査内容

WWL 事業のカリキュラム開発拠点校及び管理機関にご協力頂き、下記の調査を実施した。

調査名		対象
拠点校アンケート		カリキュラム開発拠点校28校
生徒アンケート	WWL事業参加生徒	拠点校においてWWL事業に参加している全生徒 約15,000名
	WWL事業非参加生徒	拠点校でWWL事業に参加していない生徒 6校
	拠点校以外生徒	拠点校(公立校)のある地域の拠点校以外の 公立高校の高校1、2年生 7地域 13校
教員アンケート		カリキュラム開発拠点校28校の教員全員
卒業生アンケート		WWL事業・SGH事業の卒業生を輩出している 拠点校のうち4校
拠点校ヒアリング		カリキュラム開発拠点校のうち 令和元年度指定校10校

第2章 カリキュラム開発拠点校へのアンケート調査

2-1 調査概要

全カリキュラム開発拠点校へアンケートを実施し、各取組みの達成状況のデータ収集及び効果を明らかにした。

2-1-1 調査対象

カリキュラム開発拠点校 28 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校）。

2-1-2 調査方法

e メールによる調査票の発送及び回答票回収

2-1-3 調査時期

令和 3 年 12 月 23 日～令和 4 年 2 月 5 日

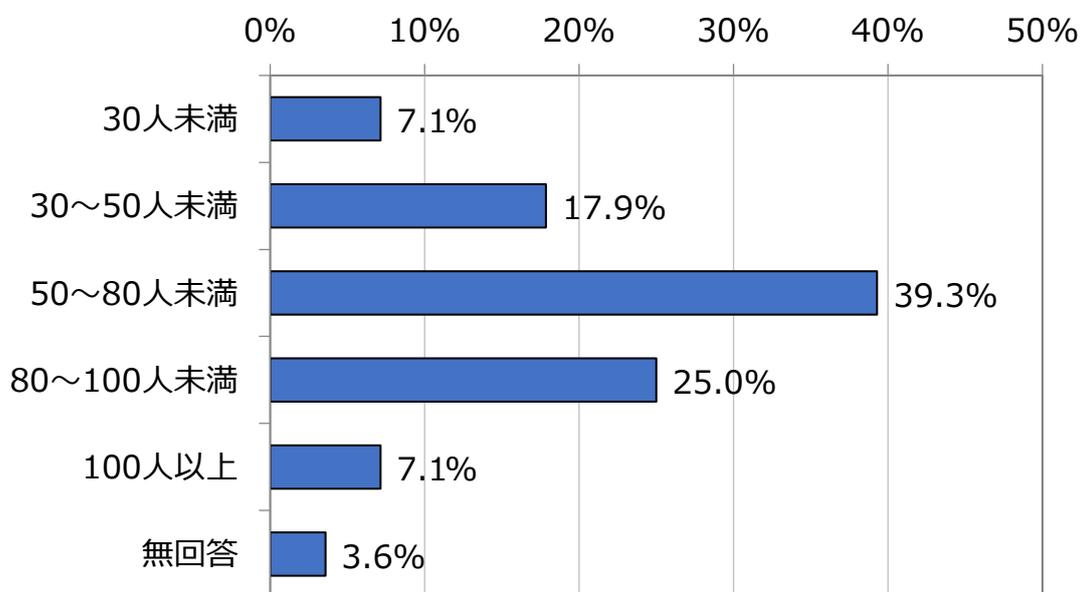
2-1-4 回収状況

28 件（回収率 100%）

2-2 回答校の属性

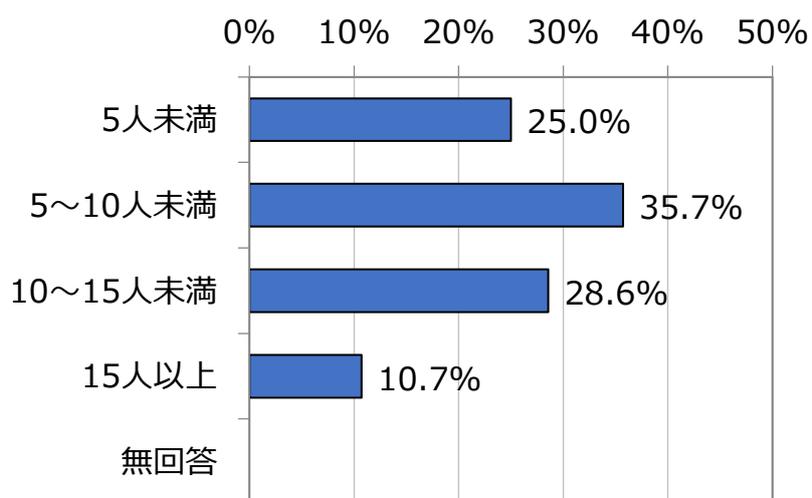
2-2-1 全教員数

図表 2-1 全教員数 (n=28)



2-2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数

図表 2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数 (n=28)

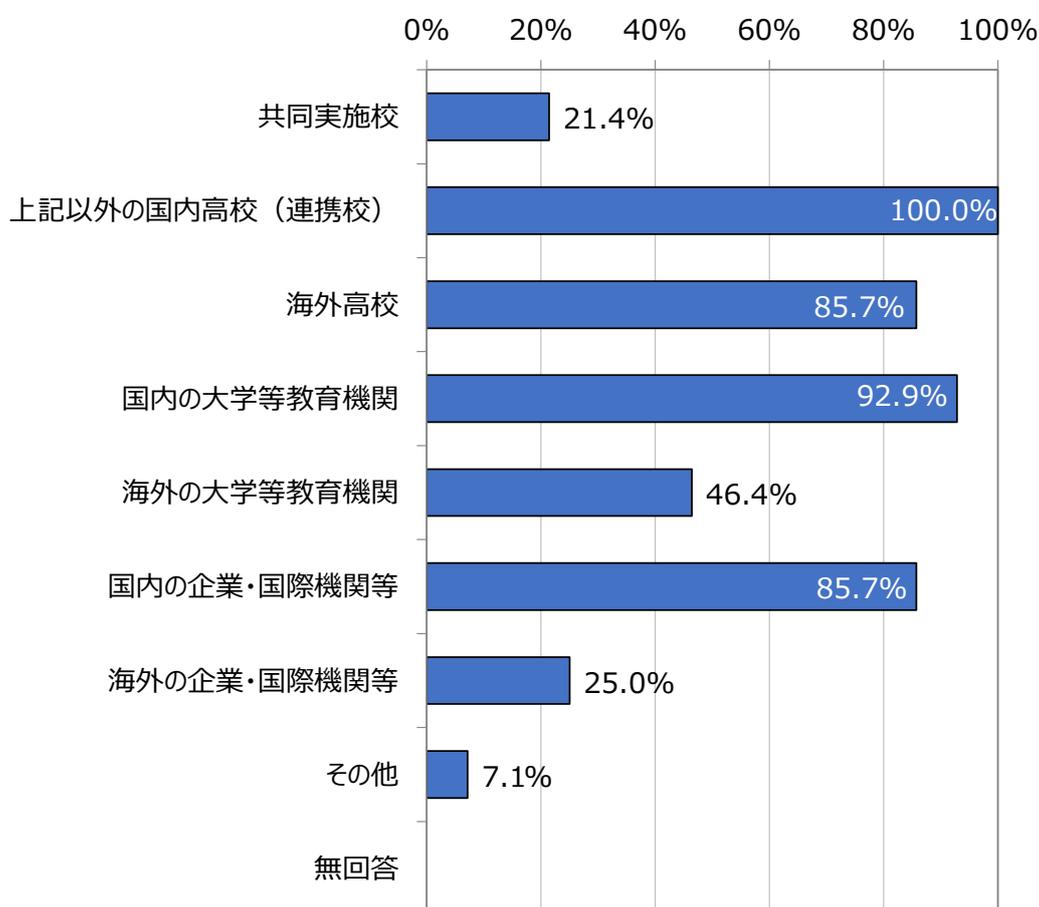


2-3 AL ネットワークの形成・実施体制

2-3-1 AL ネットワークに参加している機関

- 参加機関は、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」「国内の大学等教育機関」の割合が高い。
- 実数とした場合、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」が 28 ネットワークの総計で 259、次いで「国内の企業・国際機関等」で 138 である。

図表 2-3 AL ネットワークに参加している機関（複数回答）（n=28）



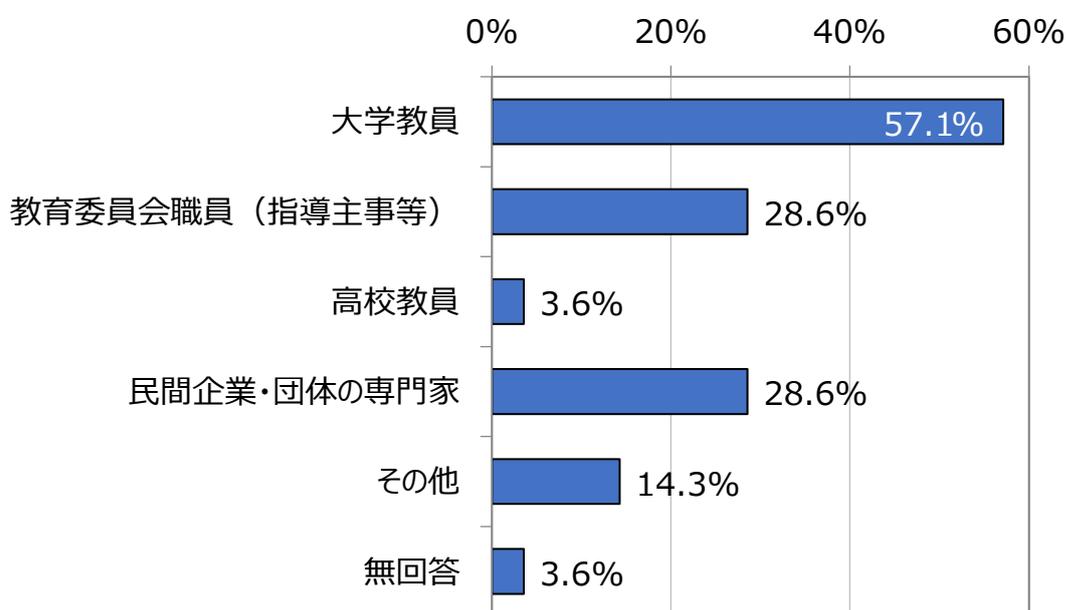
図表 2-4 参加している機関数（28 ネットワークの合計）

機関数	共同実施校	国内高校 (連携校)	海外高校	国内の大学等 高等教育機関	海外の大学等 高等教育機関	国内の企業・ 国際機関等	海外の企業・ 国際機関等	その他
合計	8	259	99	75	26	138	9	4

2-3-2 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー

- カリキュラムアドバイザーを活用している割合は、「大学教員」が 57.1%と最も割合が高く、次が「教育委員会職員(指導主事等)」「民間企業・団体の専門家」で 28.6%。
- 人数ベースは、「大学教員」が最も多く、28 ネットワークの総計で 33 人、次いで「民間企業・団体の専門家」で 20 人、「教育委員会(指導主事等)」が 16 人。

図表 2-5 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー (複数回答) (n=28)



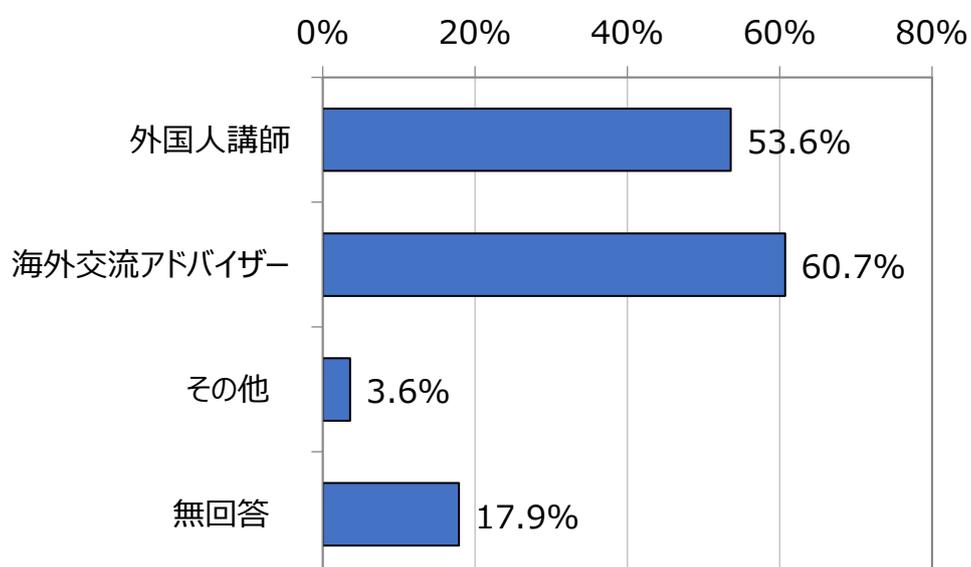
図表 2-6 カリキュラムアドバイザーの人数 (28 ネットワークの合計)

カリキュラムアドバイザー	大学教員	教育委員会職員 (指導主事等)	高校教員	民間企業・団体の専門家	その他
合計	33	16	5	20	6

2-3-3 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー

- WWL 事業に関わる割合は「海外交流アドバイザー」が 60.7%、次いで「外国人講師」が 53.6%である。
- 総人数は「外国人講師」が多く 42 人、「海外交流アドバイザー」は 21 人。

図表 2-7 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー
(複数回答) (n=28)



図表 2-8 外国人講師及び海外交流アドバイザーの人数 (28 ネットワークの合計)

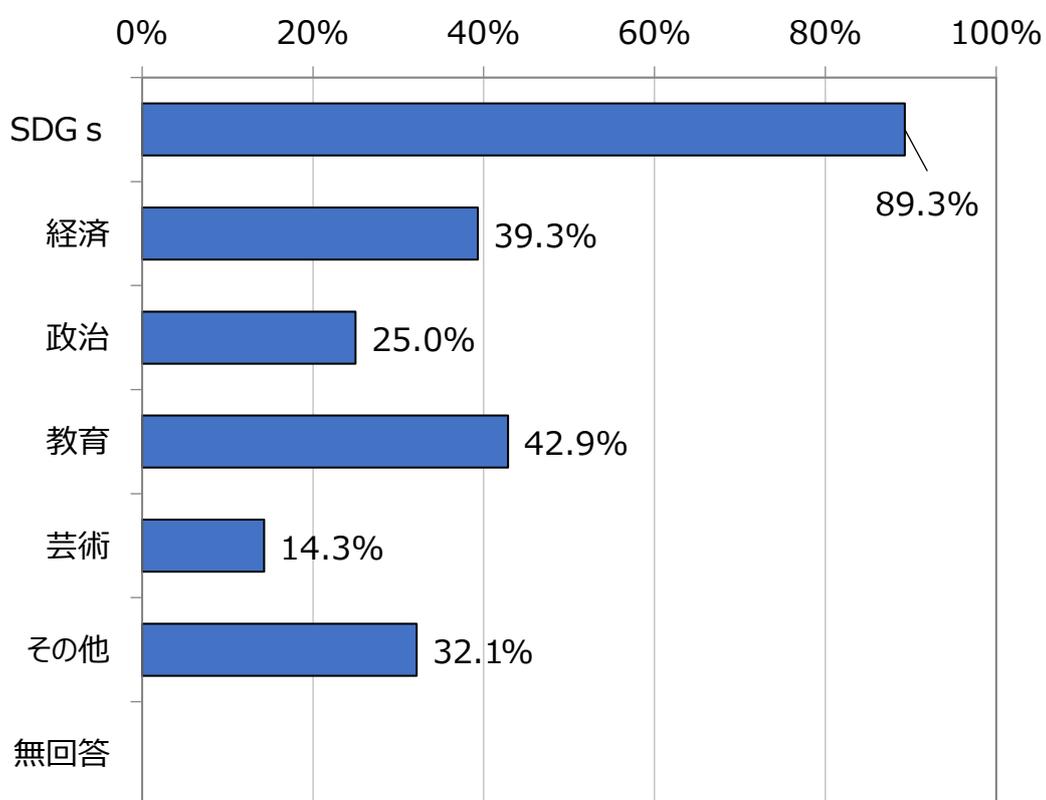
外国人講師等	外国人講師	海外交流アドバイザー	その他
合計	42	21	1

2-4 カリキュラムの研究開発・実践

2-4-1 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野

- カリキュラム開発で設定したテーマで最も多いのは「SDGs」で、89.3%の拠点校がテーマとして設定していた。

図表 2-9 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野（複数回答）（n=28）

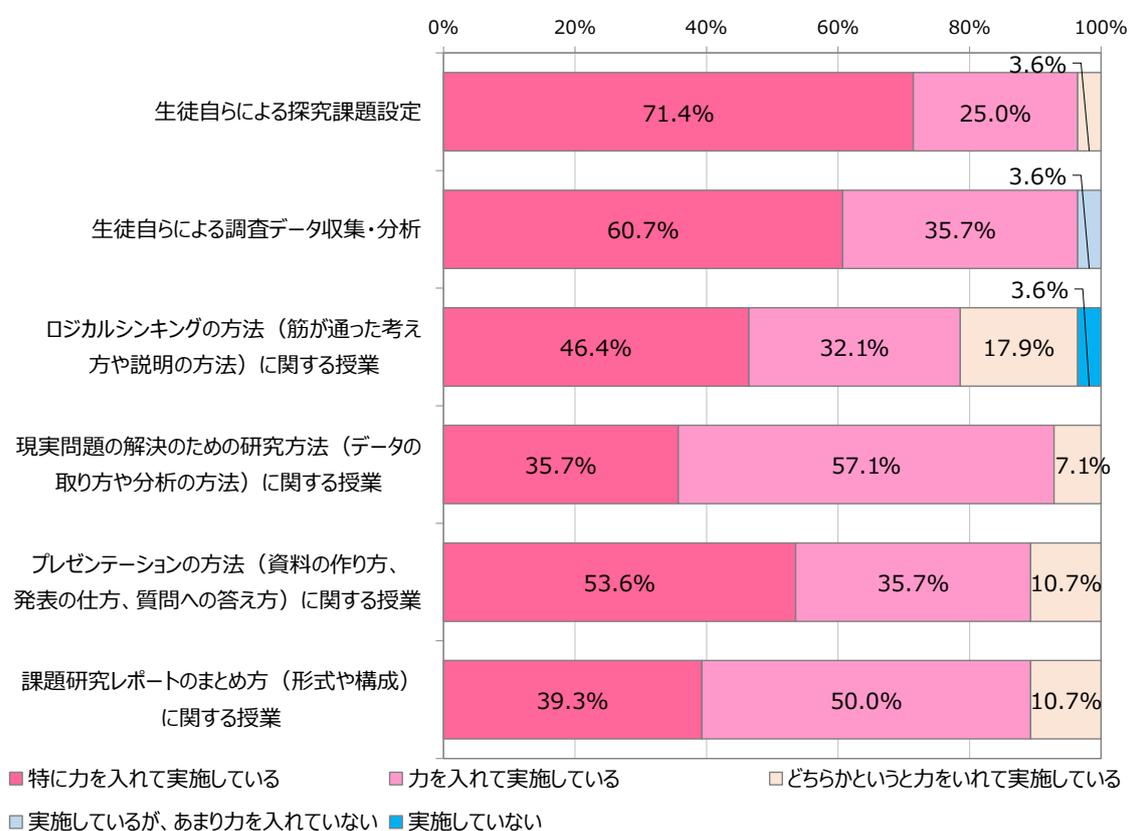


2-4-2 探究型学習

(1) 探究型学習の実施度合い

- 探究型学習についての各項目は、いずれの学校もほとんどの項目が「力を入れて実施している（特に力を入れて実施している+力を入れて実施している）」と回答。
- 「生徒自らによる探究課題設定」では、7割の学校が「特に力を入れて実施している」と回答した。

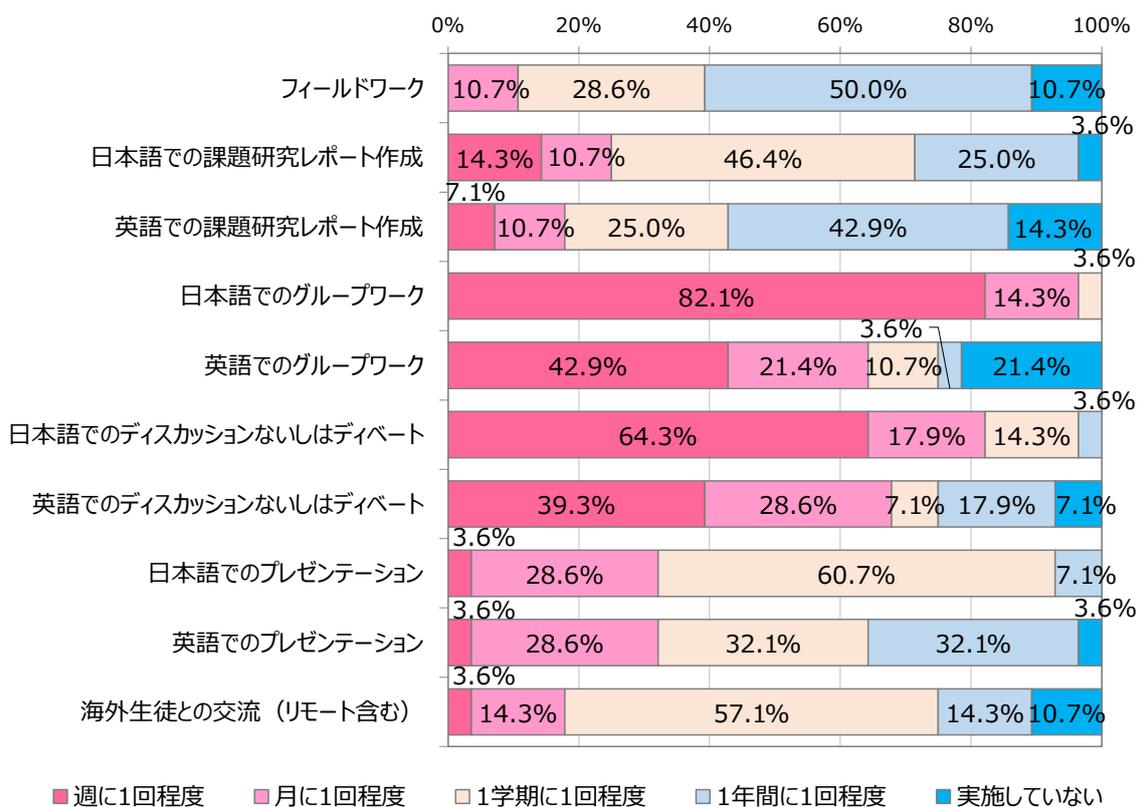
図表 2-10 探究型学習の実施度合い (n=28)



(2) 探究型学習の実施頻度

- 探究型学習の実施頻度については、「日本語でのグループワーク」は、8割以上の学校が、「週に1回程度」実施している。

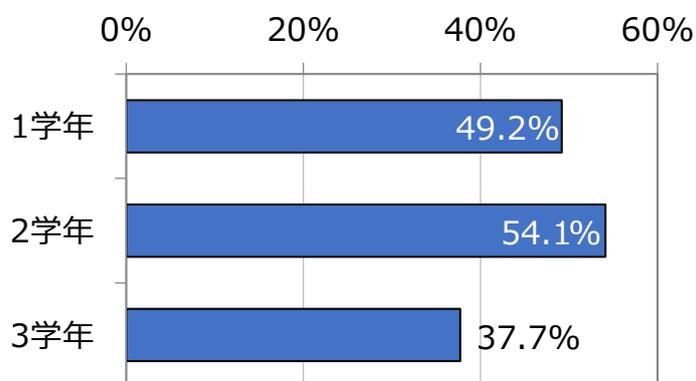
図表 2-11 探究型学習の実施頻度 (n=28)



2-4-3 外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目

- 外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目は、28校で61科目設定されている。
- 学年別では、第2学年の科目がやや多い。
- 61科目のうち、約6割の科目は、生徒全員が受講対象になっている。

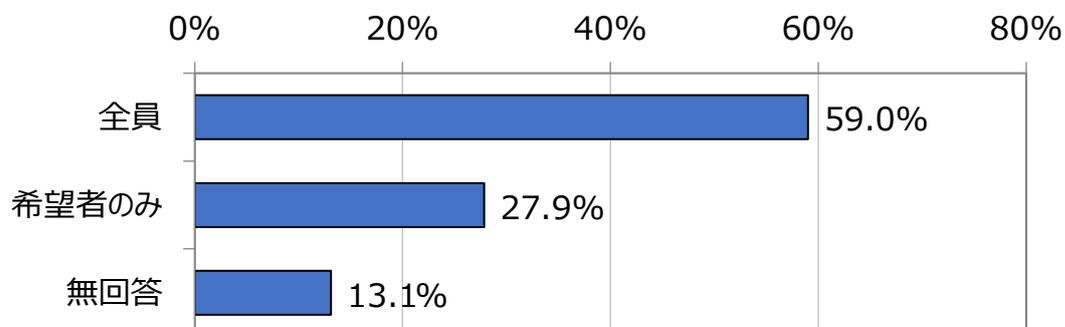
図表 2-12 対象学年（複数回答）（n=61）



図表 2-13 各学年の単位数

単位数	1学年 (n=30)	2学年 (n=33)	3学年 (n=23)
平均	1.67	3.76	4.83

図表 2-14 受講者（n=61）

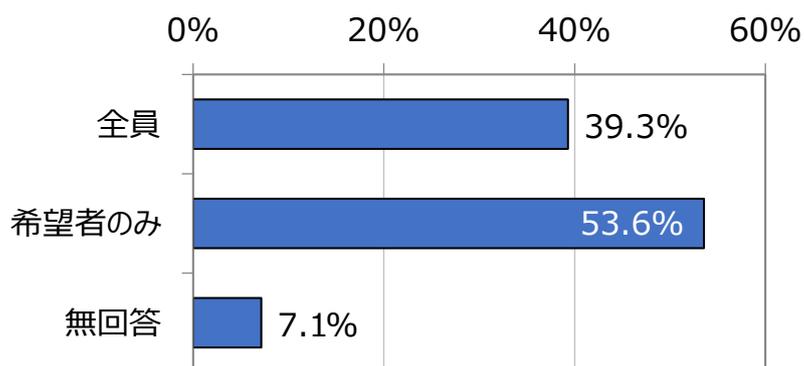


2-4-4 短期・長期留学及び海外研修等

(1)従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等

- カリキュラム開発拠点校が、従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等のうち、39.3%が全員参加型の授業だった。

図表 2-15 従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等の参加者 (n=28)

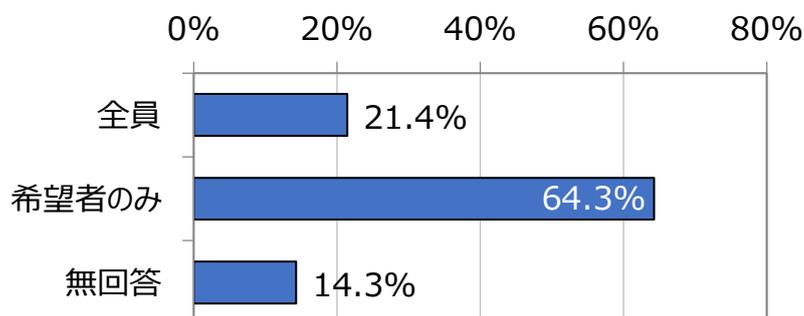


(2)コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラム

- コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラムで、全員参加型の授業は21.4%となっている。

図表 2-16 コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の

代替プログラムの参加者 (n=28)

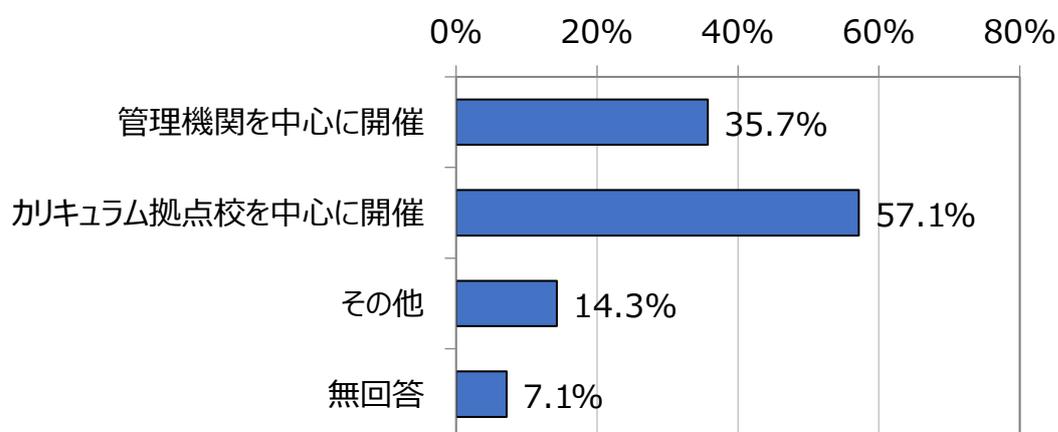


2-4-5 高校生国際会議

(1)開催方法

- 高校生国際会議の開催方法は、「カリキュラム拠点校を中心に開催」が 57.1%、「管理機関を中心に開催」が 35.7%である。

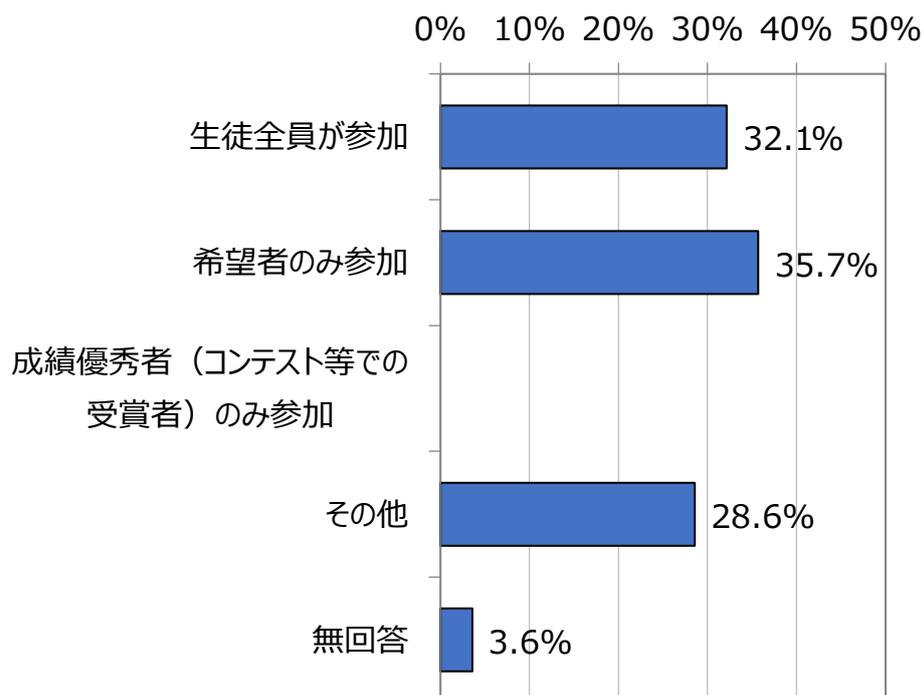
図表 2-17 高校生国際会議の開催方法 (n=28)



(2)カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ

- 高校生国際会議は、「希望者のみ参加」型が 35.7%、「生徒全員が参加」型が 32.1% である。

図表 2-18 カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ (n=28)



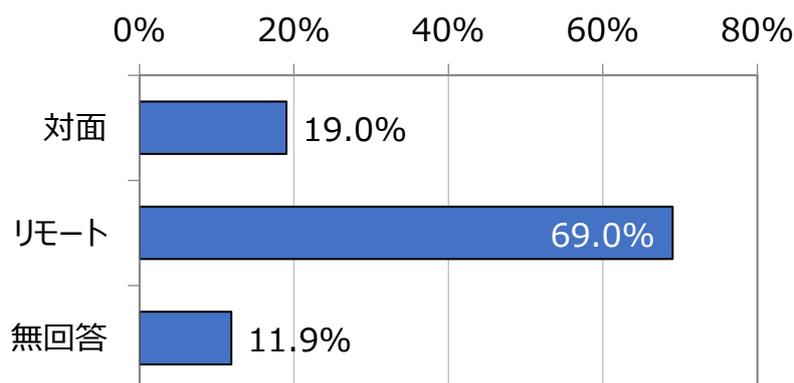
(3)高校生国際会議の実施状況

- 高校生国際会議は、令和元年度から3年度にかけて、28ネットワークの合計で42回開催された。
- 延べ968校、拠点校生徒4,712名、拠点校以外の国内生徒3,676名、海外生徒1,682名が参加した。

図表 2-19 参加状況 (28 ネットワーク 42 回の合計値)

	平均参加国数	参加学校数	参加生徒数 (拠点校)	参加生徒数 (拠点校以外)	参加生徒数 (海外)
合計	4.90	968	4,712	3,676	1,682

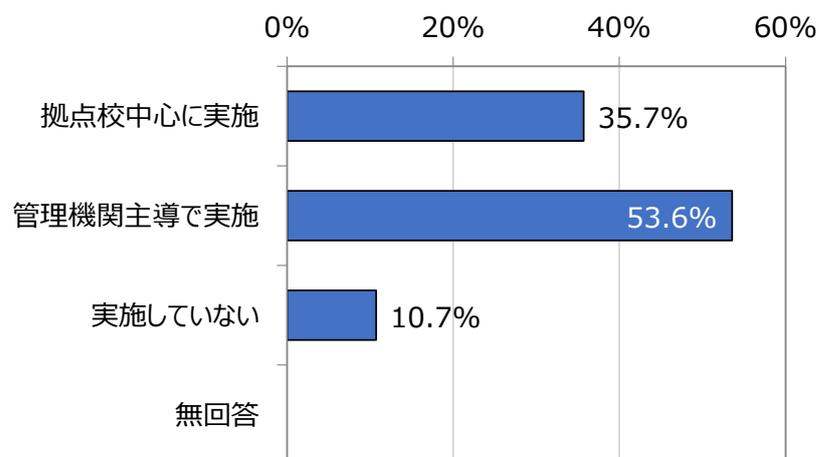
図表 2-20 参加国数 (n=42)



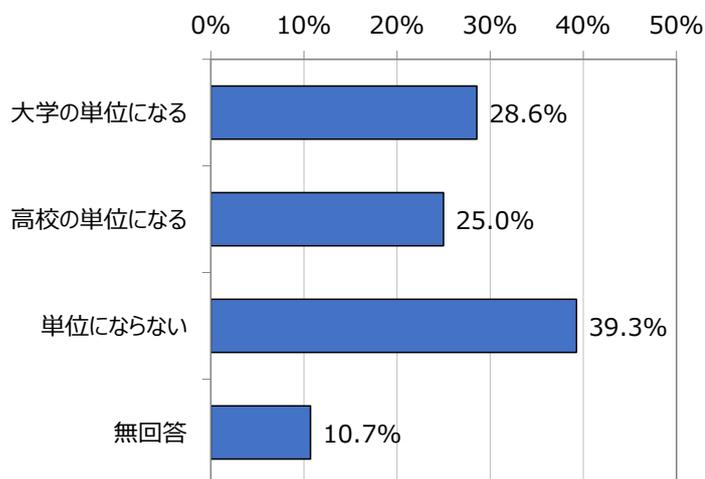
2-4-6 高大連携による大学教育の先取り履修に関する取組みの実施状況

- 高大連携による大学教育の先取り履修については、53.6%が「管理機関主導で実施」している。
- 「大学の単位になる」取組みが28.6%、「高校の単位になる」取組みが25.0%となっている。

図表 2-21 実施の有無 (n=28)



図表 2-22 単位化の状況 (n=28)



図表 2-23 年間参加者数 (n=28)

年間参加者数	令和元年度	令和2年度	令和3年度
合計	574	965	1,561

2-4-7 WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況

- WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況は、下記のとおり。
- コロナ禍の影響もあり、令和2年度以降は海外との直接の交流は減っている。一方で、リモートによる交流は増えている。

図表 2-24 海外研修

海外研修	実施回数	渡航日数計
合計	35	684
令和元年度 (n=10)	23	319
令和2年度 (n=22)	5	100
令和3年度 (n=28)	7	265

図表 2-25 留学生受入

留学生受入	受入人数	うち対象人数	留学元 国・地域数
合計	82	58	65
令和元年度 (n=10)	41	20	25
令和2年度 (n=22)	19	18	18
令和3年度 (n=28)	22	20	22

図表 2-26 帰国子女受入

帰国子女	受入人数	うち対象人数	帰国前 国・地域数
合計	738	718	168
令和元年度 (n=10)	224	224	43
令和2年度 (n=22)	255	235	69
令和3年度 (n=28)	259	259	56

図表 2-27 短期訪問

短期訪問	受けた回数	国・地域数
合計	20	19
令和元年度 (n=10)	19	18
令和2年度 (n=22)	0	0
令和3年度 (n=28)	1	1

図表 2-28 テレビ会議等リモートによる国外の学生との交流及び所在国・地域数

リモート交流	国・地域数
合計	150
令和元年度 (n=10)	6
令和2年度 (n=22)	58
令和3年度 (n=28)	86

図表 2-29 フィールドワーク

フィールドワーク	国内		国外	
	回数	日数	回数	日数
合計	182	271	52	262
令和元年度 (n=10)	34	75	33	232
令和2年度 (n=22)	43	57	12	21
令和3年度 (n=28)	105	139	7	9

図表 2-30 英語による生徒の成果発表会数

英語による成果発表回数	校内	校外	海外
合計	700	169	68
令和元年度 (n=10)	253	32	18
令和2年度 (n=22)	219	44	15
令和3年度 (n=28)	228	93	35

図表 2-31 取組みの一環として主催した国際会議の回数、開催日数(高校生国際会議含む)

主催した国際会議回数	回数	開催日数
合計	52	55
令和元年度 (n=10)	18	3
令和2年度 (n=22)	13	20
令和3年度 (n=28)	21	32

図表 2-32 連携校との交流回数

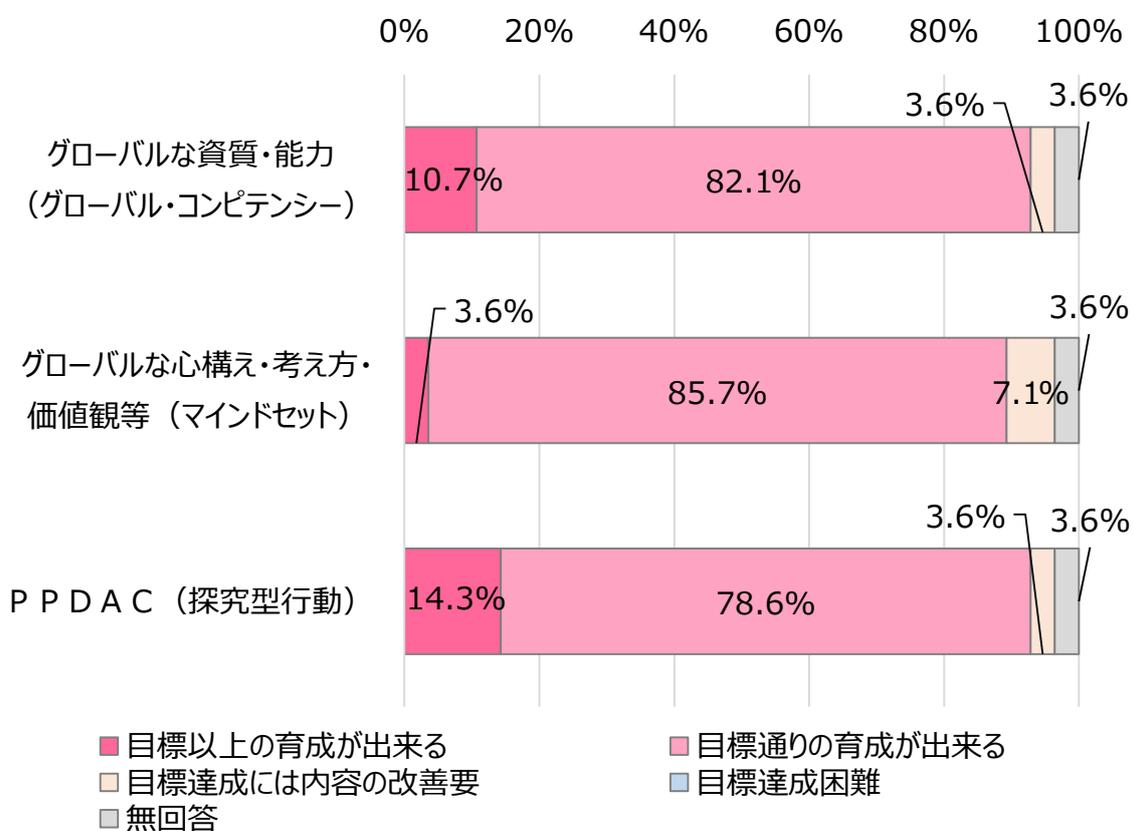
連携校との交流回数	国内	国外
合計	198	137
令和元年度 (n=10)	19	23
令和2年度 (n=22)	75	42
令和3年度 (n=28)	104	72

2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果

2-5-1 育成項目の開発・実践したカリキュラムによる達成度

- WWL コンソーシアム構築支援事業の育成項目について、開発・実践したカリキュラムによる達成度をきいたところ、いずれの項目も 8 割程度の拠点校が、「目標通りの育成が出来る」と回答。

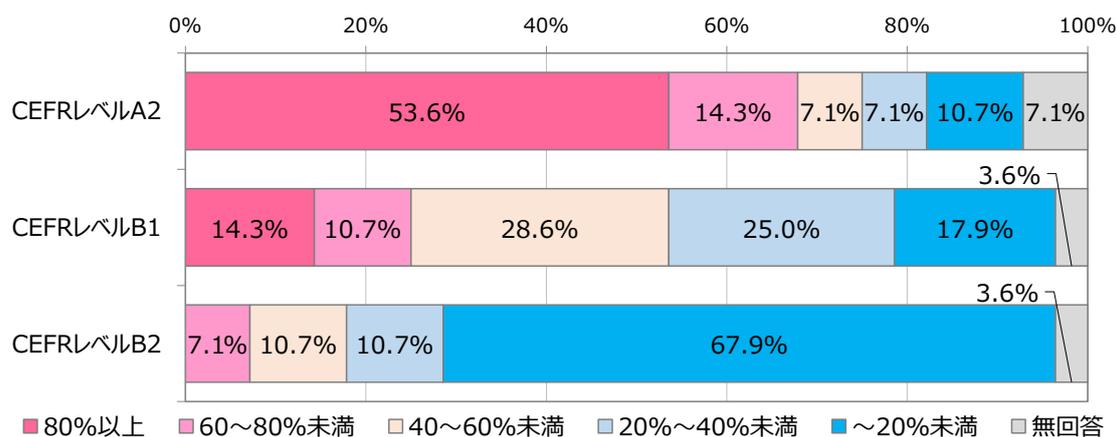
図表 2-33 開発・実践したカリキュラムによる達成度 (n=28)



2-5-2 生徒の CEFR レベル

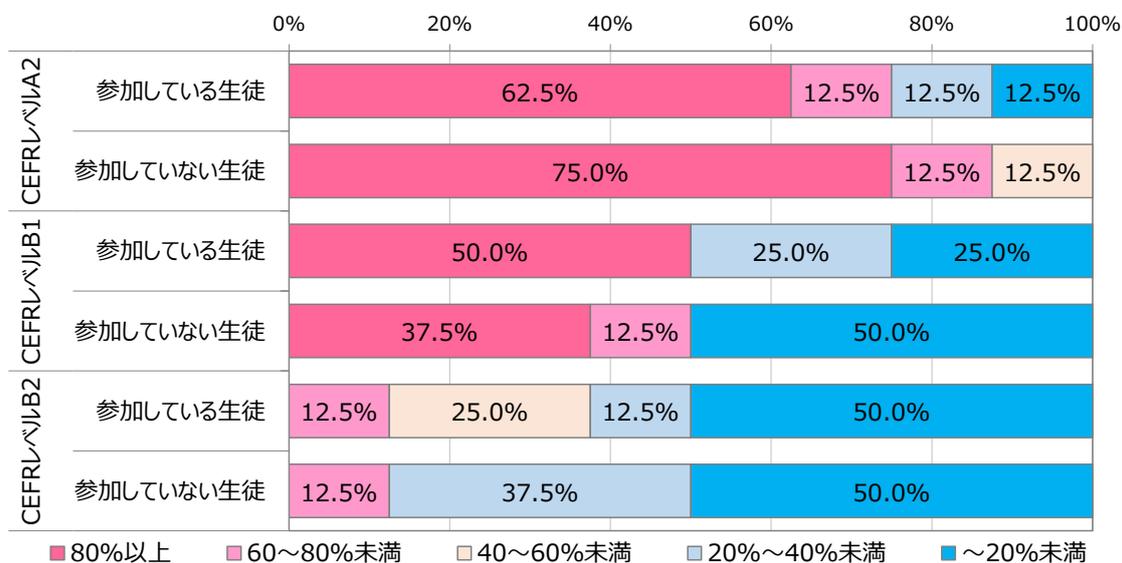
- 生徒の CEFR レベルをみると、CEFR レベル「A2」達成者の割合が「80%以上」と回答した拠点校は、53.6%となっている。

図表 2-34 生徒の CEFR レベル (n=28)



図表 2-35 生徒の CEFR レベル

(参加している生徒・参加していない生徒の比較) (n=8)



2-5-3 WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者

- 令和4年1月時点で、WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者数は56名となっている。地域・分野は、下記のとおり。

図表 2-36 地域別進学者数 (n=28)

図表 2-37 分野別進学者数 (n=28)

地域別

進学者数	合計
アジア (日本以外)	8
中東	0
ヨーロッパ	18
アフリカ	0
北米	17
中南米	0
オセアニア	13
その他	0
合計	56

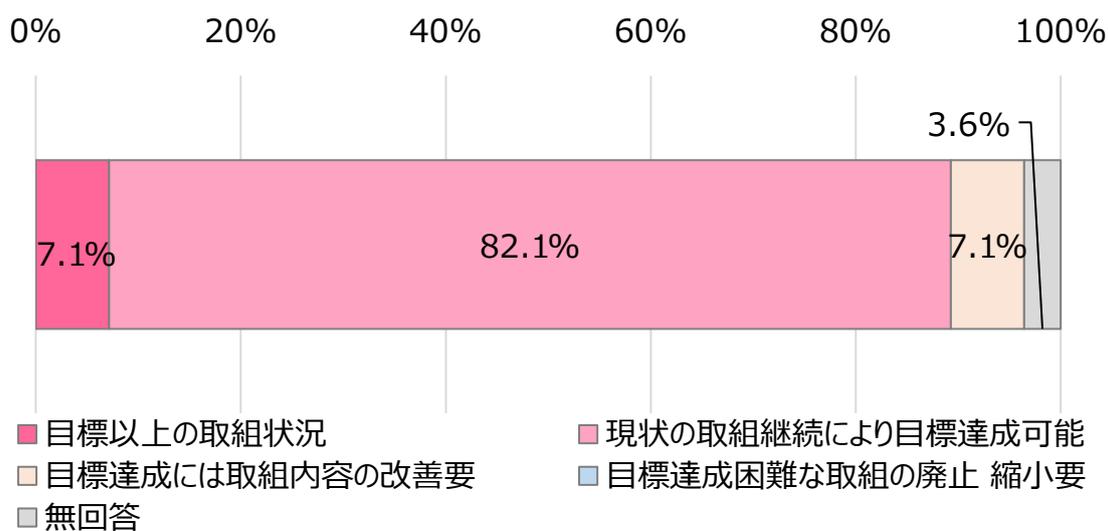
分野別

進学者数	合計
文学・史学・哲学・心理関係学部	4
海外文化・国際コミュニケーション等 を含む人文学関係学部	10
教育関係学部	0
法学・政治学関係学部	1
商学・経済学関係学部	6
社会学・社会事業関係学部	4
理工学関係学部	13
農学関係	0
医学・薬学・看護学など 保健関係学部	3
芸術関係学部	4
その他	11
合計	56

2-5-4 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価

- 拠点校のカリキュラムの研究開発・実践における令和3年度の自己評価をみると、82.1%の拠点校において「現状の取組継続により目標達成可能」と回答している。

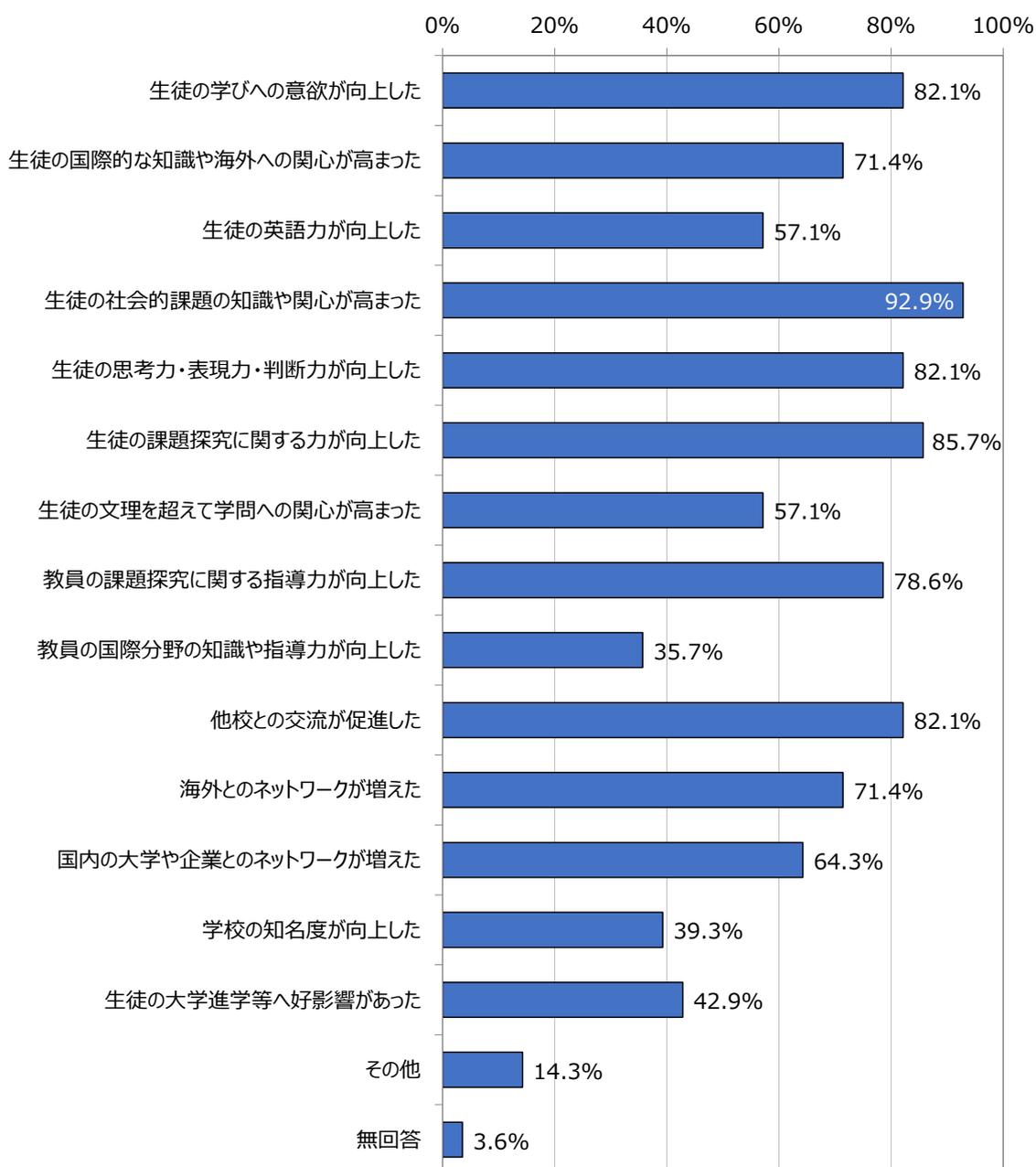
図表 2-38 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価 (n=28)



2-5-5 WWL 事業の実施による学校への影響や変化

- WWL 事業の実施による学校への影響や変化については「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった (92.9%)」「生徒の課題探究に関する力が向上した (85.7%)」「生徒の学びへの意欲が向上した (82.1%)」「生徒の思考力・表現力・判断力が向上した (82.1%)」「他校との交流が促進した (82.1%)」など多くの項目が挙げられている。

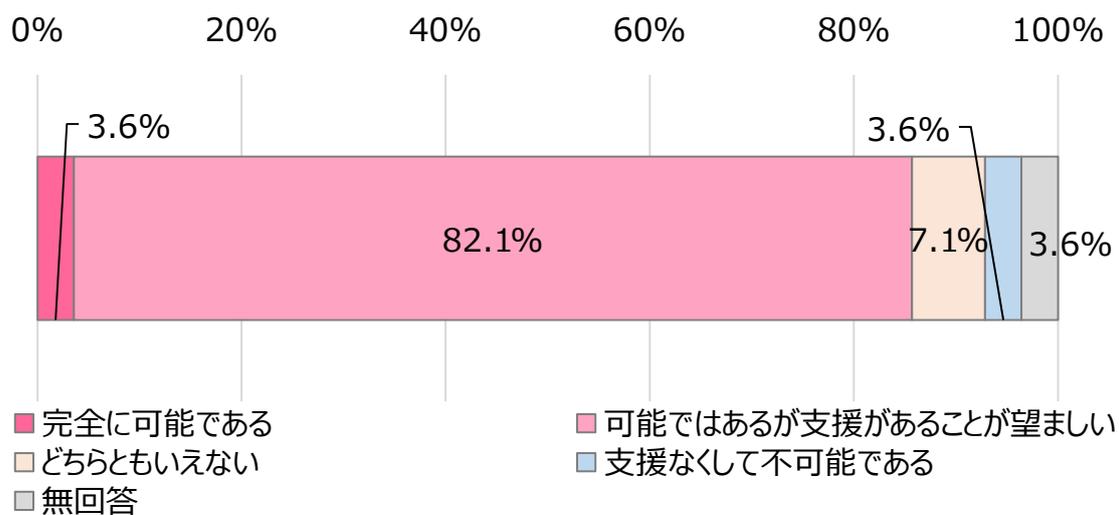
図表 2-39 WWL 事業の実施による学校への影響や変化 (複数回答) (n=28)



2-5-6 事業終了後の自走継続の可否

- カリキュラム開発拠点校に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、82.1%が「可能ではあるが支援があることが望ましい」と回答。

図表 2-40 事業終了後の自走継続の可否 (n=28)



2-6 管理機関の活動

2-6-1 運営指導委員会の年間開催回数

- 管理機関による運営指導委員会の年間開催回数は、下記のとおり。

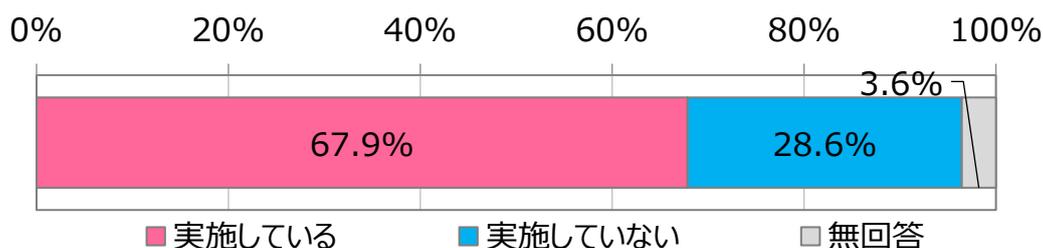
図表 2-41 運営指導委員会の年間平均開催回数

運営指導委員会 年間開催回数	令和元年度	令和2年度	令和3年度
平均	1.80	1.55	1.75

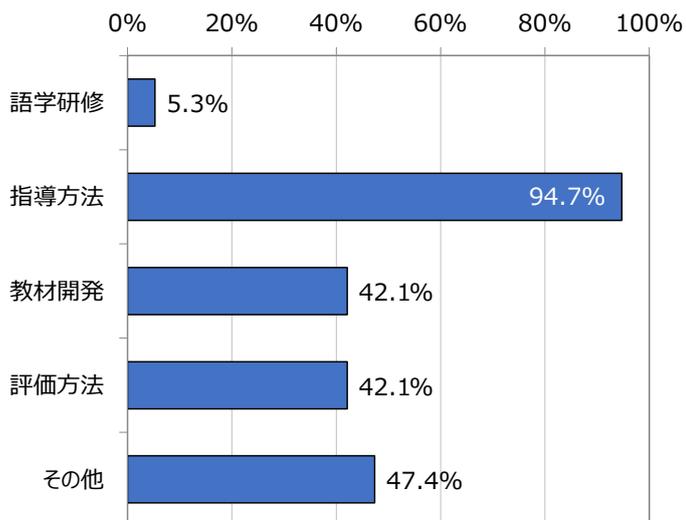
2-6-2 教職員育成の研修・セミナー等の実施状況

- 67.9%の管理機関が、教職員育成の研修・セミナー等を実施している。実施内容は、「指導方法」の割合が94.7%と高い。

図表 2-42 教職員育成の研修・セミナー等の実施の有無 (n=28)



図表 2-43 教職員育成の研修・セミナー等の実施内容 (複数回答) (n=19)



図表 2-44 教職員育成の研修・セミナー等の年間実施回数 (n=19) (総計)

研修等の年間実施回数	令和元年度	令和2年度	令和3年度
合計	82	92	125

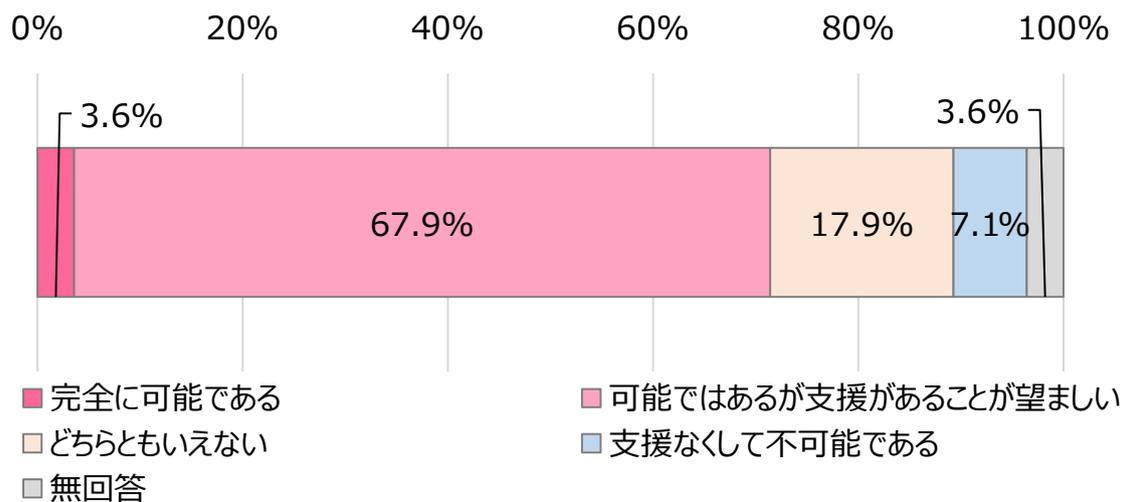
図表 2-45 教職員育成の研修・セミナー等の総参加者数 (n=19) (総計)

研修等の年間参加者数	令和元年度	令和2年度	令和3年度
合計	1,967	2,475	1,861

2-6-3 事業終了後、自走による継続の可否

□ 管理機関に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、67.9%が「可能ではあるが支援があることが望ましい」と回答。

図表 2-46 事業終了後、自走による継続の可否 (n=28)



第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査

3-1 調査概要

3-1-1 調査対象

カリキュラム開発拠点校 28 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校）
において WWL 事業に参加している全生徒 15,463 名。

3-1-2 調査方法

Web アンケート

3-1-3 調査時期

第 1 回：令和 3 年 9 月 27 日～令和 3 年 10 月 11 日

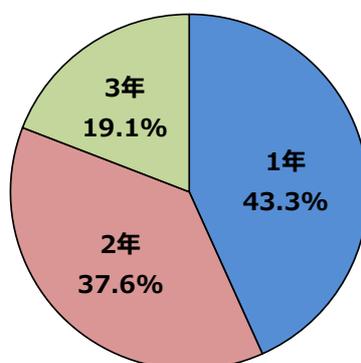
第 2 回：令和 3 年 12 月 23 日～令和 4 年 1 月 24 日

3-1-4 有効回答数

10,256 件（本報告書では、第 1 回、第 2 回共に回答があった生徒のみを分析対象としている）。なお、本報告書では、主に第 2 回アンケートの結果を中心に紹介する。

3-1-5 回答者属性

図表 3-1 学年（n=10,256）

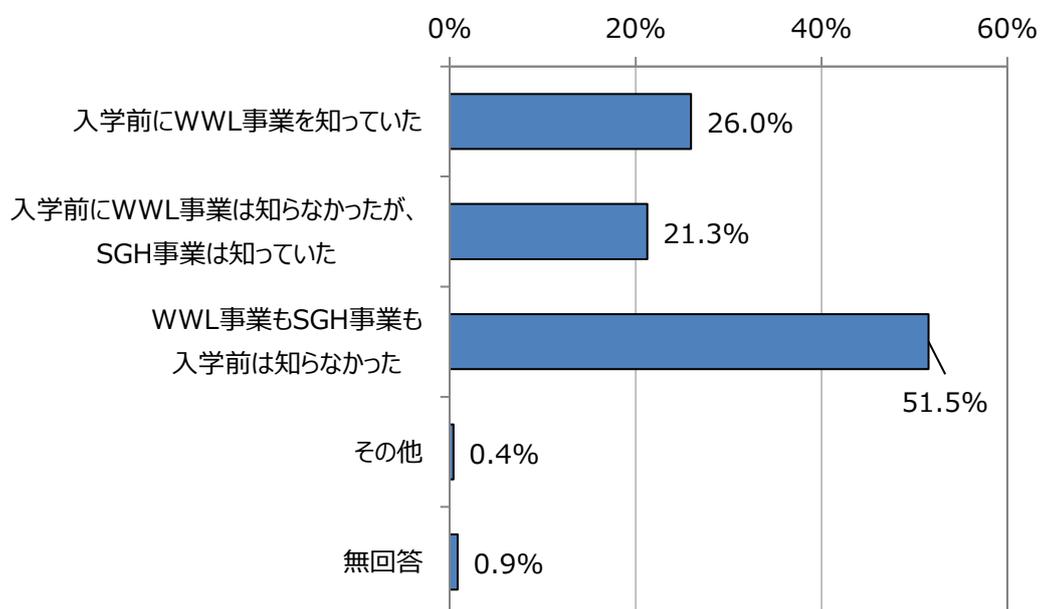


3-2 WWL 事業について

3-2-1 入学前の WWL 事業認知状況

- 入学前の WWL 事業認知状況についてきいたところ、51.5%が「WWL 事業も SGH 事業も入学前は知らなかった」と回答。

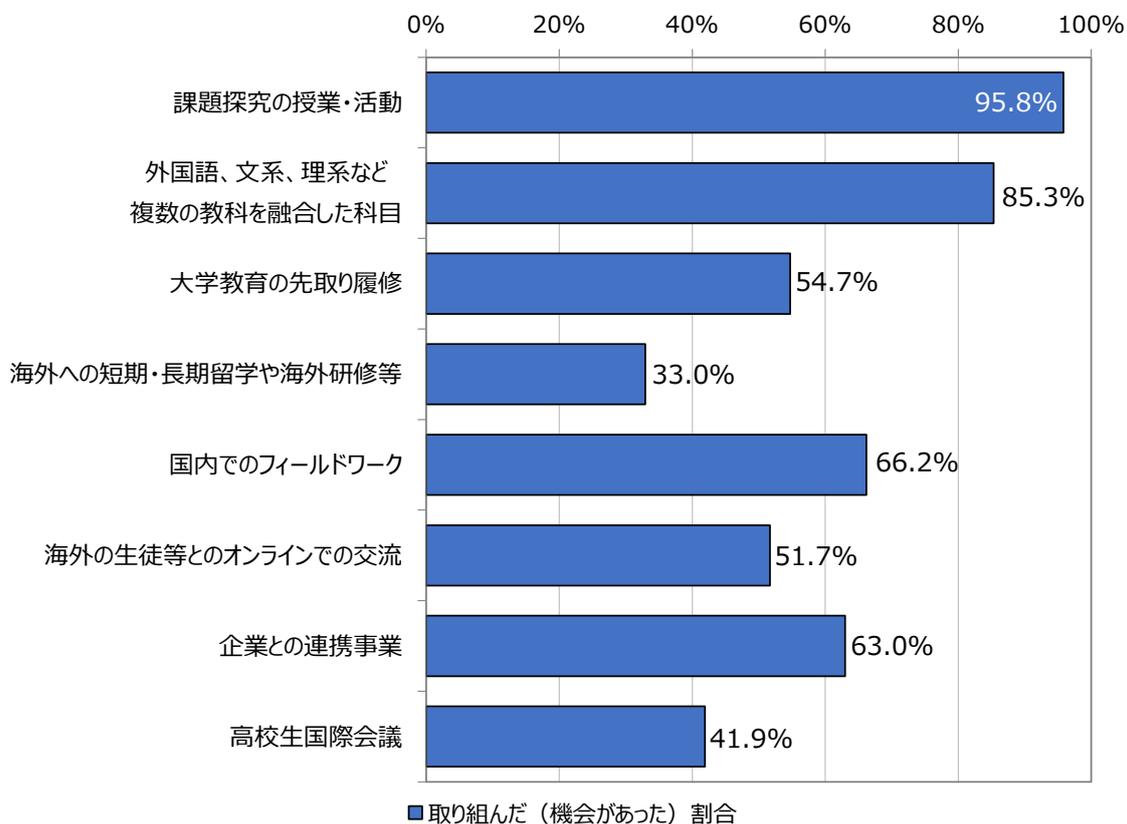
図表 3-2 入学前 WWL 事業認知状況 (n=10,256)



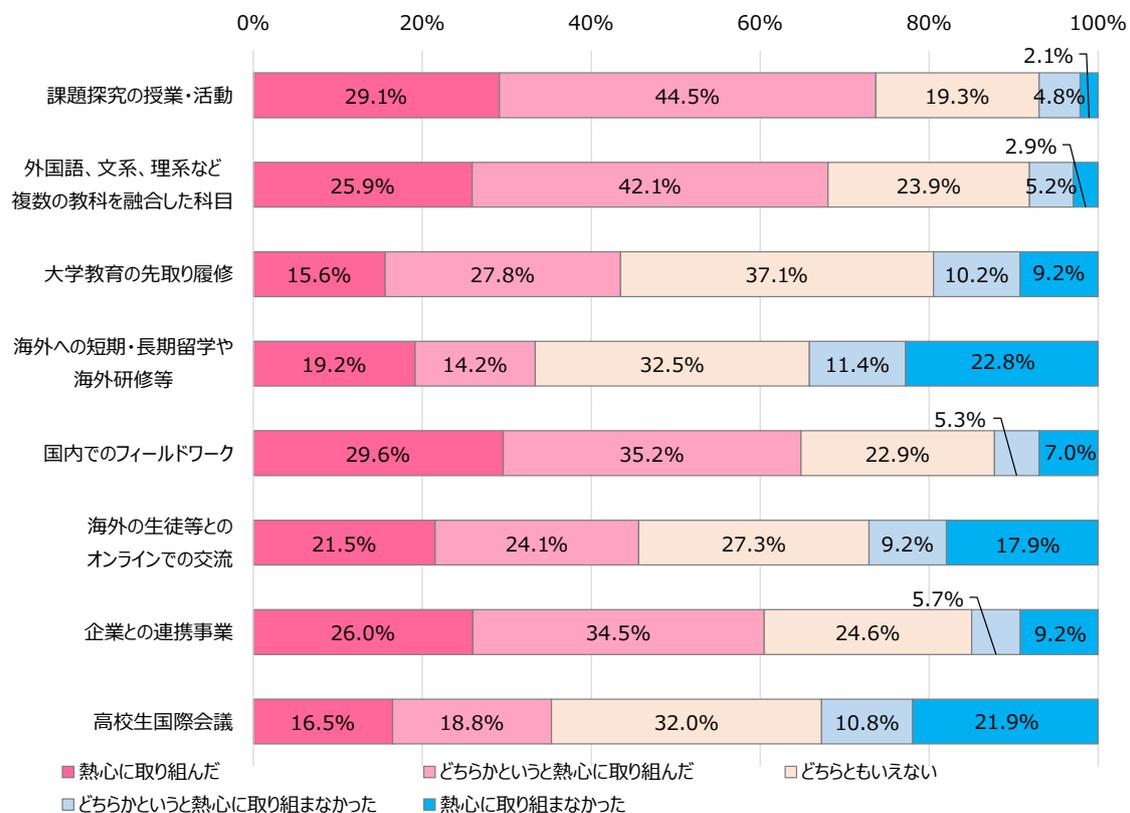
3-2-2 WWL 事業の活動の熱心度

- 「課題探究の授業・活動」「複数の教科の融合科目」は、ほとんどの生徒が取り組んだと回答している。
- 取り組んだ活動のうち、「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」「企業との連携事業」の順に、熱心に取り組んだ割合が高い。

図表 3-3 WWL 事業の活動に取り組んだ割合（複数回答）



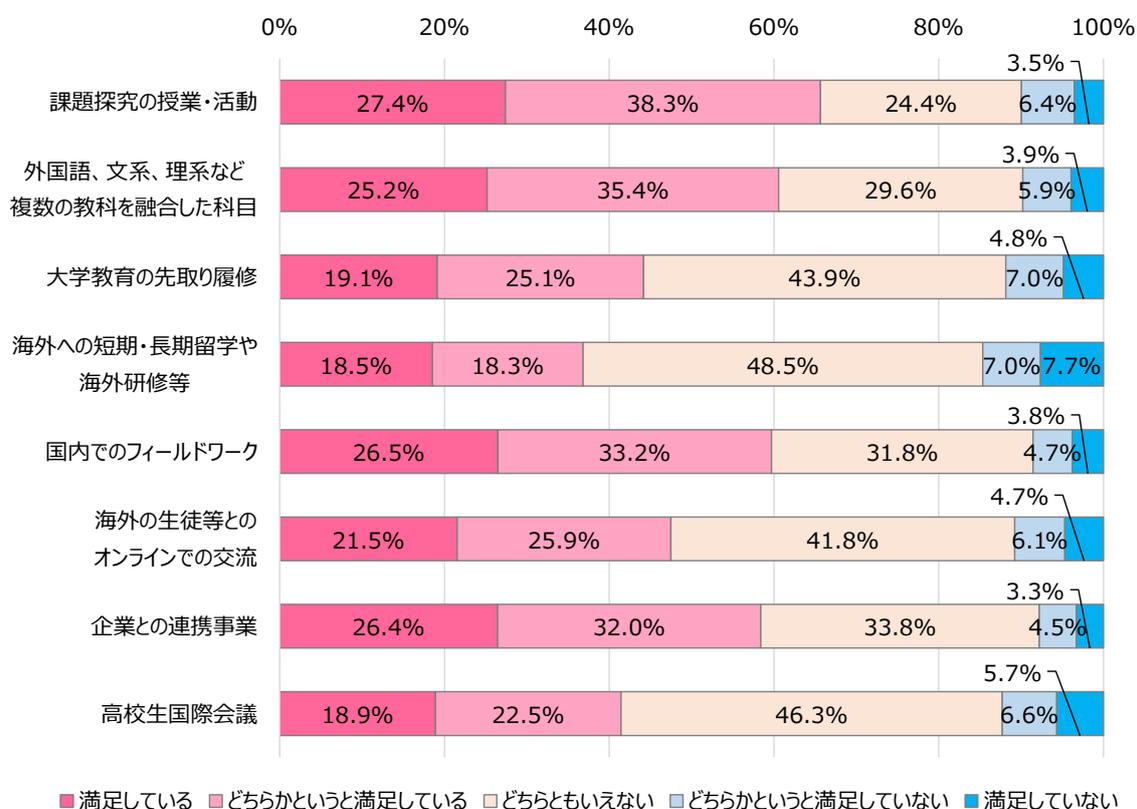
図表 3-4 WWL 事業の活動の熱心度 9月（機会があったもののみ）



3-2-3 WWL 事業の活動の満足度

- 参加した活動のうち、「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」「企業との連携事業」の順に、「満足している（満足している+どちらかという満足している）」割合が高い。

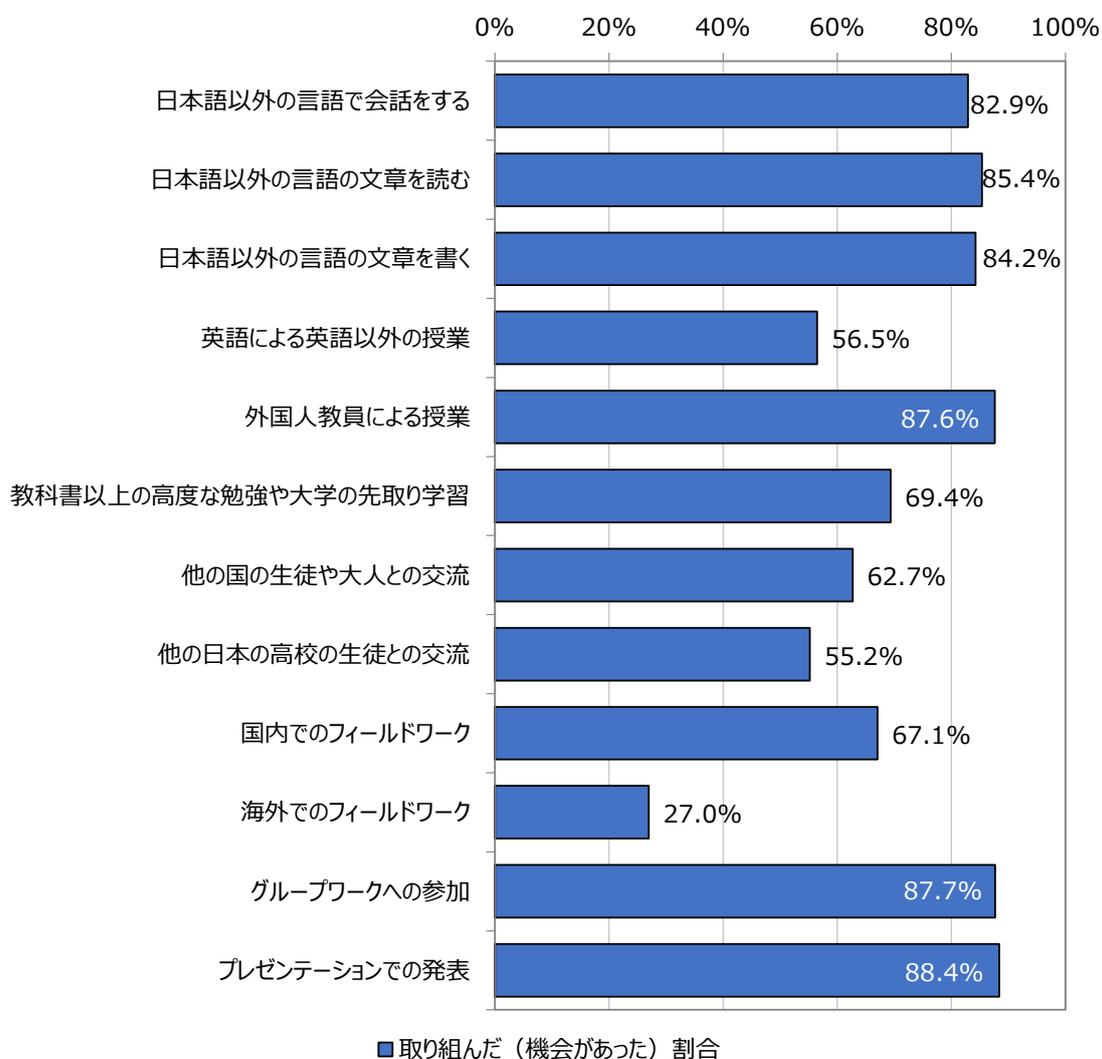
図表 3-5 WWL 事業の活動の満足度 1月（機会があったもののみ）



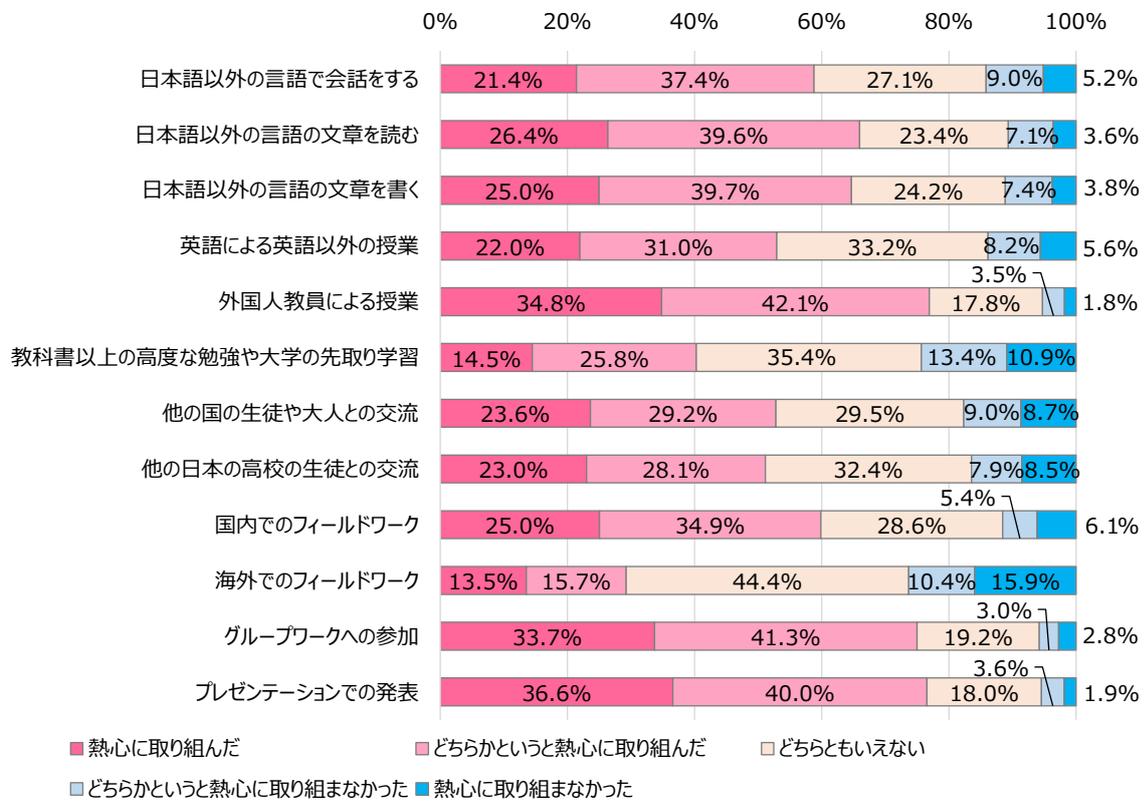
3-2-4 WWL 事業の取組みの熱心度

- 「外国人教員による授業」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心に実施している割合も高い。「日本語以外の言語」で話す・読む・書くについても8割以上が実施。
- コロナ禍の影響もあり「海外でのフィールドワーク」は取り組んでいる割合が低く、他の国や他校との交流に関するものも、上位に入らない。

図表 3-6 WWL 事業の取組みの機会（複数回答）（n=10,256）



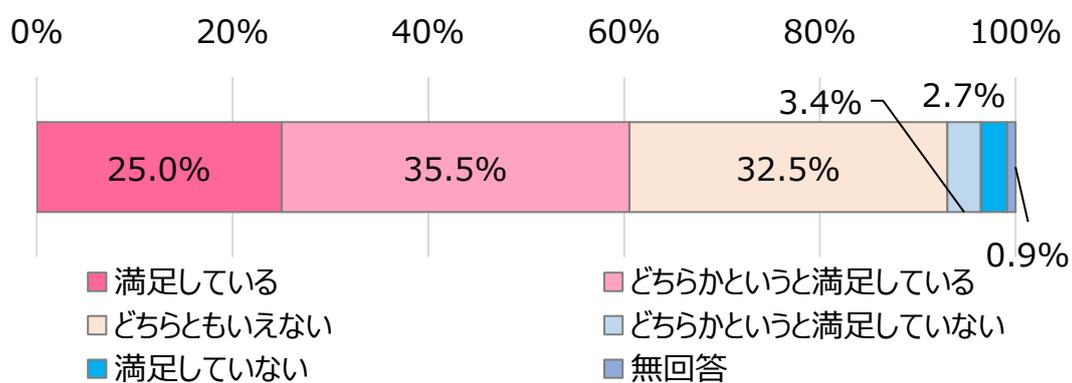
図表 3-7 WWL 事業の取組みの熱心度（機会があったもののみ）



3-2-5 WWL 事業テーマの満足度

- WWL 事業のテーマについて、6 割以上の生徒が「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」と回答している。

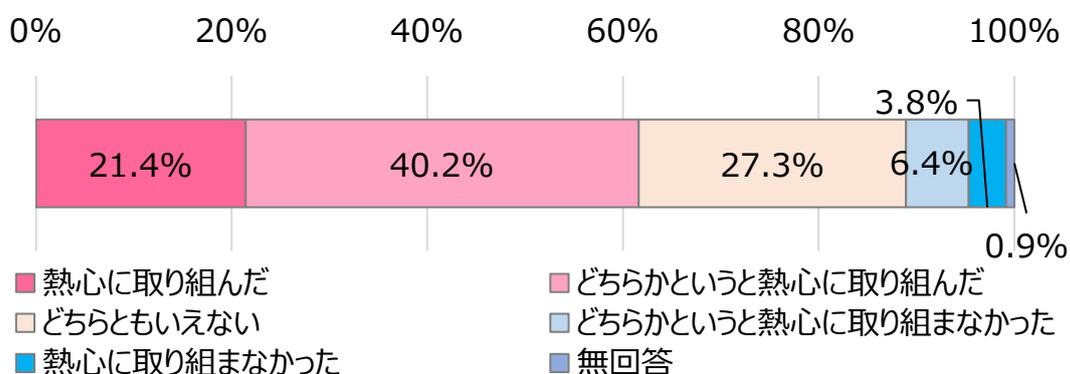
図表 3-8 WWL 事業テーマの満足度 (n=10,256)



3-2-6 WWL 総合熱心度

□ 総合的にみて WWL 事業に熱心に取り組んだかをきいたところ、61.6%の生徒が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答。

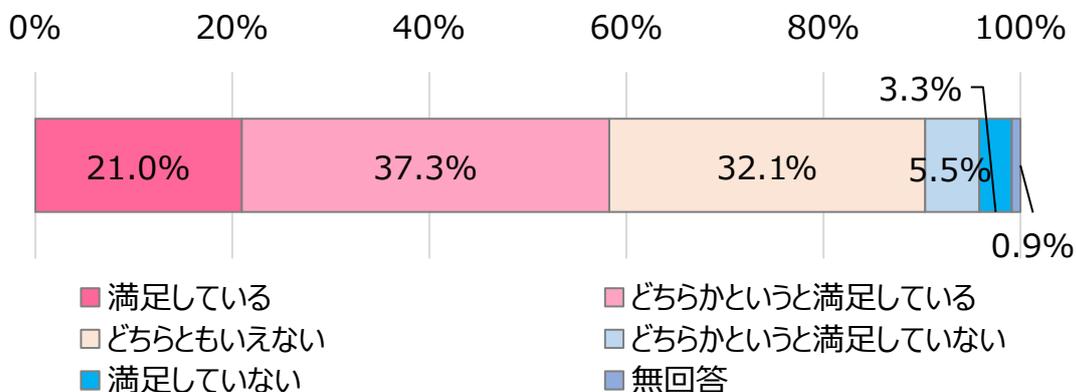
図表 3-9 WWL 総合熱心度 (n=10,256)



3-2-7 WWL 総合満足度

□ 総合的にみて WWL 事業に満足しているかをきいたところ、58.3%の生徒が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答。

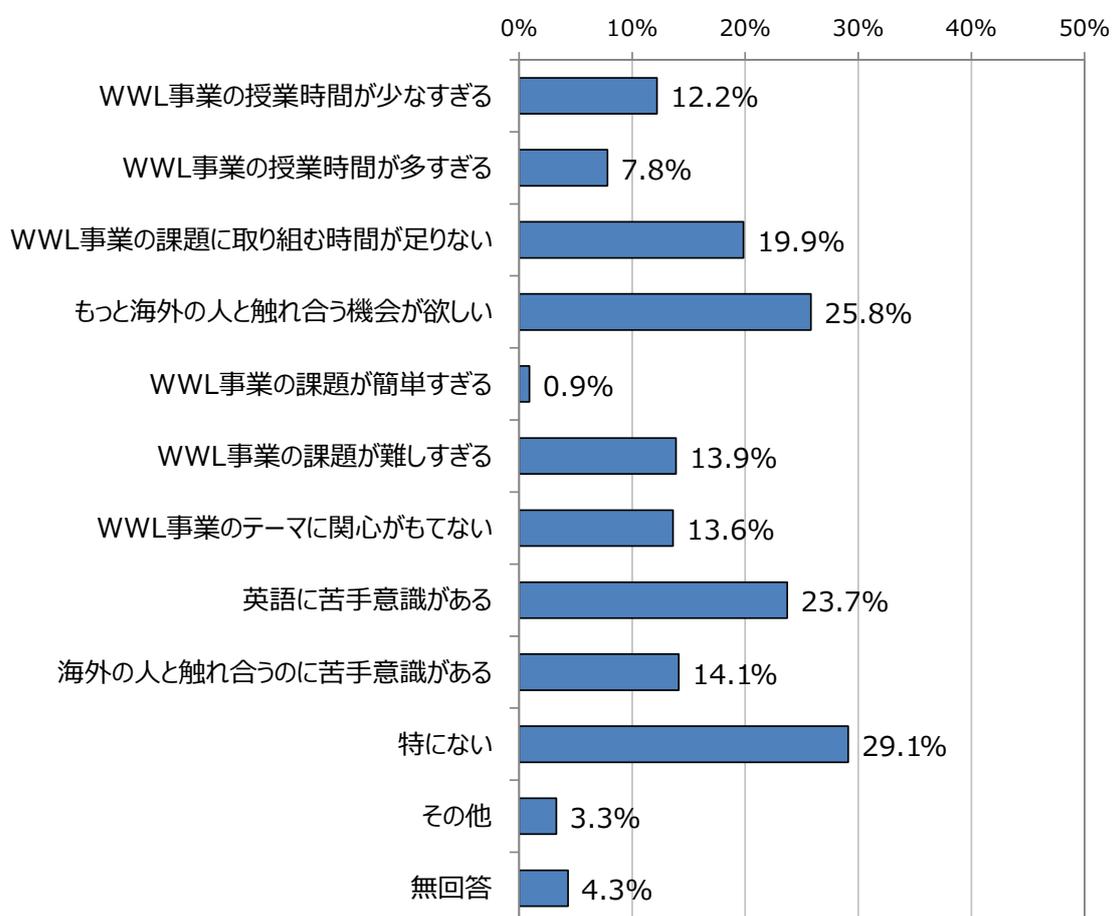
図表 3-10 WWL 総合満足度 (n=10,256)



3-2-8 WWL 事業の問題点・困っていること

- WWL 事業の問題点・困っていることについては、「特にない」が 29.1%と最も割合が高く、次いで「もっと海外の人と触れ合う機会が欲しい」が 25.8%、「英語に苦手意識がある」が 23.7%と続く。

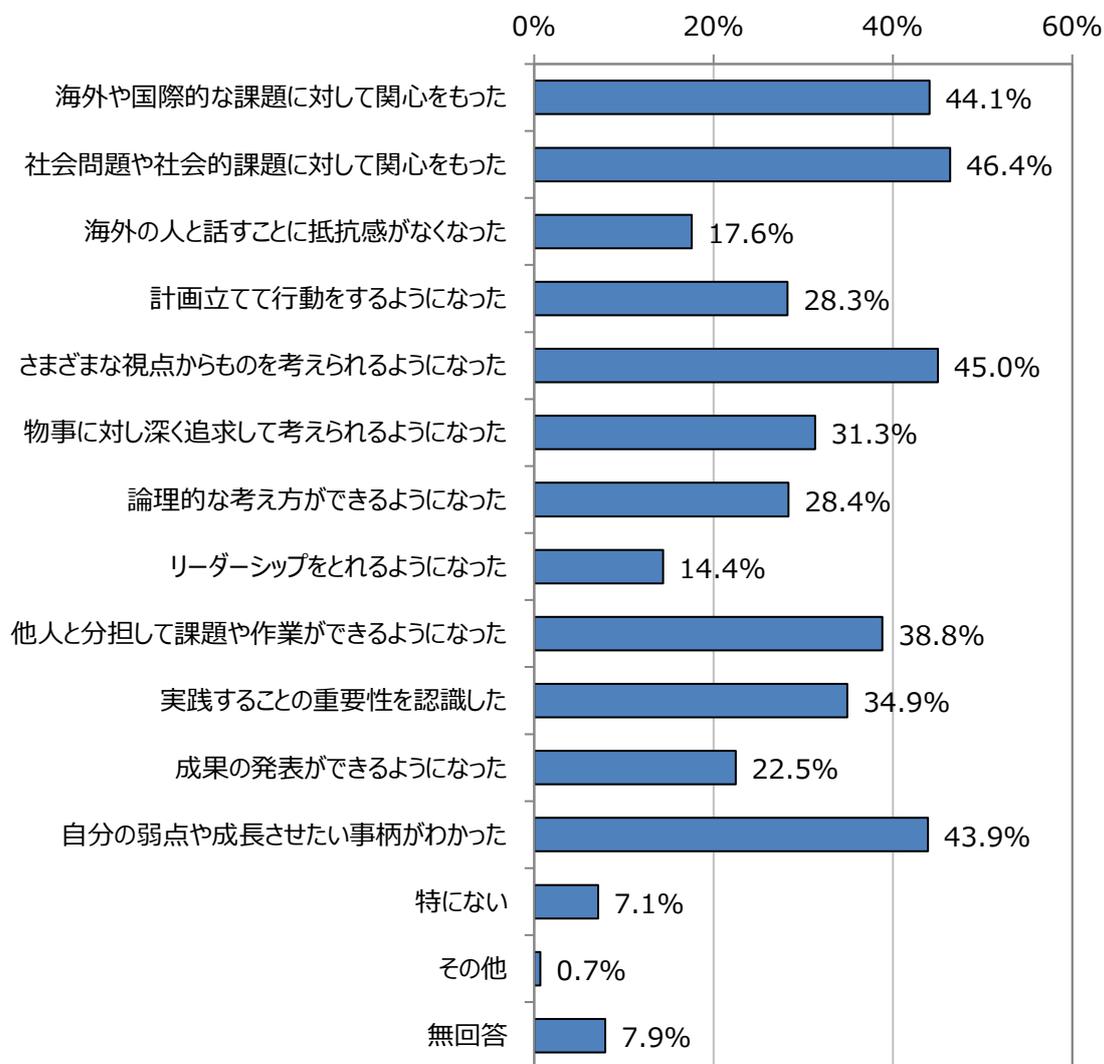
図表 3-11 WWL 事業の問題点・困っていること（複数回答）（n=10,256）



3-2-9 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと

□ WWL 事業を含め高校生活を通じて身についたこと・成長したことについてきいたところ、「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「海外や国際的な課題に対して関心を持った」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」などが4割以上と、WWL 事業等を通じて生徒の世界や視野が広がっている様子が伺える。

図表 3-12 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと（複数回答）（n=10,256）

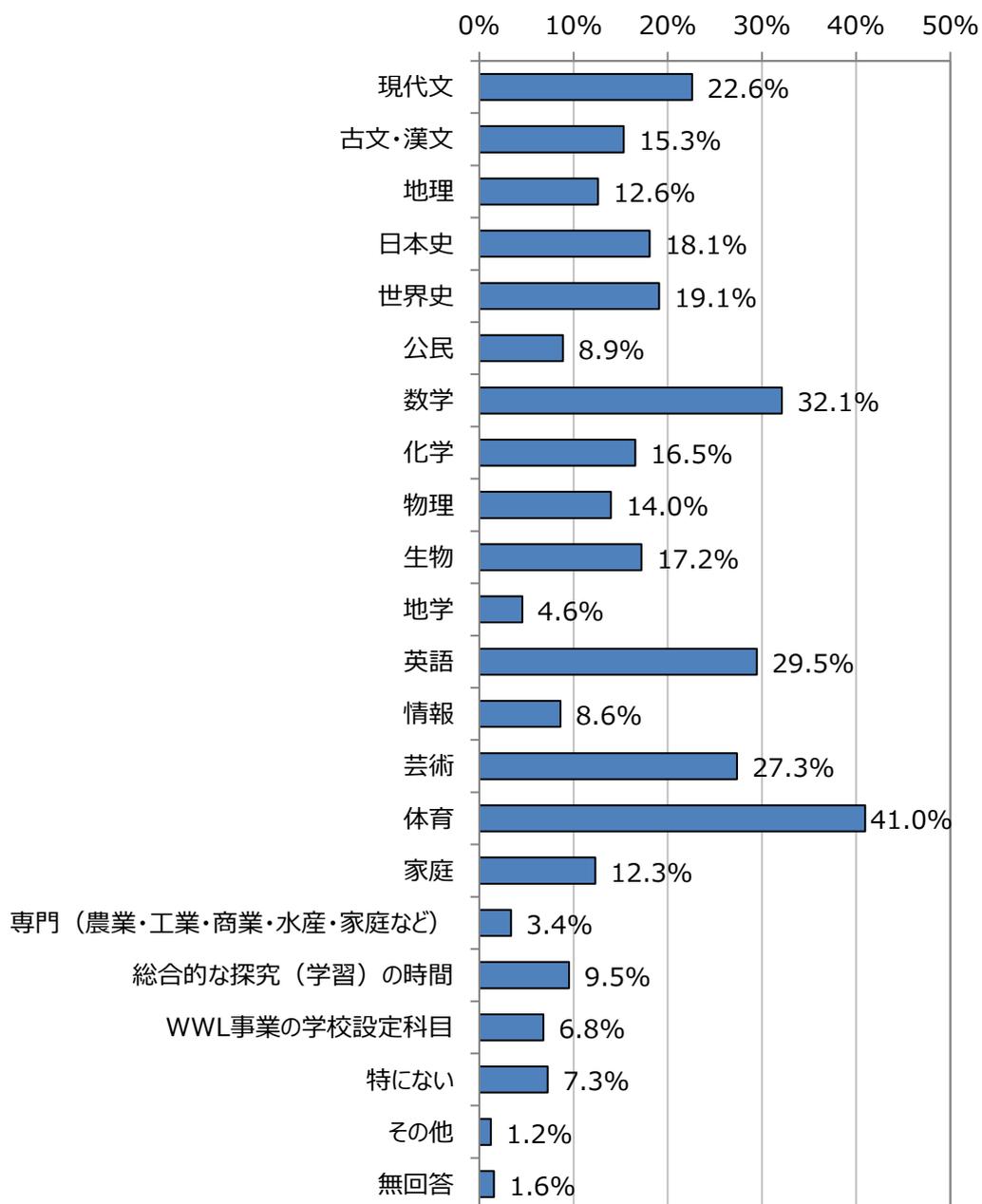


3-3 学校生活について

3-3-1 好きな科目

□ 好きな科目については、「体育」(41.1%)、「数学」(32.1%)、「英語」(29.5%)の割合が高い。

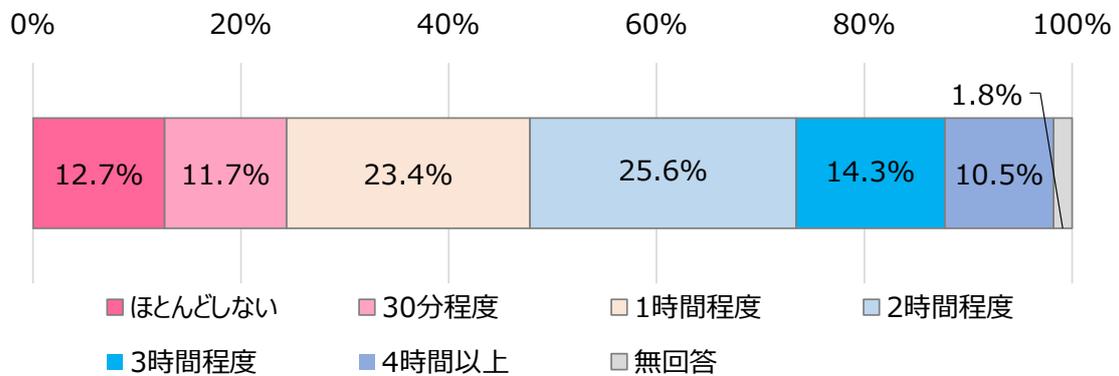
図表 3-13 好きな科目（複数回答）（n=10,256）



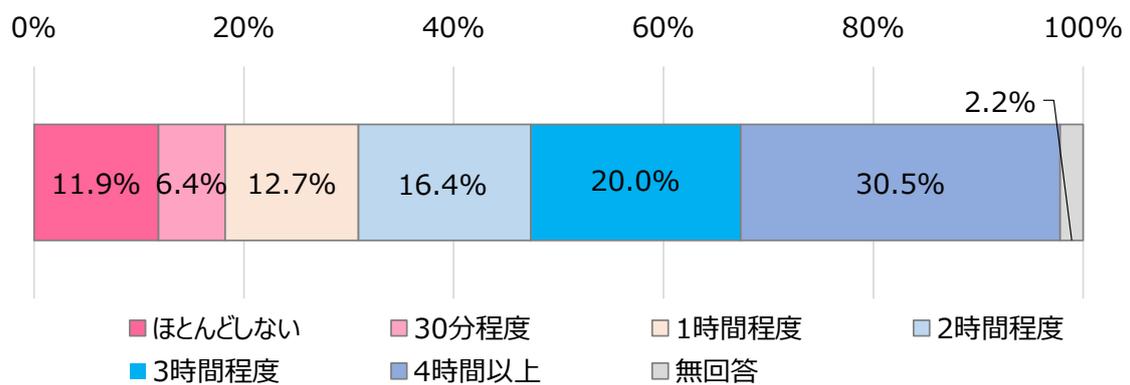
3-3-2 1日の勉強時間

- 1日の勉強時間は、平日は「2時間程度」が25.6%、「1時間程度」が23.4%である。
- 土日は「4時間以上」が30.5%、「3時間」が20.0%である。

図表 3-14 1日の勉強時間（平日）（n=10,256）



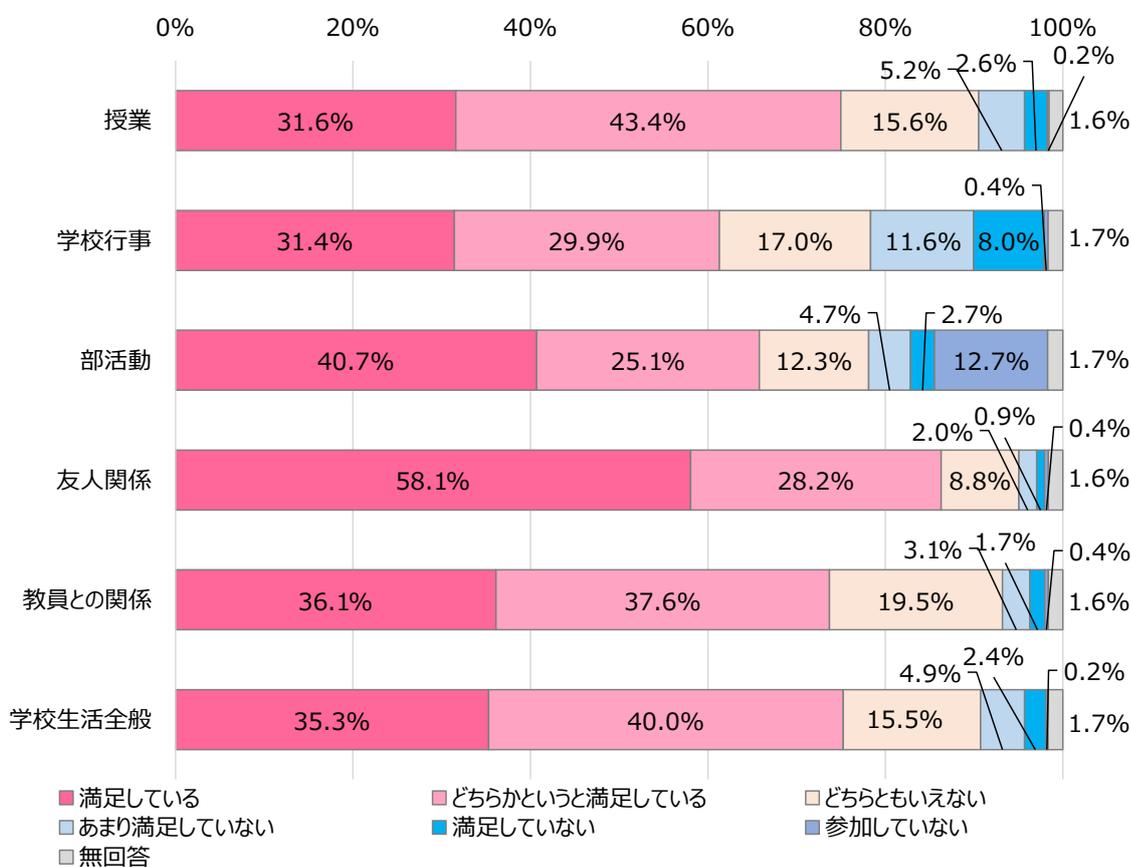
図表 3-15 1日の勉強時間（土日）（n=10,256）



3-3-3 学校生活への満足度

□ 学校生活への満足度は、いずれの項目も「満足している（満足している+どちらかという満足している）」が6~8割と高い。特に、「友人関係」については86.3%が満足している。

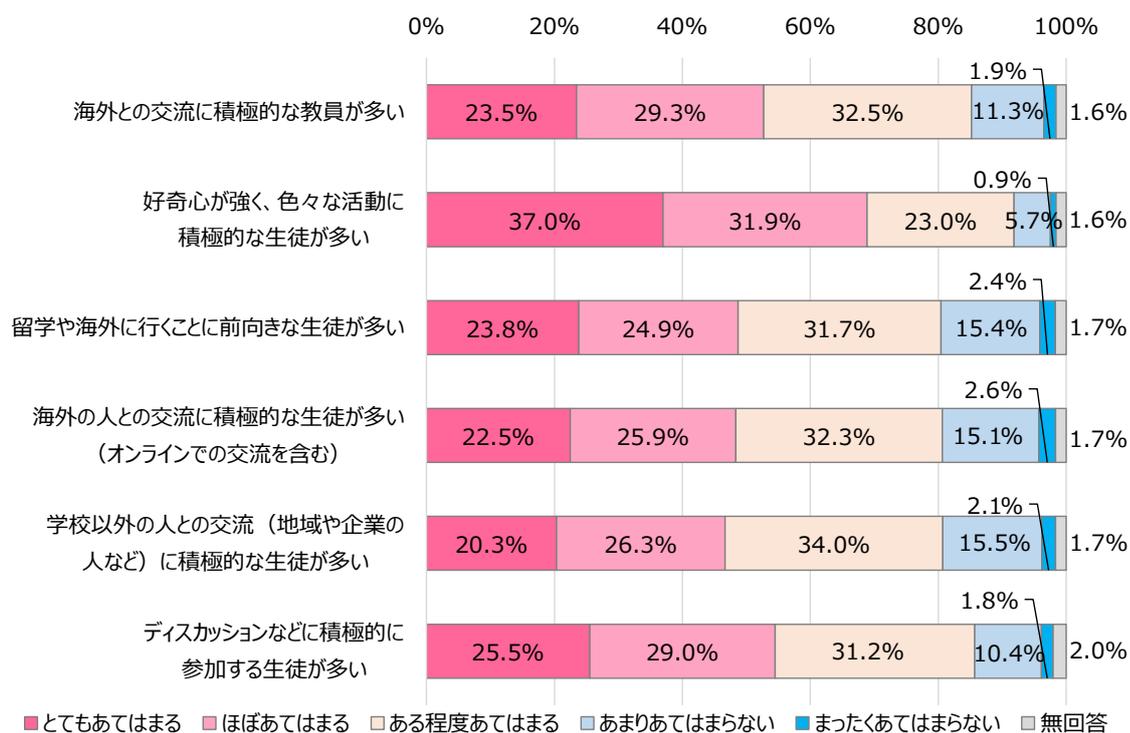
図表 3-16 学校生活への満足度 (n=10,256)



3-3-4 学校及び周囲の生徒について

□ 学校及び周囲の生徒については、「好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い」に「とてもあてはまる」と回答した割合が 37.0% と高い。

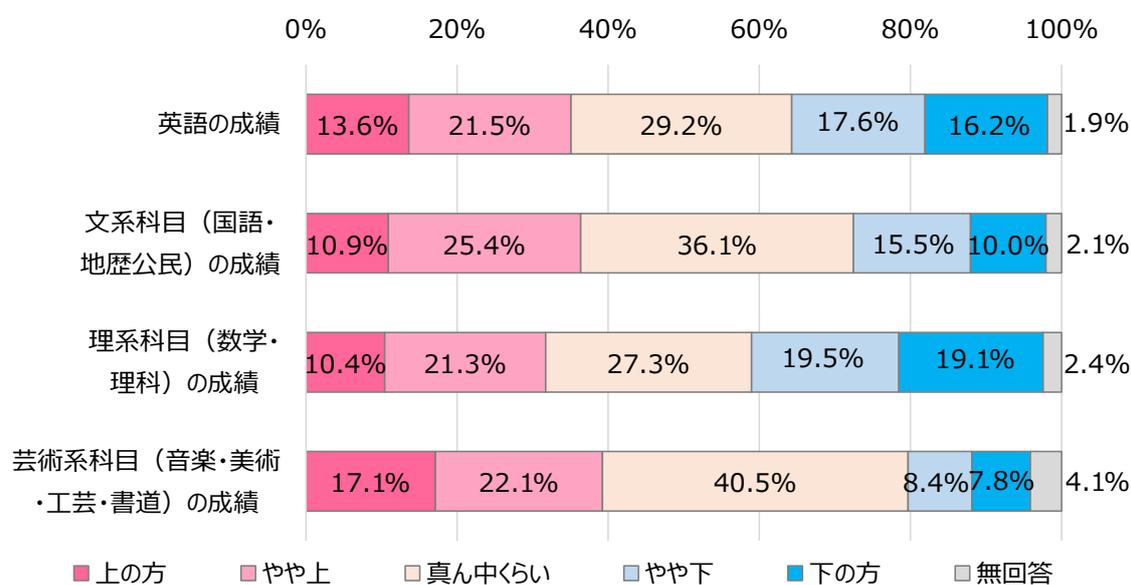
図表 3-17 学校及び周囲の生徒について (n=10,256)



3-3-5 学校の成績について

- 学校の成績については、下記のとおり。「理系科目（数学・理科）の成績」について、「下（やや下+下）」と回答した割合が、他と比べて高い。

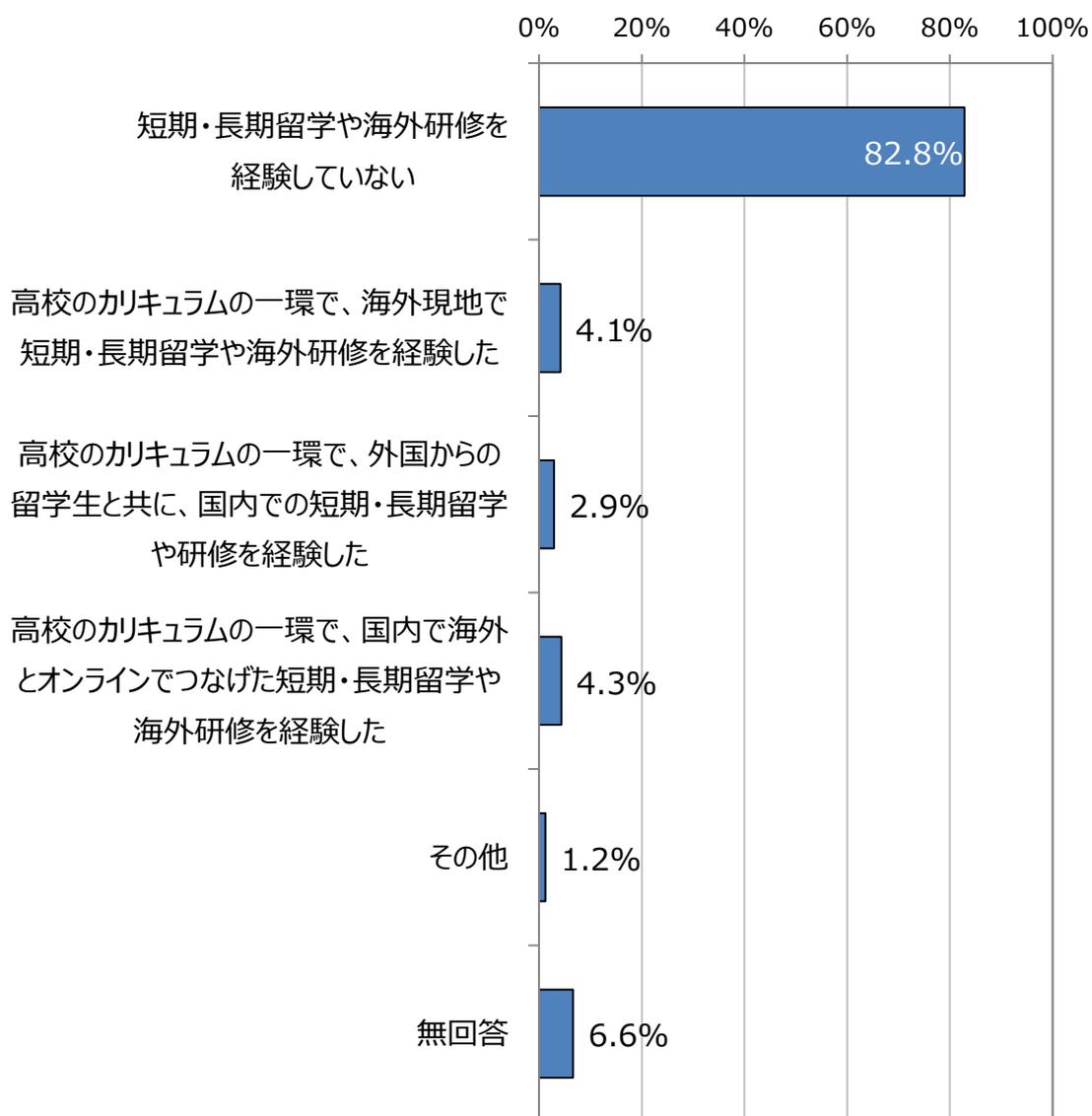
図表 3-18 学校の成績（英語）（n=10,256）



3-3-6 海外研修経験

- 海外研修経験については、コロナ禍の影響もあり、82.8%の生徒が「短期・長期留学や海外研修を経験していない」と回答している。

図表 3-19 海外研修経験 (n=10,256)

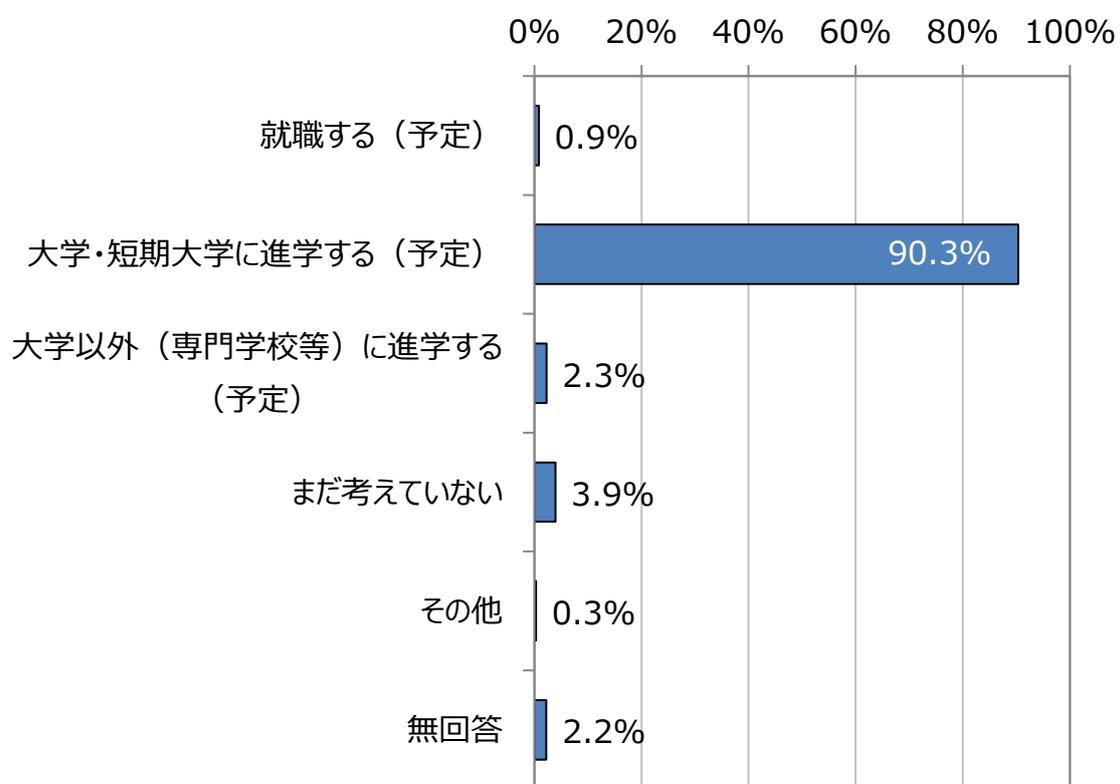


3-4 高校卒業後の進路について

3-4-1 高校卒業後の進路

- 高校卒業後の進路は、90.3%の生徒が「大学・短期大学に進学する（予定）」と回答している。

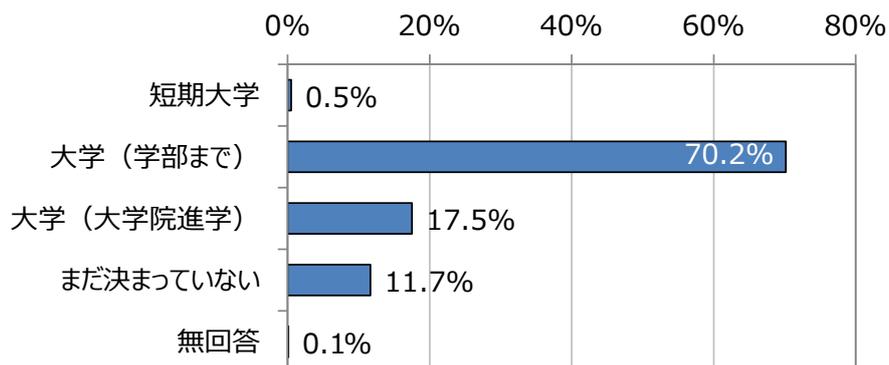
図表 3-20 高校卒業後の進路 (n=10,256)



3-4-2 目指している最終学歴

- 大学・短期大学に進学予定者に、目指している最終学歴をきいたところ、「大学(学部まで)」が70.2%と最も割合が高い。

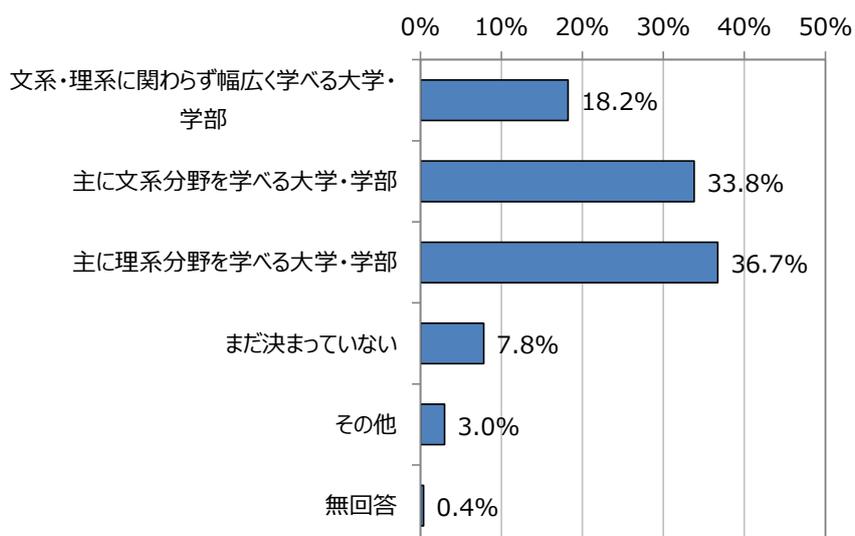
図表 3-21 目指している最終学歴 (n=9,266 : 大学・短期大学に進学する(予定)のみ)



3-4-3 目指している進学先

- 大学・短期大学に進学予定者に、目指している進学先をきいたところ、「主に文系分野を学べる大学・学部」「主に理系分野を学べる大学・学部」がそれぞれ3割強であった。

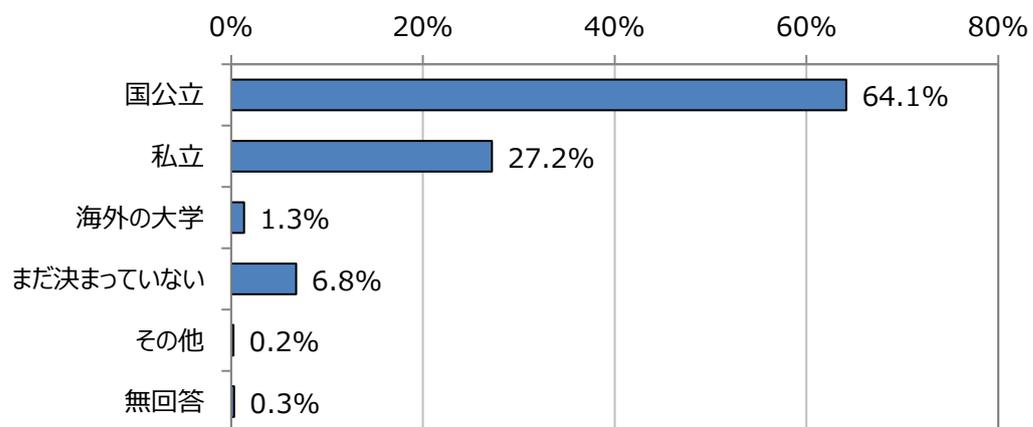
図表 3-22 目指している進学先 (n=9,266 : 大学・短期大学に進学する(予定)のみ)



3-4-4 第一志望の進学先

- 大学・短期大学に進学予定者に、第一志望の進学先をきいたところ、64.1%が「国公立」を志望している。

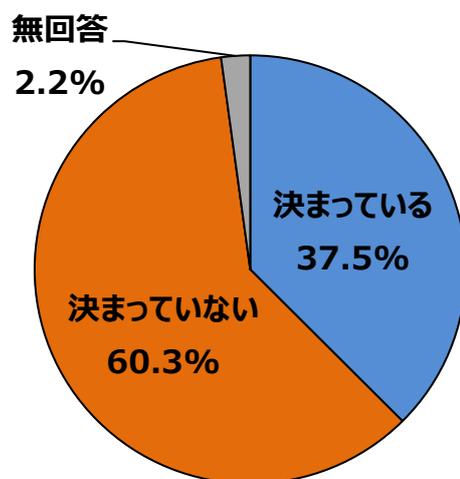
図表 3-23 第一志望の進学先 (n=9,266 : 大学・短期大学に進学する (予定) のみ)



3-4-5 将来なりたい職業

- 将来なりたい職業が決まっているかきいたところ、37.5%が「決まっている」と回答した。

図表 3-24 将来なりたい職業 (n=10,256)

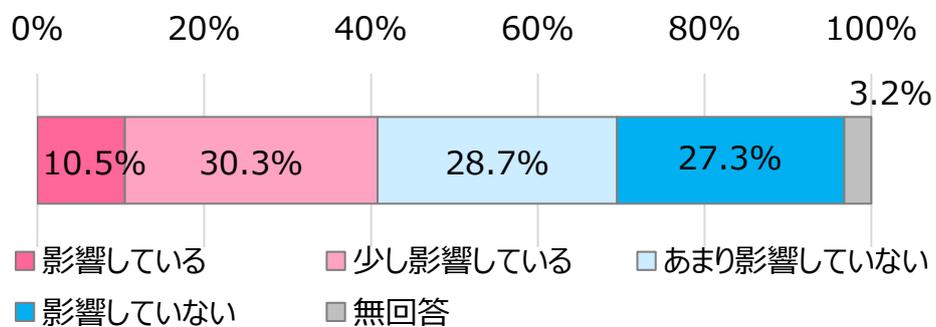


3-4-6 高校卒業後の進路選択ややりたい職業へのWWL事業の経験による影響

- 高校卒業後の進路選択や将来やりたい職業について、WWL事業での経験は、影響しているかきいたところ、40.8%の生徒が「影響している（影響している+少し影響している）」と回答した。

図表 3-25 高校卒業後の進路選択ややりたい職業へのWWL事業の経験による影響

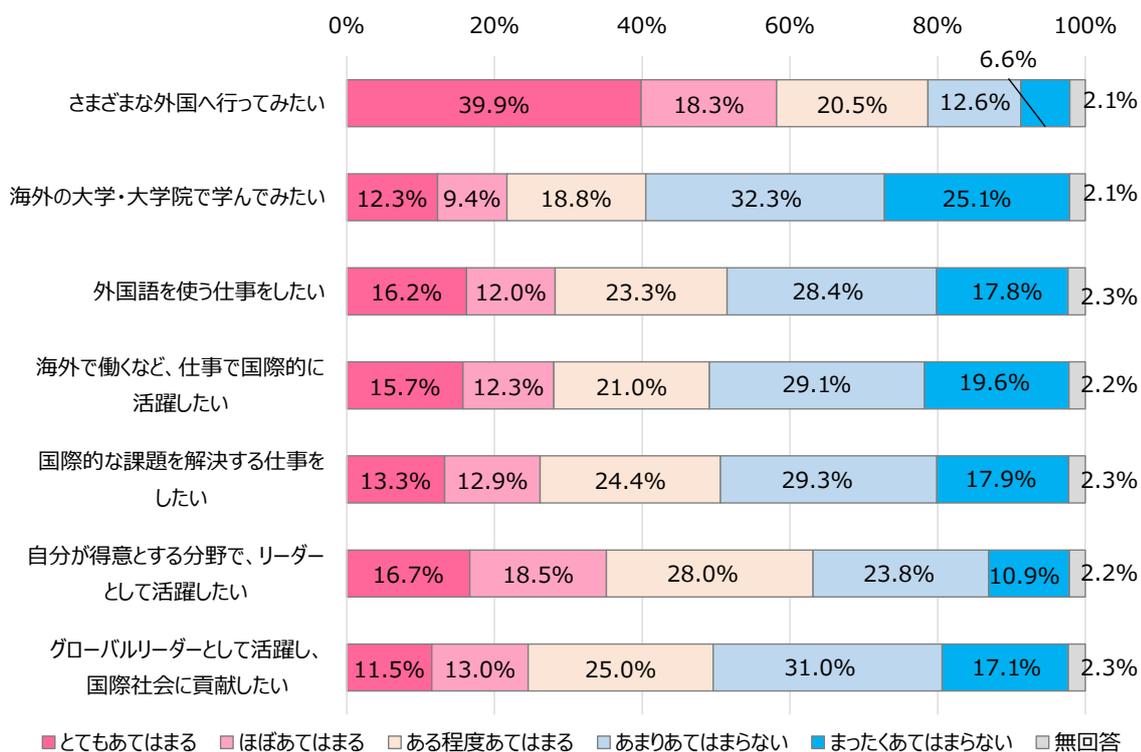
(n=10,256)



3-4-7 将来の希望

□ 将来の希望について聞いたところ、78.7%の生徒が「さまざまな外国へ行ってみたい（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答。

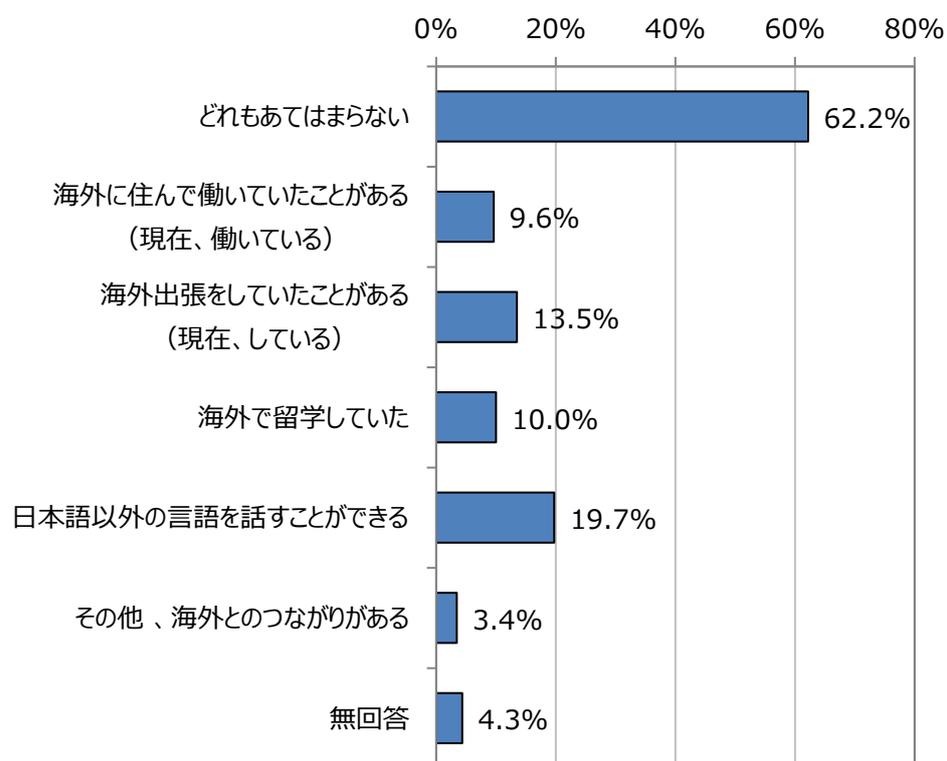
図表 3-26 将来の希望 (n=10,256)



3-4-8 保護者の状況

- 保護者の状況についてきいたところ、「(海外居住や日本語以外の言語を話すなどに) どれもあてはまらない」との回答が、62.2%となっている。

図表 3-27 保護者の状況 (n=10,256)



3-5 WWL 事業参加生徒の成長の状況

3-5-1 分析の枠組み

- WWL 事業の成果目標として、「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」が挙げられている。
- 生徒アンケートにおける下記項目により、WWL 事業参加生徒のこれらの項目の達成度を分析した。

図表 3-28 分析フレーム

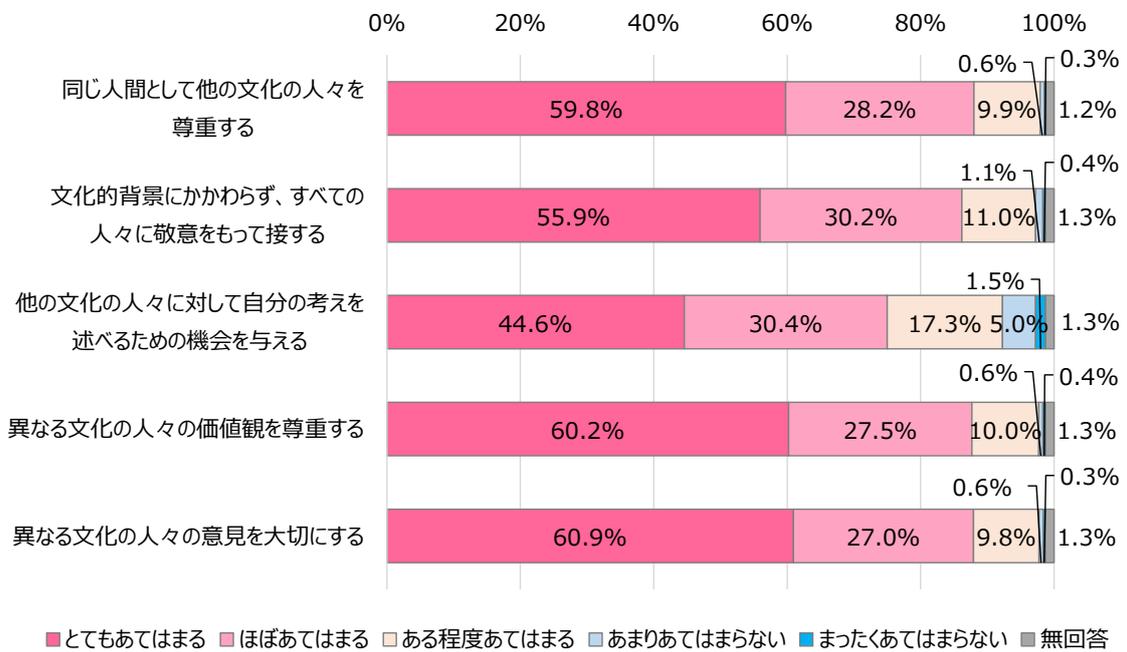
	グローバル コンピテン ス (他文化の人々の尊 重)	グローバル コンピテン ス (グローバル思考)	異文化対応 コンピテン シー	外国語リテラシー	PPDACスキル
出典	OECD-PISA2018	OECD-PISA2018	筑波大学SGH事業調査	-	筑波大学SGH事業調査
質問文	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(4段階)	あなたは、文化の違いから生じる、困った(困惑した)出来事(例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い)に直面した際、その解決のため、以下に挙げる行動をとれると思いますか。(6段階)	次のことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	あなたは、学校のグループワークや総合的な探究(学習)の時間での課題を解くときに、次のようなことができずか。(6段階)
選択肢	同じ人間として他の文化の人々を尊重する	自分自身を地球市民として考えている	必要ならば、最初に決めたことを変える	外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる
	文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	日本語以外の本やインターネットを読むことができる	問題の重要度の根拠を見つけることができる
	他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	複数の視点から問題の原因を考える	外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる
	異なる文化の人々の価値観を尊重する	劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	複数の選択肢を考える	英語でメールや文章が書ける	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる
	異なる文化の人々の意見を大切ににする	世界の問題について、自分は何かできる	相手が意見を述べやすいように心がける	社会問題などについて英語でディスカッションできる	問題解決に向けて仮説を立てることができる
		地球環境について、気にかけることは重要である	相手との協力関係を築くように心がける		問題解決に合ったデータや情報を選択できる
			反対意見にも耳を傾ける		集めたデータや情報の正確さがわかる
					分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
				提案を適切にプレゼンテーションできる	
				自分の発表に対する質問に適切に回答できる	

3-5-2 各項目の実態

(1) グローバルコンピテンス (多文化の人々の尊重)

□ グローバルコンピテンス (多文化の人々の尊重) については、いずれの項目も、あてはまる (とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる) の割合が 9 割を超えている。

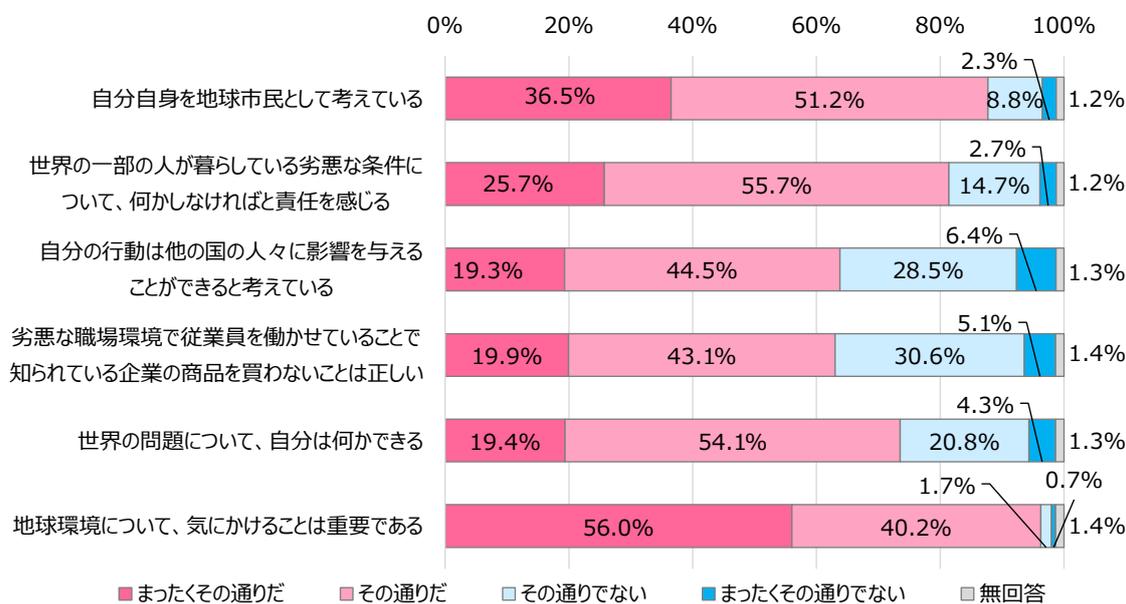
図表 3-29 グローバルコンピテンス (多文化の人々の尊重) (n=10,256)



(2)グローバルコンピテンス (グローバル思考)

□ グローバルコンピテンス (グローバル思考) については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ (まったくその通りだ+その通りだ)」と回答した割合は、96.2%と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」が 87.7%となっている。

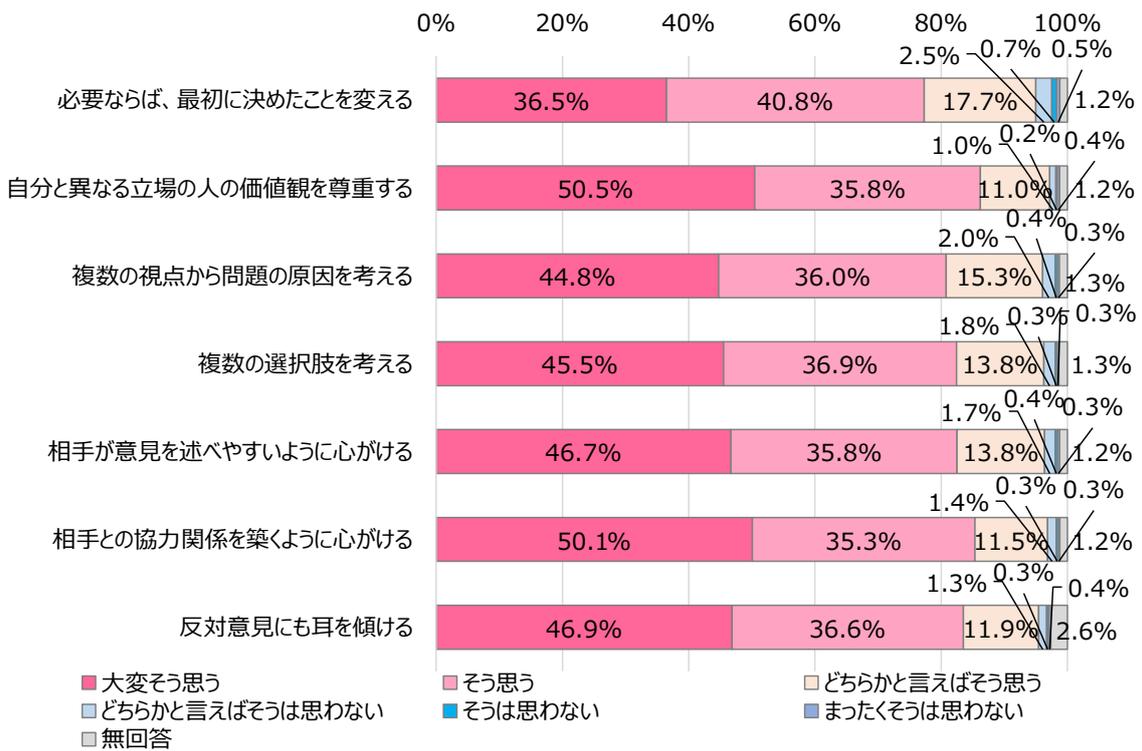
図表 3-30 グローバルコンピテンス (グローバル思考) (n=10,256)



(3)異文化対応コンピテンシー

□ 異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も 9 割を超えて「そう思う(大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う)」と回答している。

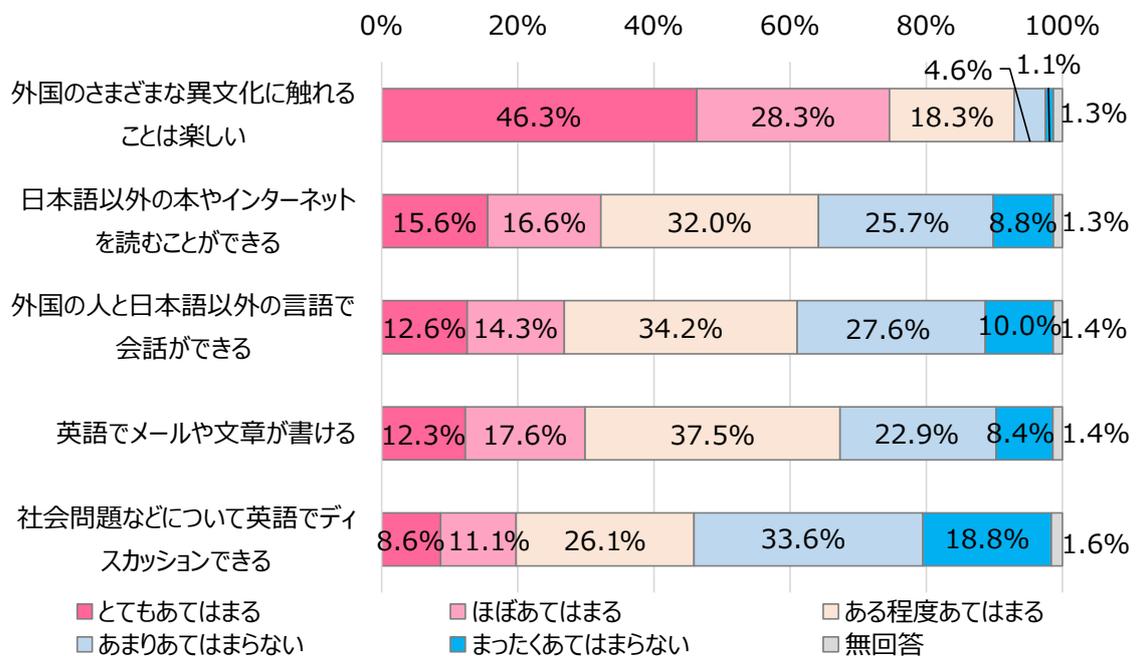
図表 3-31 異文化対応コンピテンシー (n=10,256)



(4)外国語リテラシー

- ❑ 外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が 92.9%と高い。
- ❑ その他の項目については 6 割程度にとどまり、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、45.8%となっている。

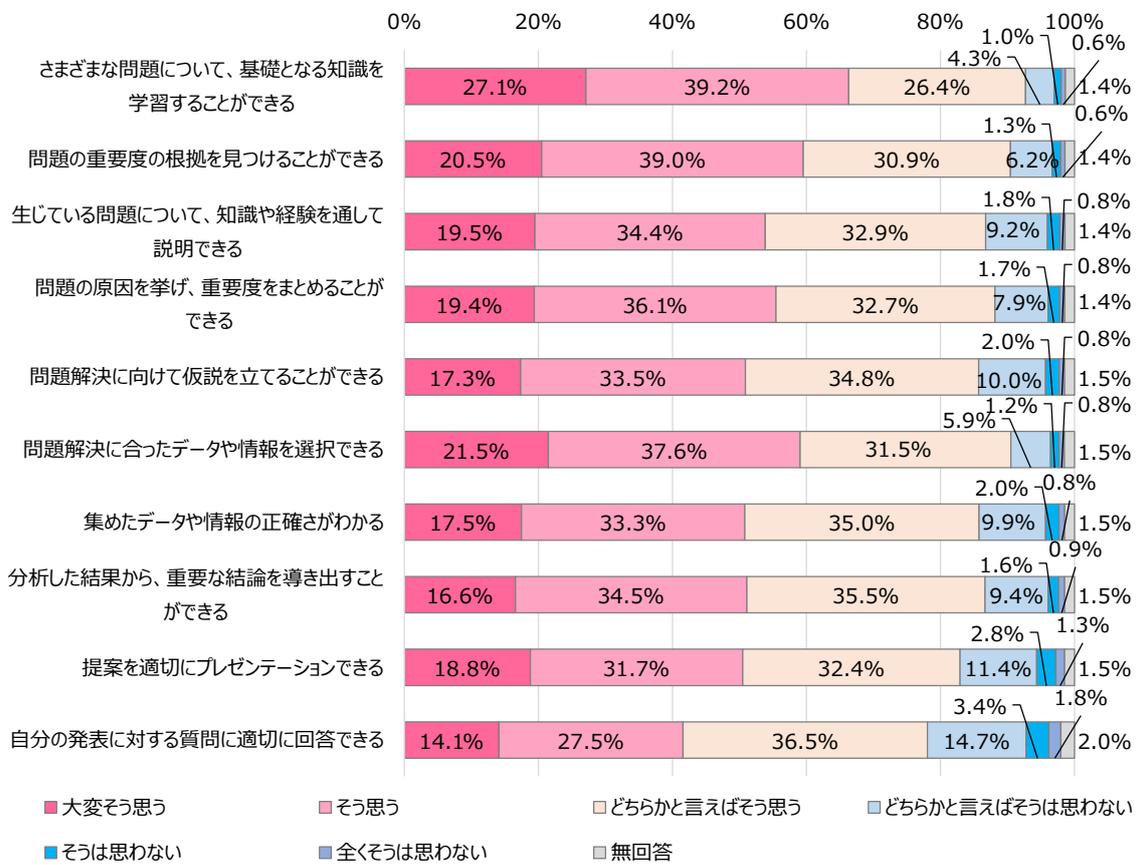
図表 3-32 外国語リテラシー (n=10,256)



(5) PPDAC スキル

□ PPDAC スキルについては、「さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる」「問題解決に合ったデータや情報を選択できる」に、「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」と回答した割合は 9 割を超えて高い。

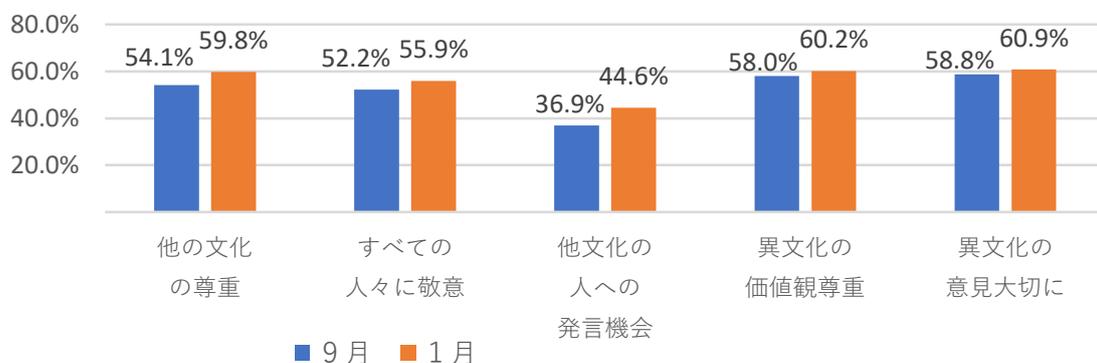
図表 3-33 PPDAC スキル (n=10,256)



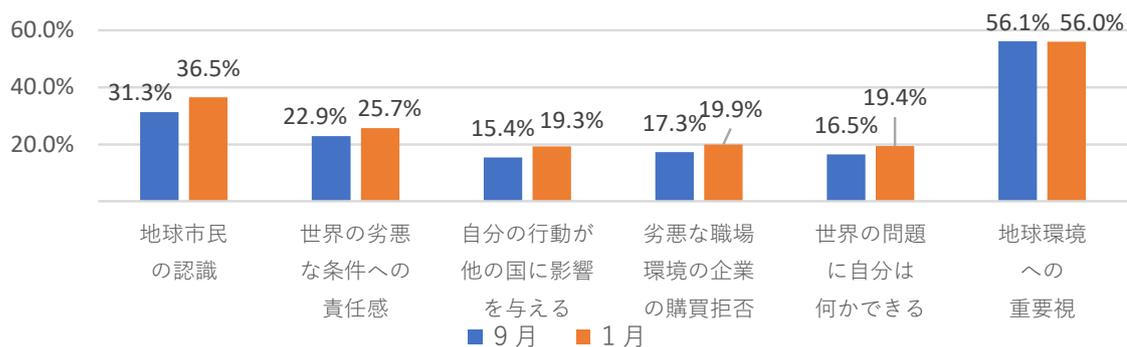
3-5-3 9月から1月にかけての成長

- 各項目の「とてもあてはまる」「大変そう思う」の割合について、第1回（9月実施）と第2回（1月実施）の結果を比較した。
- グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDACに関わるいずれの項目も、令和3年9月と比較して令和4年1月の方が、わずかではあるが割合が高い。4か月間での成長がみられる。

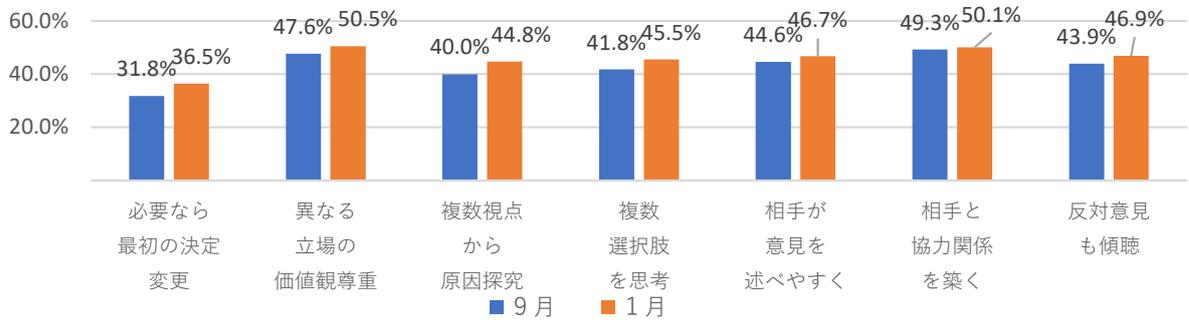
図表 3-34 グローバルコンピテンシス（他文化の人々の尊重）（n=10,256）



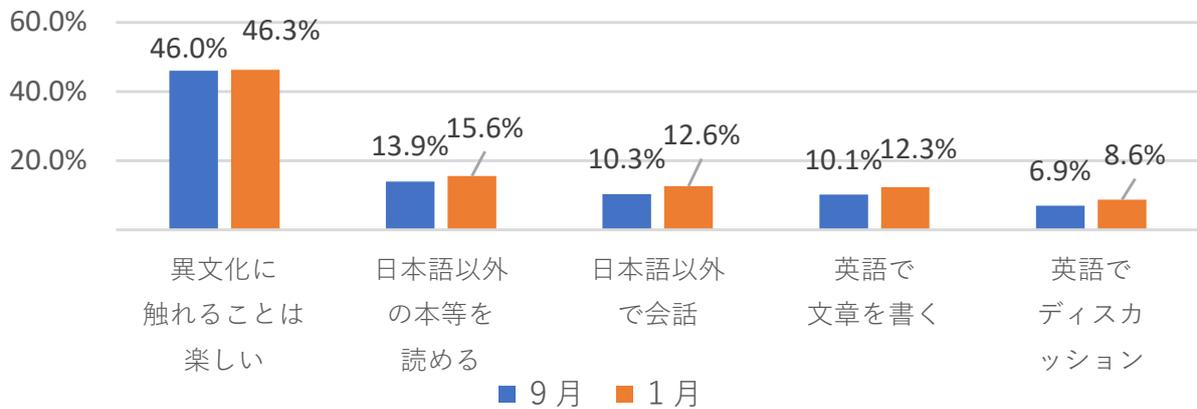
図表 3-35 グローバルコンピテンシス（グローバル思考）（n=10,256）



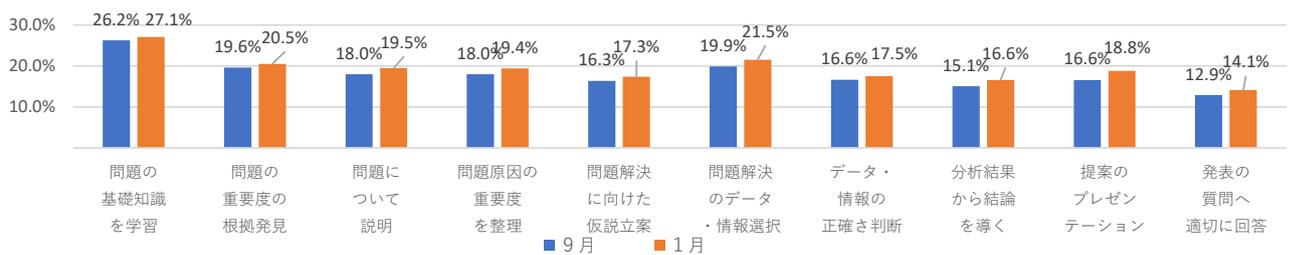
図表 3-36 異文化対応コンピテンシー (n=10,256)



図表 3-37 外国語リテラシー (n=10,256)



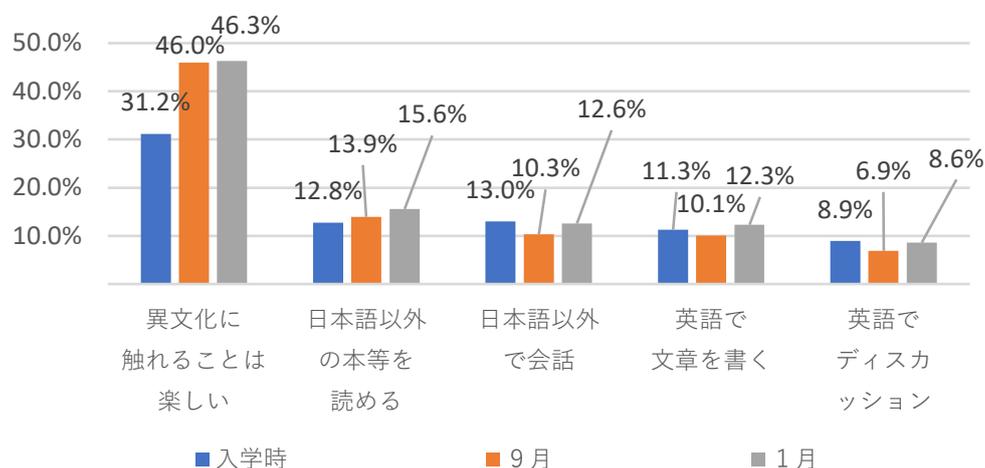
図表 3-38 PPDACスキル (n=10,256)



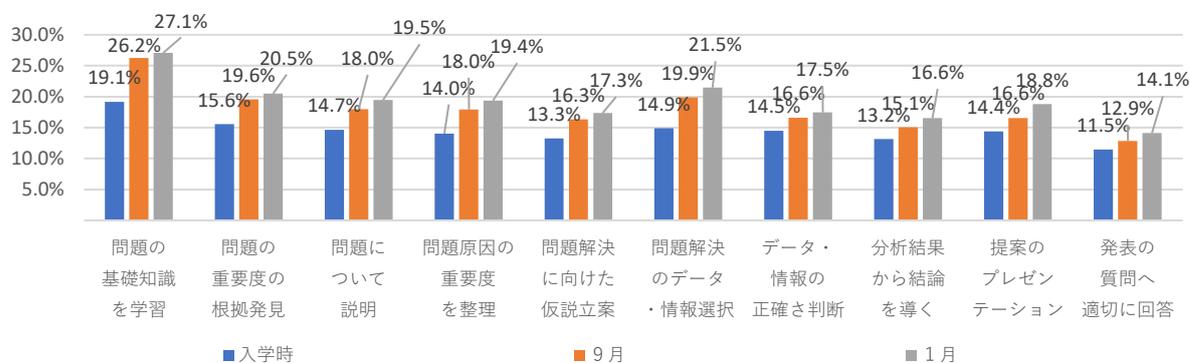
3-5-4 入学時との比較

- 外国語リテラシー、PPDAC スキルについては、第 2 回（1 月実施）アンケートにおいて、高校入学時の状況もきいた。そこで、高校入学時、9 月、1 月の 3 時点の比較を行った。
- その結果、多くの項目について、高校入学時、9 月、1 月と外国語リテラシー、PPDAC スキルが身につけている割合が高まっている。

図表 3-39 外国語リテラシー (n=10,256)



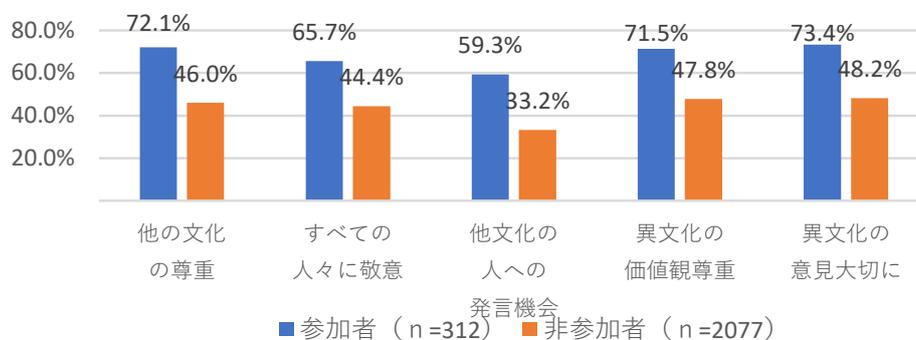
図表 3-40 PPDAC スキル (n=10,256)



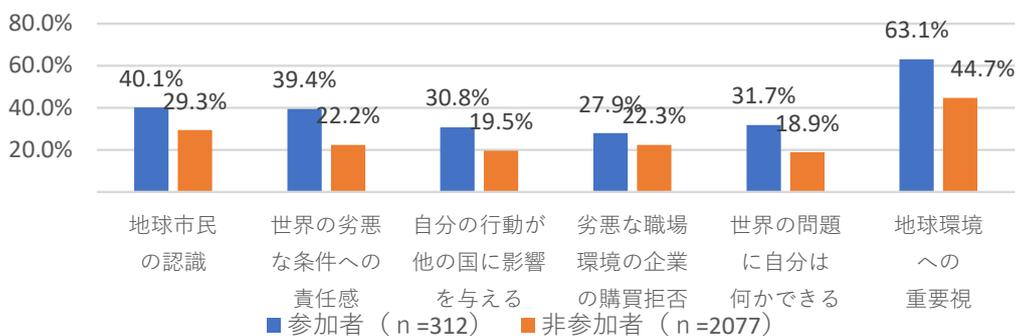
3-5-5 非参加者との比較

- 次に、拠点校で WWL 事業に参加していない生徒がいる 5 校の中で、WWL 事業参加者と非参加者の比較をした。
- 同じ拠点校において、WWL 事業に参加している生徒としていない生徒を比較した場合、グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDAC に関わるいずれの項目も、参加した生徒の方が高い割合であった。

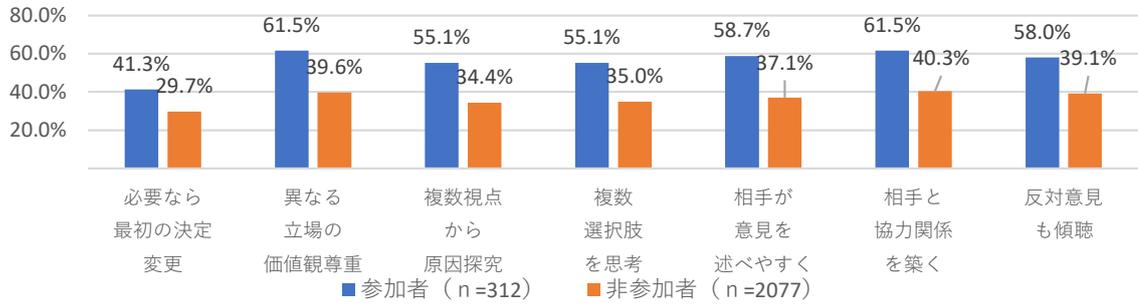
図表 3-41 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重)



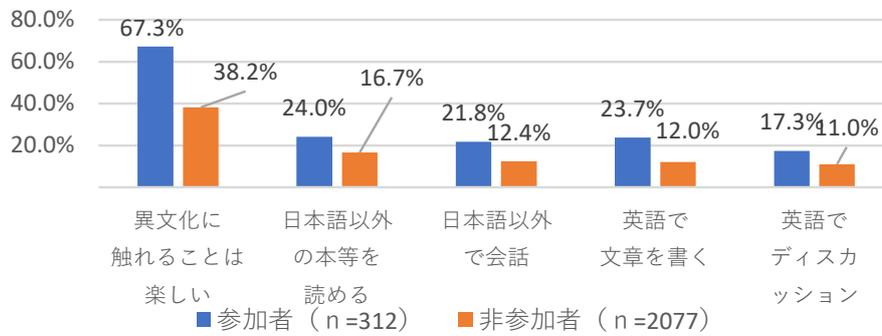
図表 3-42 グローバルコンピテンス (グローバル思考)



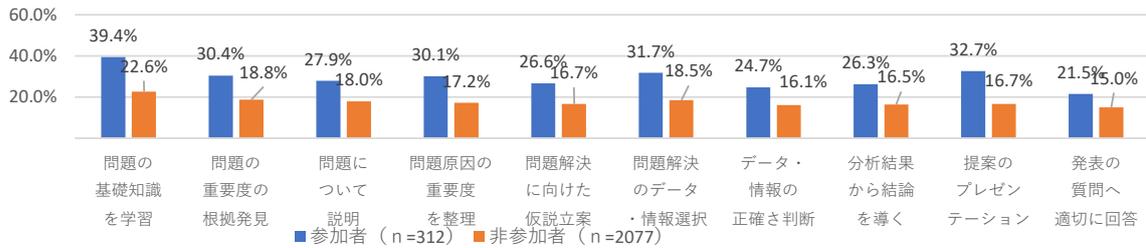
図表 3-43 異文化対応コンピテンシー



図表 3-44 外国語リテラシー



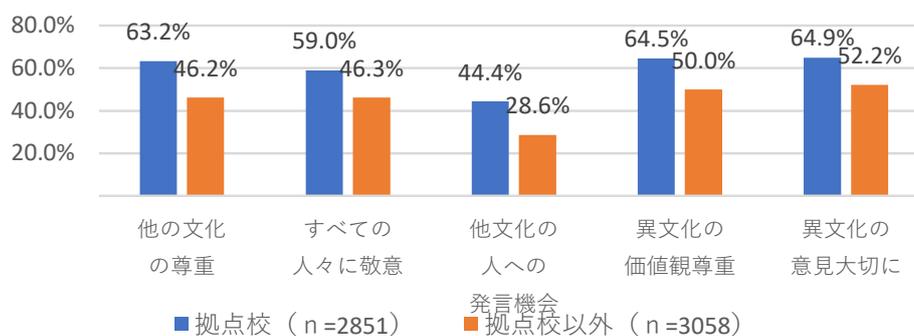
図表 3-45 PPDAC スキル



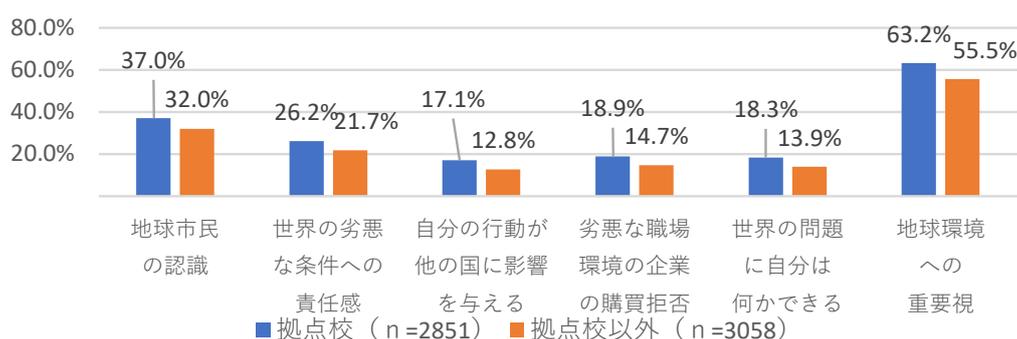
3-5-6 他の高等学校との比較

- 次に、拠点校（公立校）のある地域の拠点校以外の公立高校（7地域13校）の高校1、2年生にも同様のアンケートを実施した。この結果を、同地域のWWL事業の公立拠点校の生徒（7校、1、2年生のみ）と比較した。
- 拠点校以外の高等学校と比較した場合、グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDACに関わるいずれの項目も、カリキュラム開発拠点校の生徒の方が割合が高い。

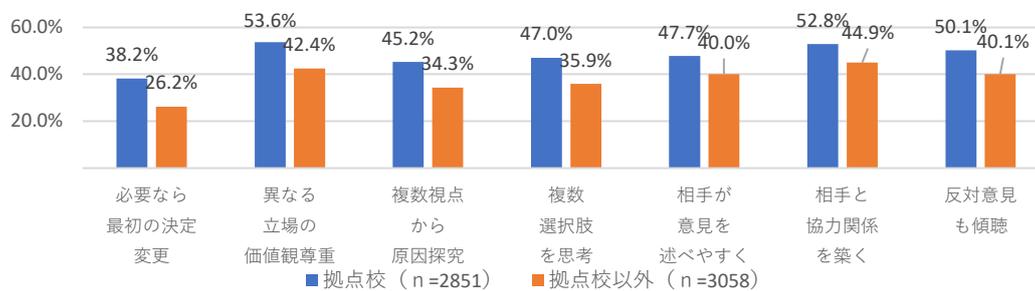
図表 3-46 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）



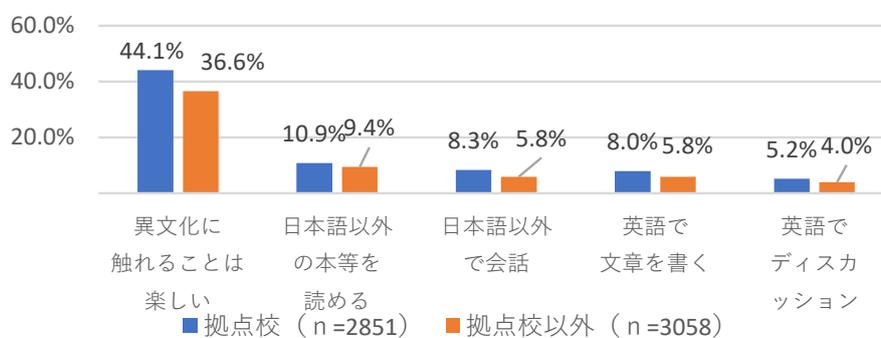
図表 3-47 グローバルコンピテンス（グローバル思考）



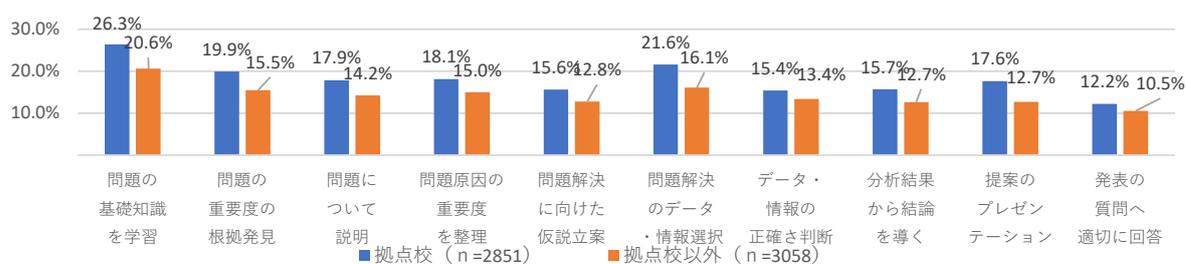
図表 3-48 異文化対応コンピテンシー



図表 3-49 外国語リテラシー



図表 3-50 PPDAC スキル



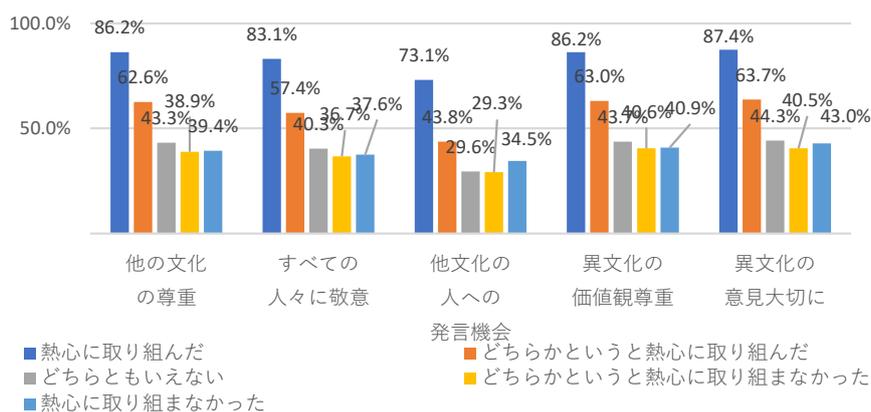
※拠点校は、条件を同じにするため、他の高等学校がある地域の公立学校の1, 2年のみを抽出。

3-6 熱心度による違い

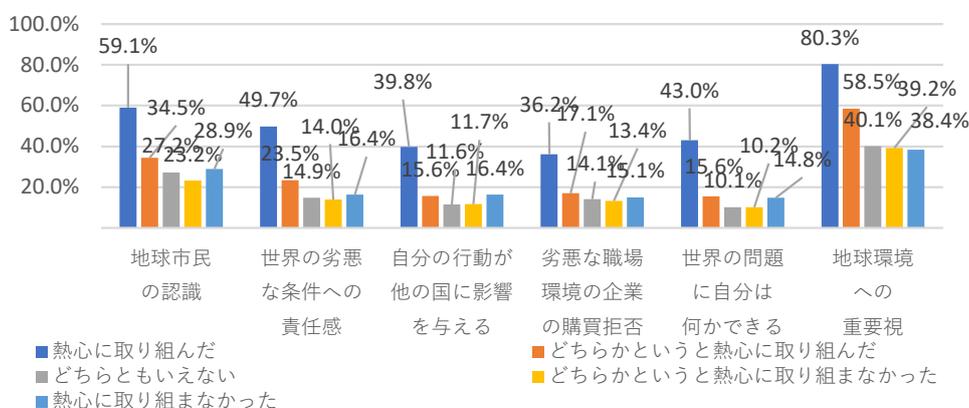
(1) 熱心度による習熟度の差

- WWL 事業の総合熱心度別に、グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDAC の比較を行った。
- その結果、「熱心に取り組んだ」生徒が、他の生徒に比べて、グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDAC の各項目の割合が高い。能力の獲得は、WWL 事業への取組みの熱心度で大きな差があることがわかる。

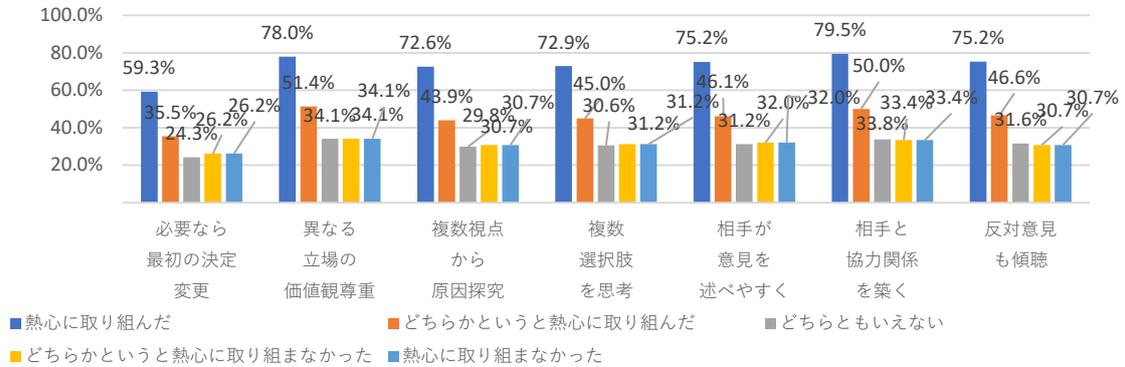
図表 3-51 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重)



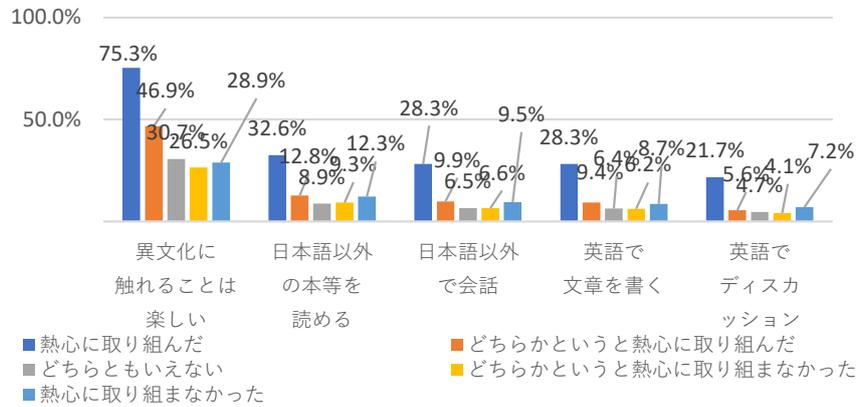
図表 3-52 グローバルコンピテンス (グローバル思考)



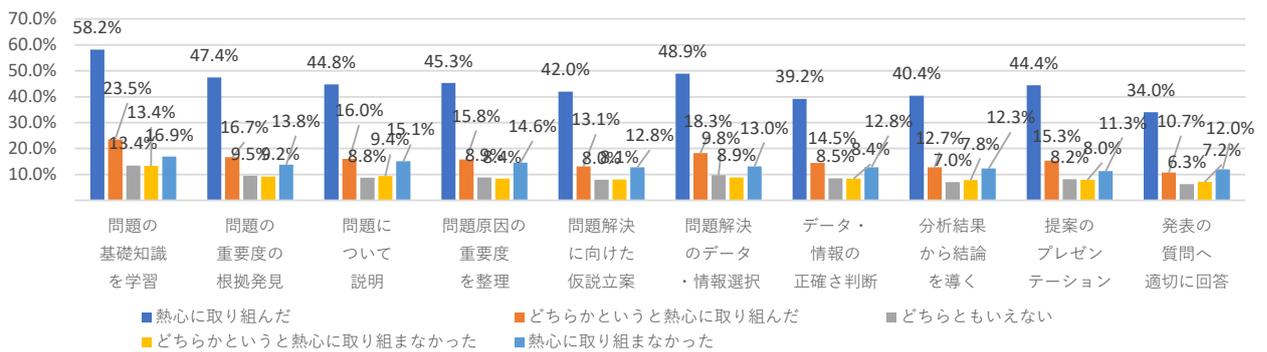
図表 3-53 異文化対応コンピテンシー



図表 3-54 外国語リテラシー



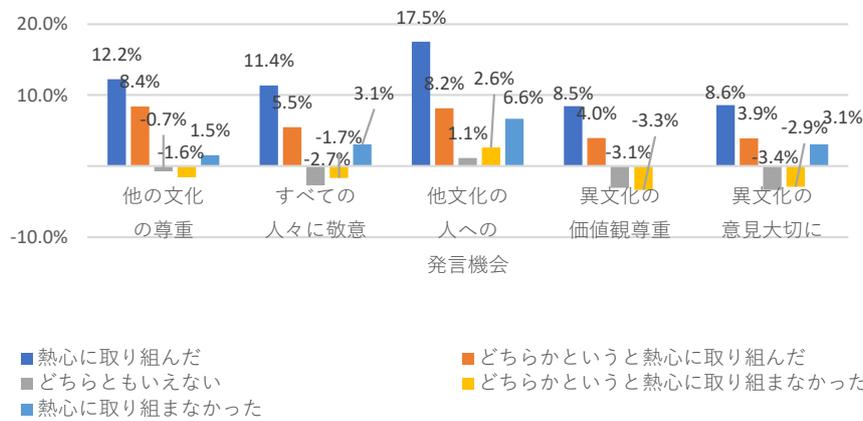
図表 3-55 PPDAC スキル



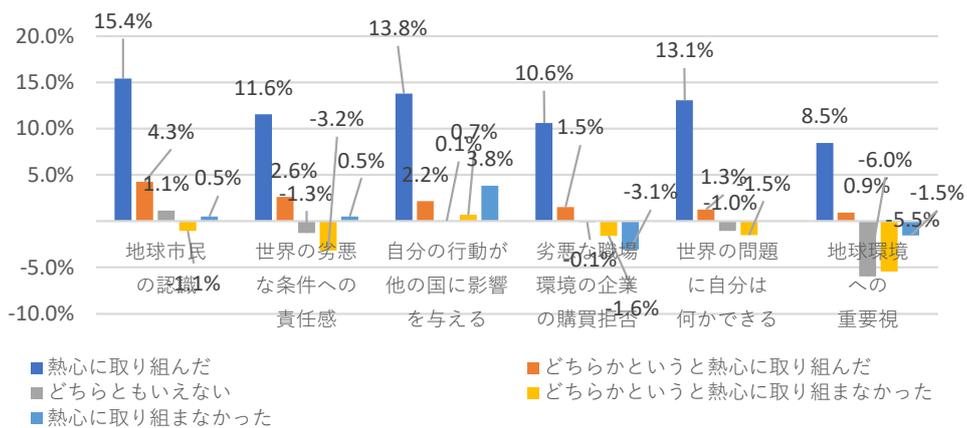
(2)熱心度による成長度合いの差 (9月と1月の比較)

- WWL 事業の総合熱心度別に、グローバル・マインドセット／コンピテンシー、PPDAC の9月と1月の比較を行った。
- 結果、「熱心に取り組んだ」生徒は、9月から各項目10ポイント程度割合が高くなっているが、他の生徒は変化が小さい。WWL への熱心さ（取組み姿勢）によって、成長度が大きく異なる。

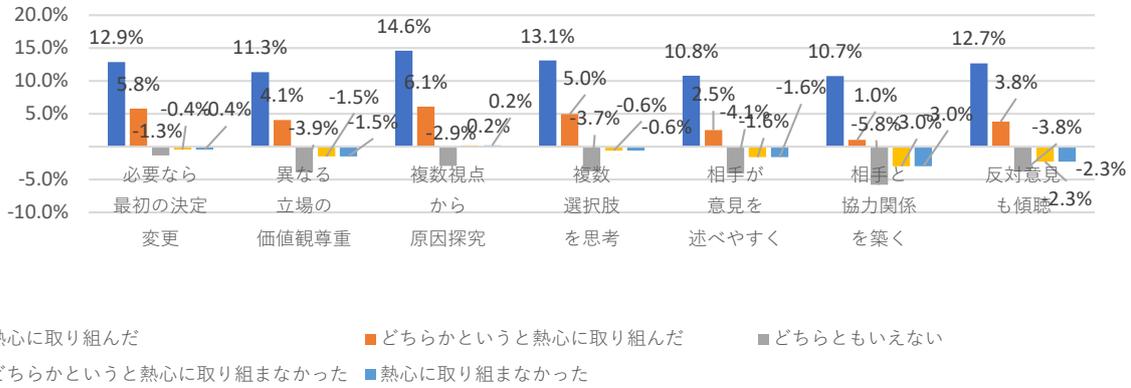
図表 3-56 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重)



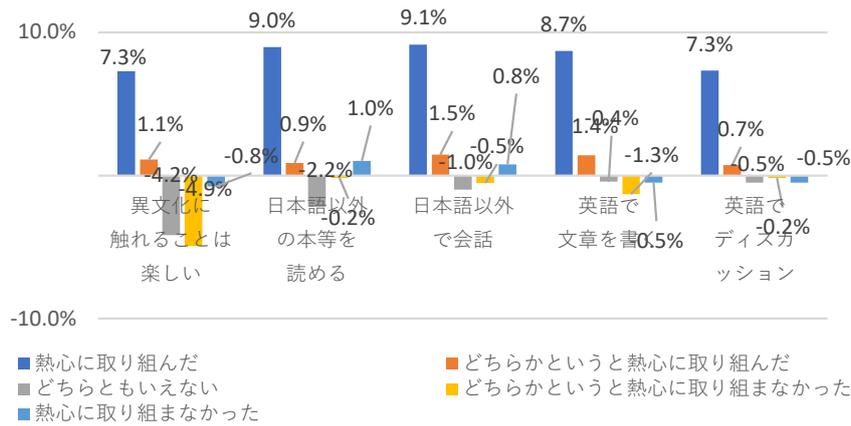
図表 3-57 グローバルコンピテンス (グローバル思考)



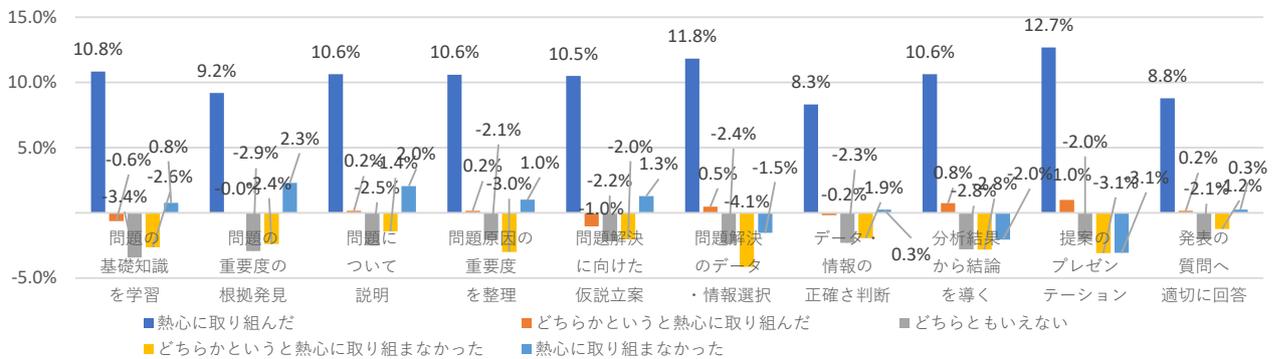
図表 3-58 異文化対応コンピテンシー



図表 3-59 外国語リテラシー



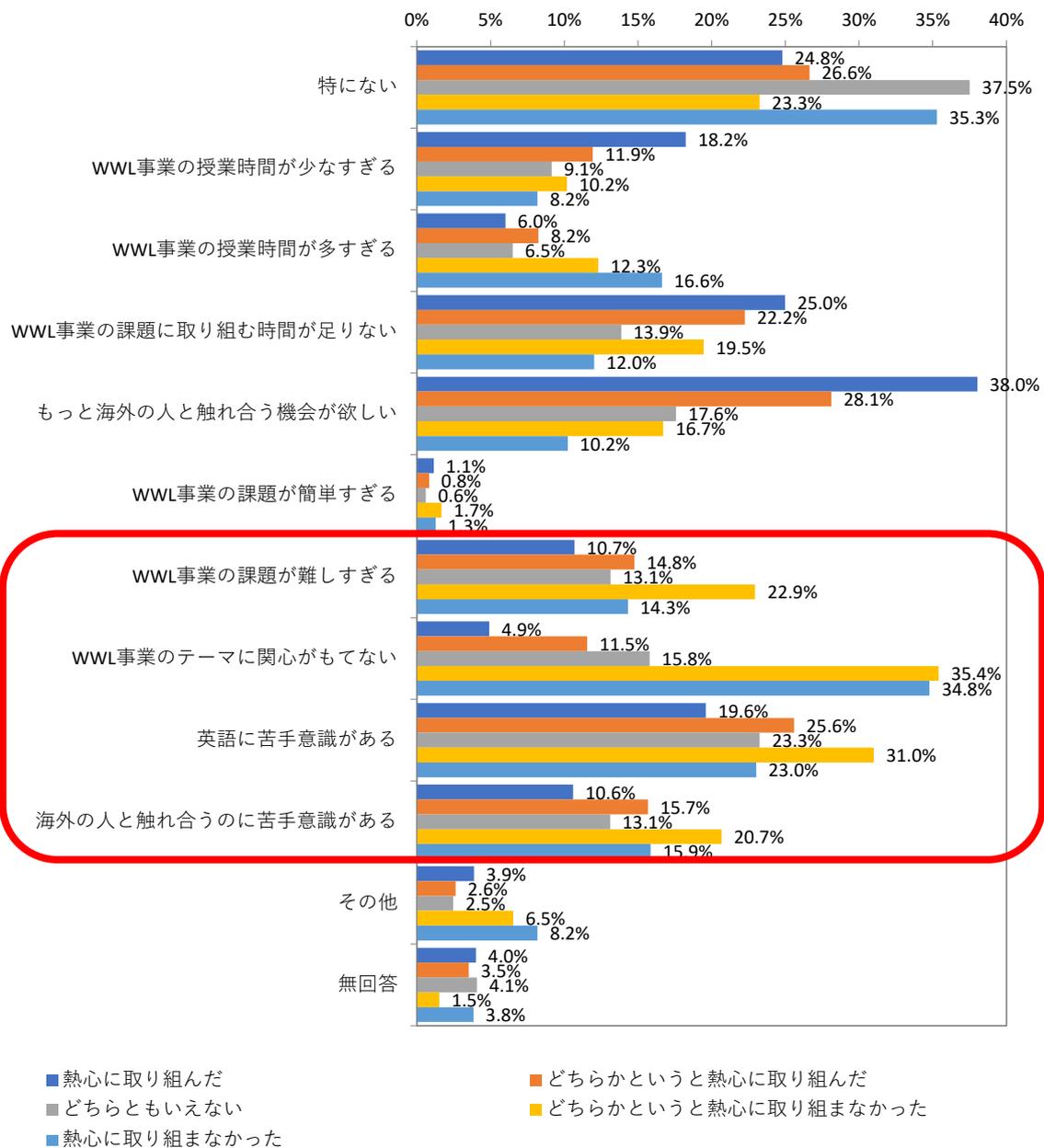
図表 3-60 PPDACスキル



(3) 課題感の違い

- WWL 事業に熱心に取り組んだ生徒は「海外の人と触れ合う機会が欲しい」「授業時間が少ない」「時間が足りない」という問題意識を持っている。
- 熱心に取り組んでいない生徒は「テーマに関心が持てない」「英語に苦手意識」「課題が難しい」「海外の人と触れ合うのに苦手意識」という問題意識を持っている。

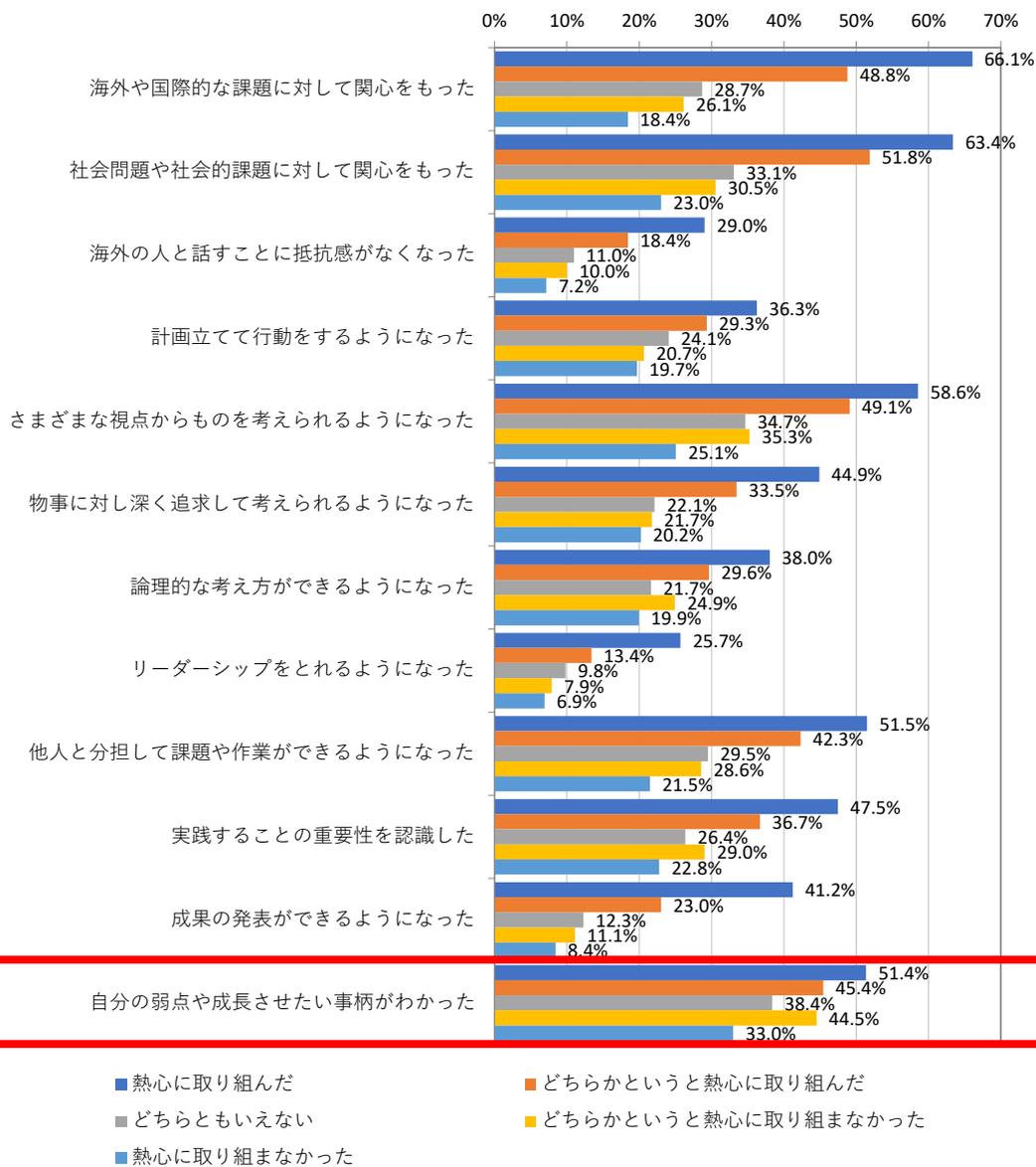
図表 3-61 WWL 事業の総合熱心度別 WWL 事業の問題点や困っていること



(4)成長内容の違い

- ほとんどの項目で、WWL 事業への熱心度が高いほど、身についた・成長した割合が高い。
- ただし、「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」は、熱心度に関わらず割合が高めとなっている。熱心度が低い生徒でも、WWL 事業は、自分を見つめ直す機会になっている可能性がある。

図表 3-62 WWL 事業の総合熱心度別 高校生活を通じて身についた・成長したこと



第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査

4-1 調査概要

4-1-1 調査対象

カリキュラム開発拠点校 28 校に勤務する全教員 1,732 名

4-1-2 調査方法

Web アンケート

4-1-3 調査時期

令和 3 年 12 月 23 日～令和 4 年 1 月 24 日

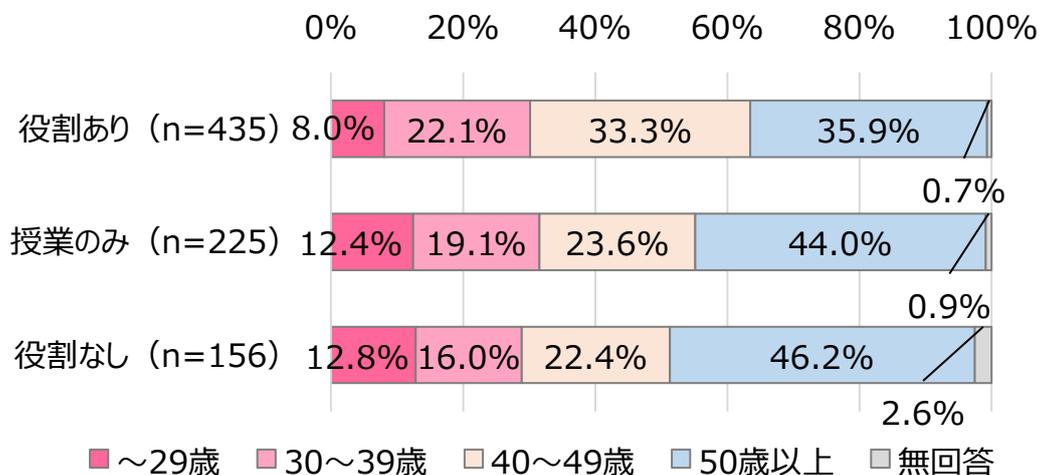
4-1-4 回収状況

845 件（回収率 48.8%）

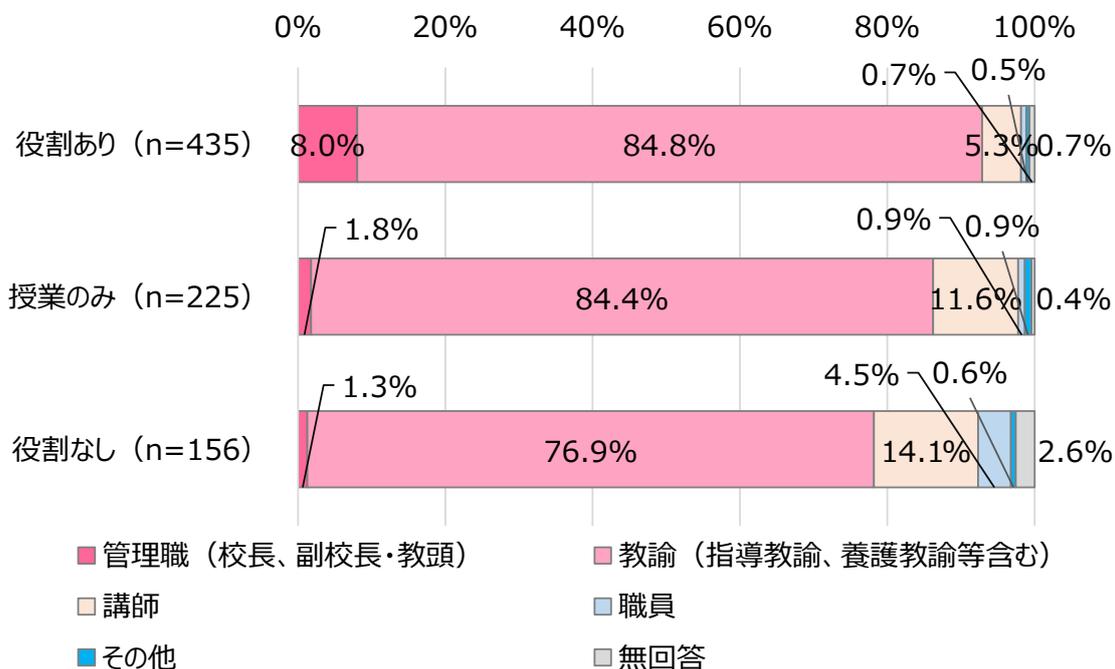
なお、本報告書では、回答者を「WWL 事業の役割あり」「授業のみ関わった」「役割なし」に分けて分析した。

4-1-5 回答者属性

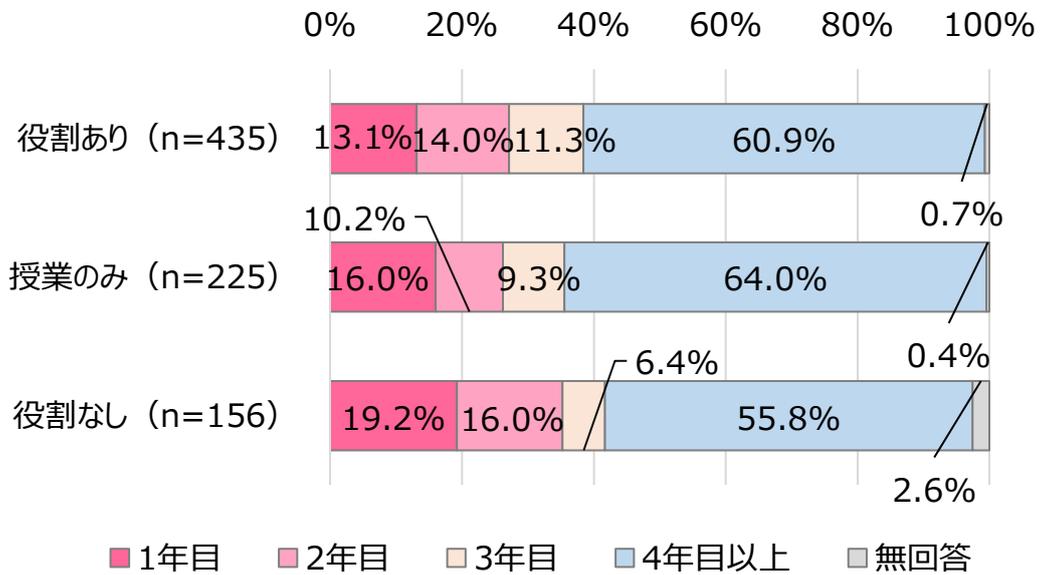
図表 4-1 年齢



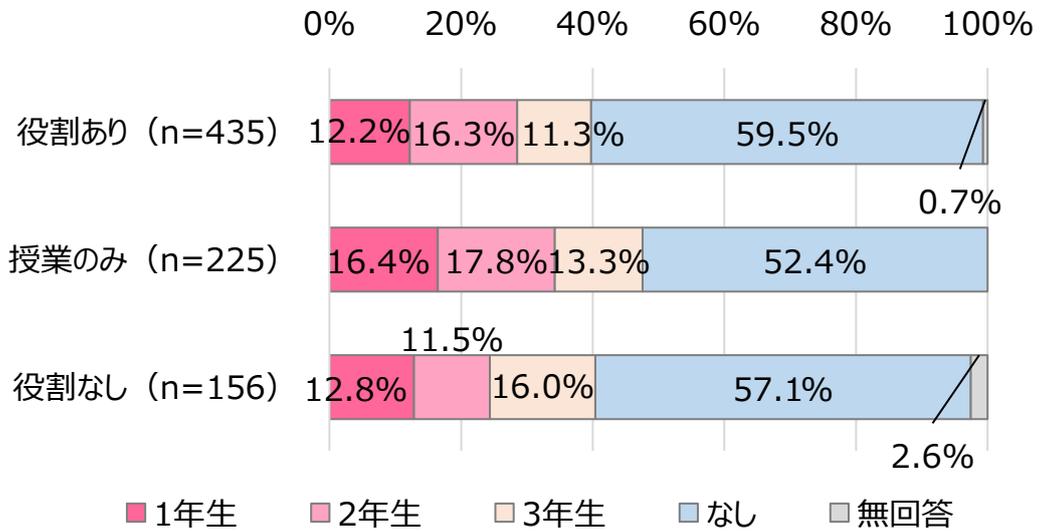
図表 4-2 職名



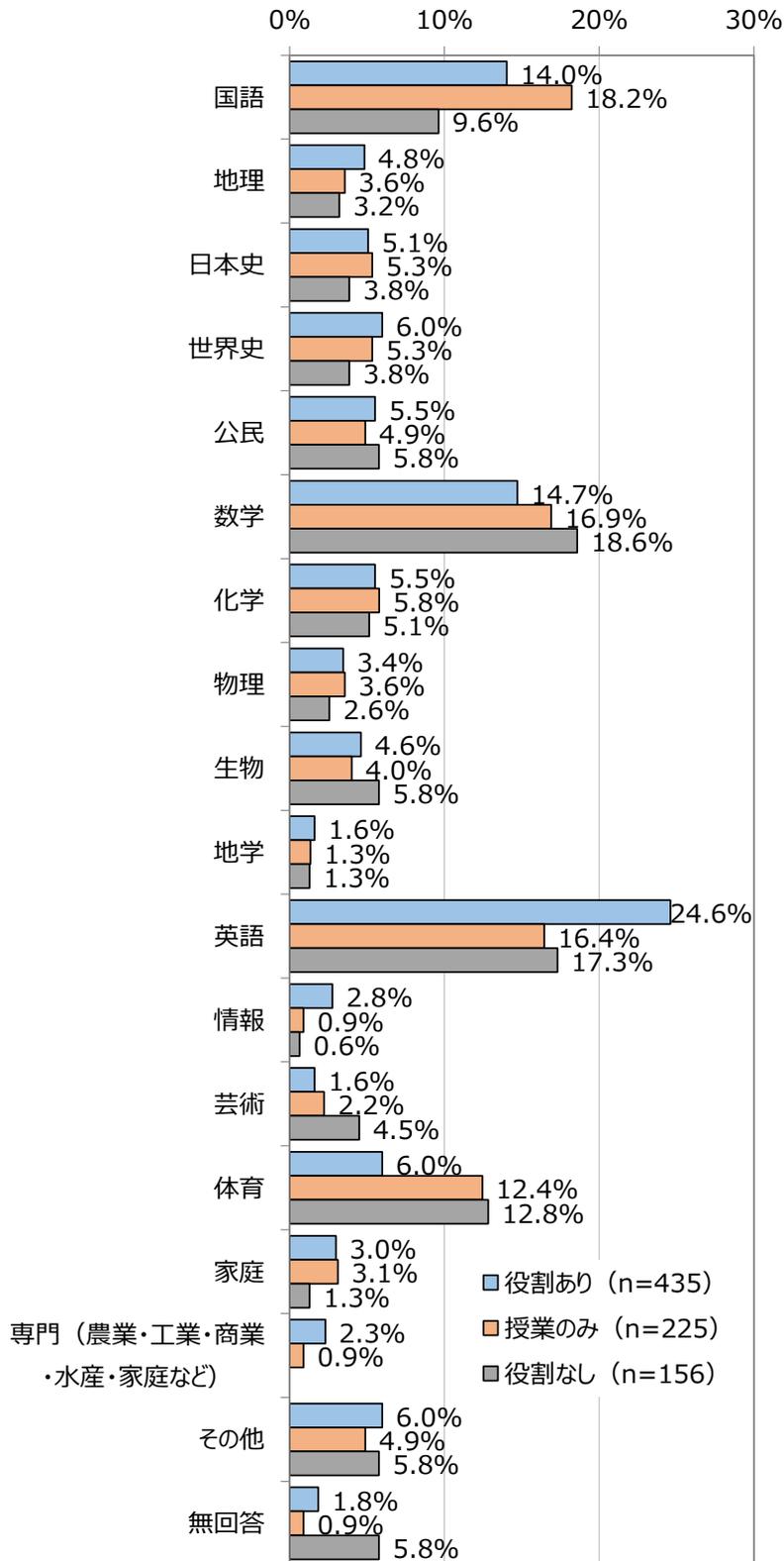
図表 4-3 現在校の勤務期間



図表 4-4 学級担任の有無



図表 4-5 担当教科

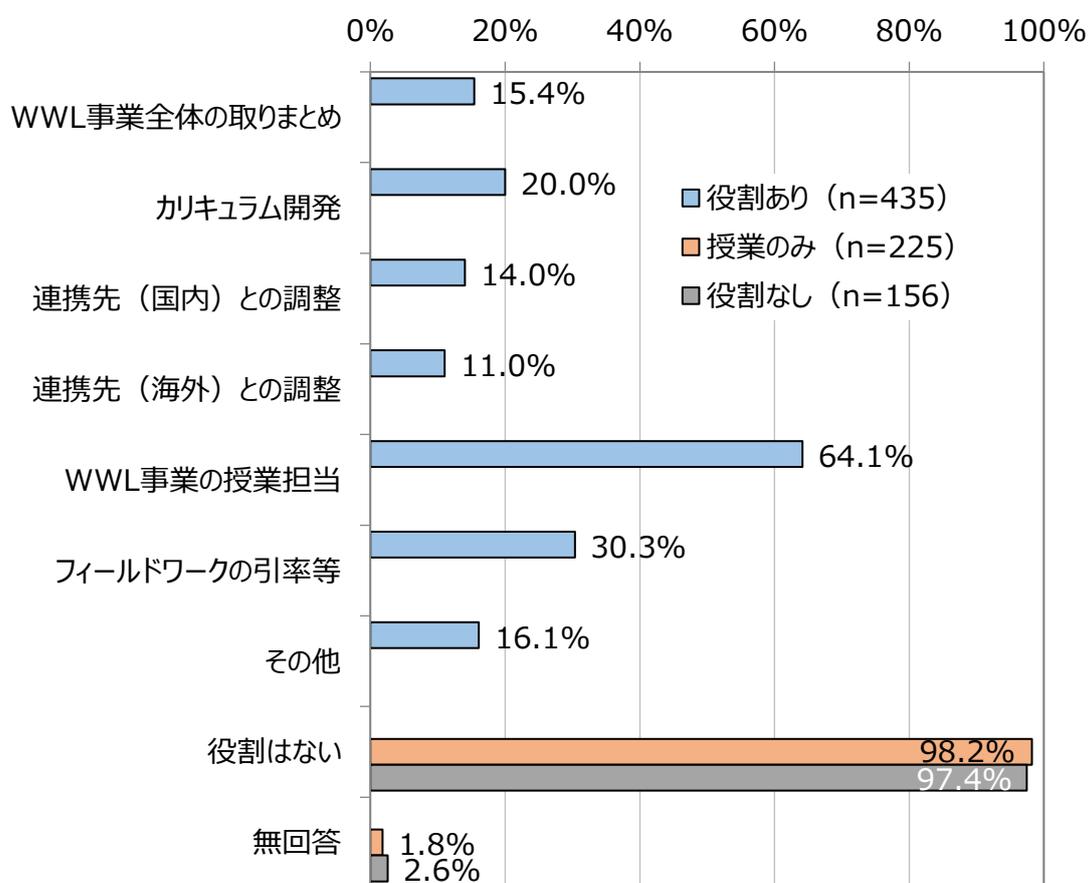


4-2 WWL 事業への関わり

4-2-1 WWL 事業における役割

- WWL 事業における役割については、「WWL 事業の授業担当」が 64.1%と最も割合が高く、次いで「フィールドワークの引率等」が 30.3%、「カリキュラム開発」が 20.0%となっている。

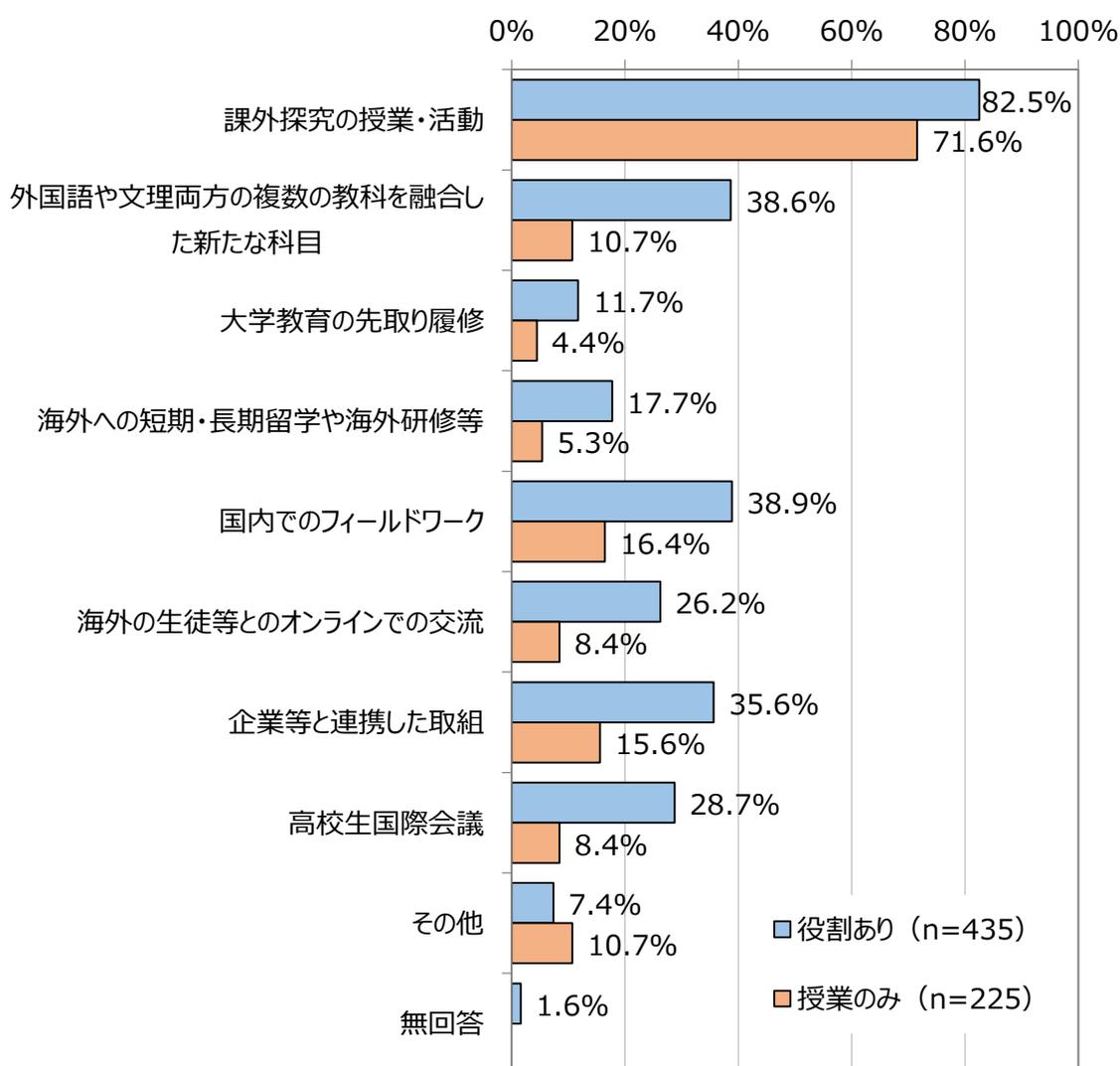
図表 4-6 WWL 事業における役割（複数回答）



4-2-2 WWL 事業において関わったプログラム

- WWL 事業において関わったプログラムは、下記のとおり。WWL 事業に明確な役割がなくても、「課題探究の授業・活動」で関わった教員が多いことがわかる。

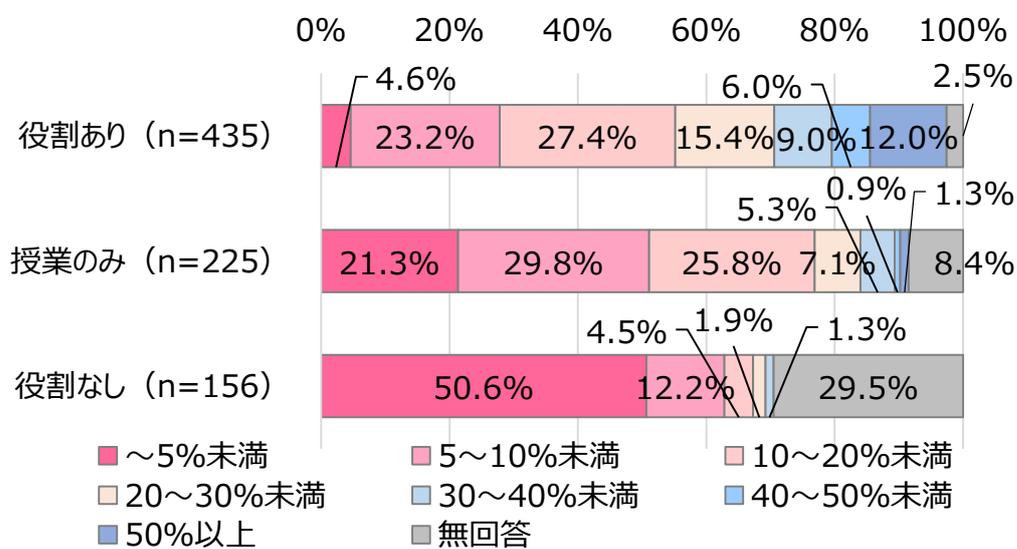
図表 4-7 WWL 事業において関わったプログラム（複数回答）



4-2-3 業務時間全体に占める WWL 事業の割合

- 役割ありの教員ほど業務時間全体に占める割合が高い。「50%以上」と回答した教員も 12.0%存在する。
- 授業のみ、役割なしの教員は、「10%未満」の回答割合が 50%以上を占めている。

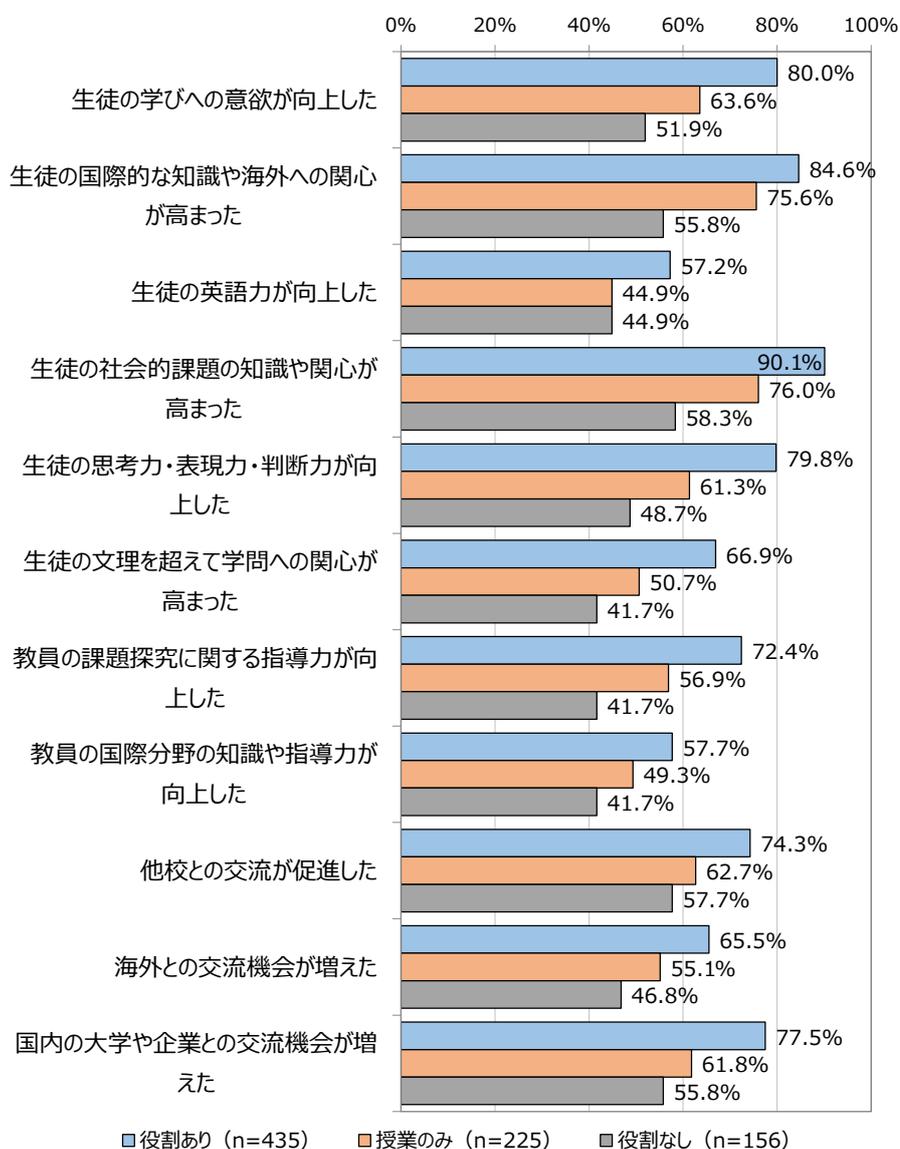
図表 4-8 業務時間全体に占める WWL 事業の割合



4-2-4 学校への影響や変化

- WWL 事業の学校への影響や変化について「あてはまる（あてはまる+どちらかというにあてはまる）」と回答した割合をみる。
- WWL 事業に役割を持って参加した教員は、8 割以上が「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」「生徒の学びへの意欲が向上した」の変化を感じている。その他、多くの項目で割合が高い。
- 一方で、参加していない教員においては、その変化を認識している割合は 4～5 割程度に留まっている。

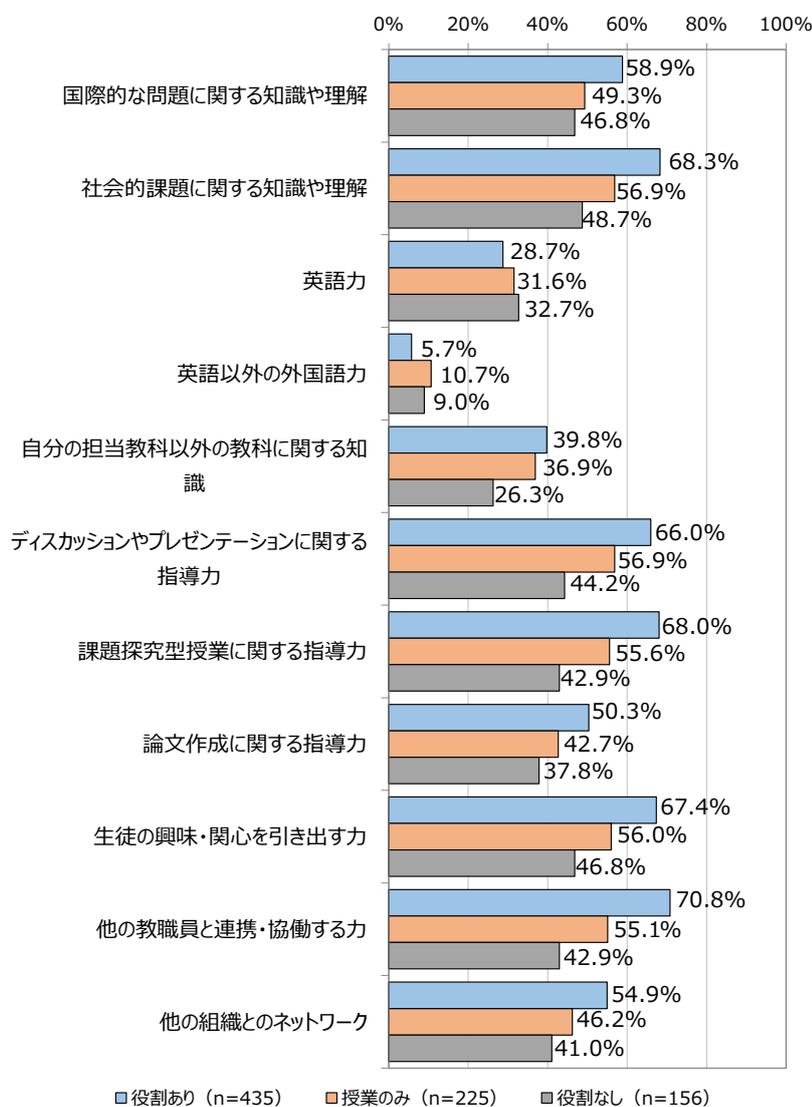
図表 4-9 学校への影響や変化（「あてはまる」+「どちらかというにあてはまる」の割合）



4-2-5 指導にあたっての資質や能力

- 指導にあたって必要だと感じる資質や能力は、WWL 事業に役割を持って参加した教員は、「他の教員と連携・協働する力」「社会的課題に関する知識や理解」「課題研究型授業に関する指導力」を必要とする割合が高い。参加していない教員においては、これらの項目は必ずしも高くなく、外からの認識と実際に担当する教員でギャップがあることが分かる。
- また、教員は必ずしも「英語力」を重要視しておらず、英語に障壁意識を感じる生徒との間にギャップがある可能性もある。

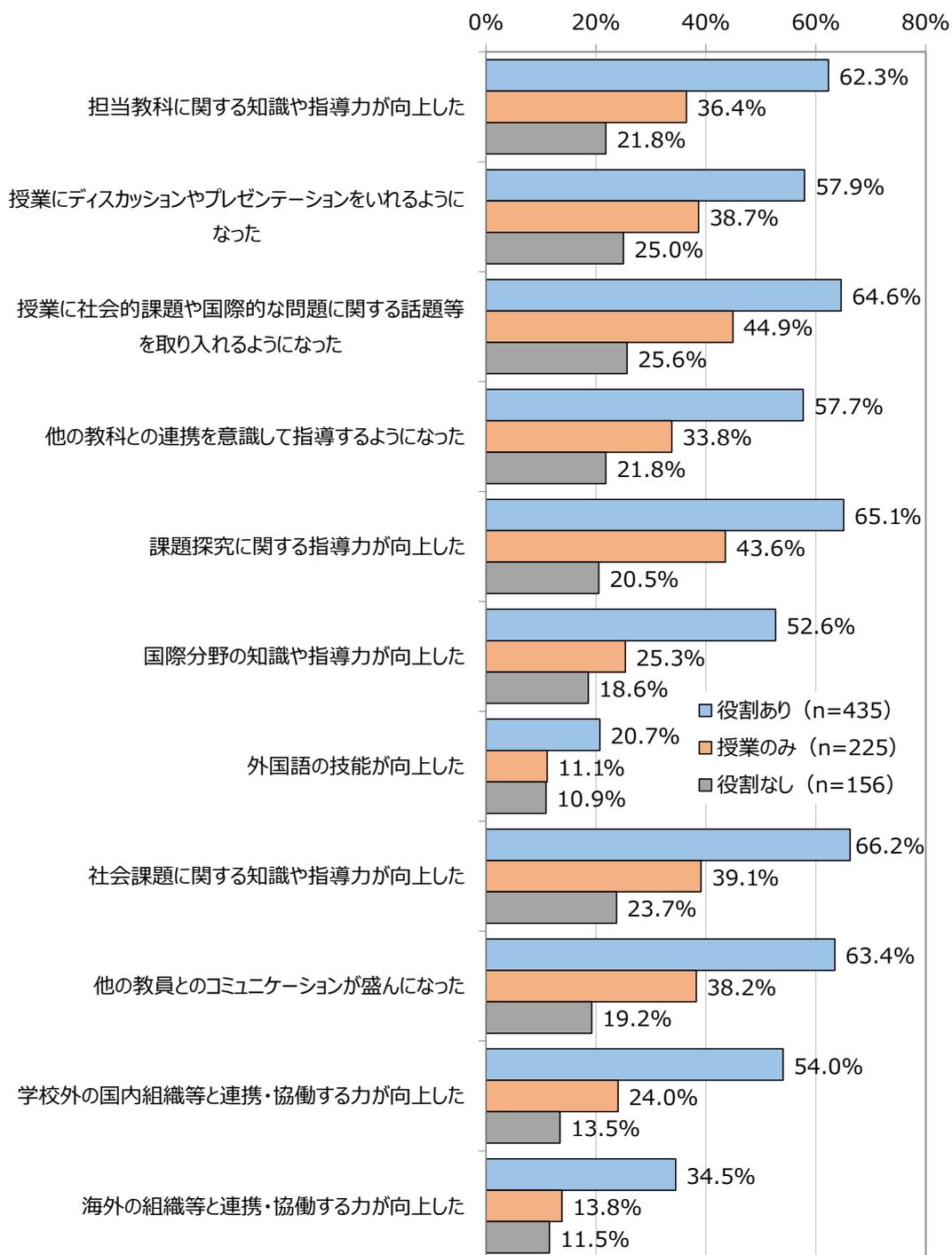
図表 4-10 指導にあたっての資質や能力（「あてはまる」の割合）



4-2-6 WWL 事業による自身への影響や変化

□ WWL 事業による自身への影響や変化は、役割がある教員ほど、いずれの項目も「あてはまる（あてはまる+どちらかというにあてはまる）」と回答する割合が高い。

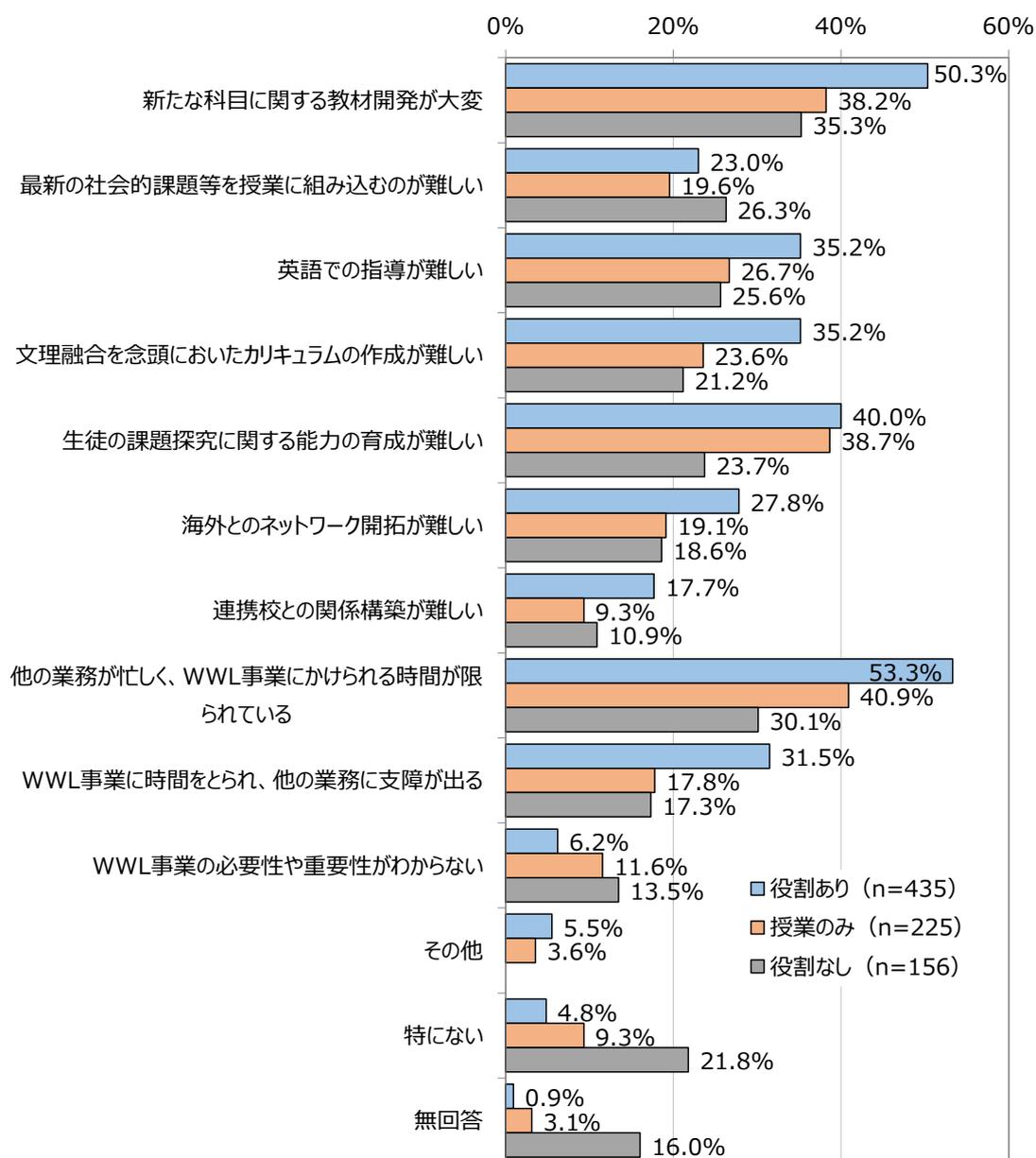
図表 4-11 自身への影響や変化（「あてはまる」+「どちらかというにあてはまる」の割合）



4-2-7 WWL 事業の課題や問題点

- 「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、役割のある教員の回答は5割を超えている。

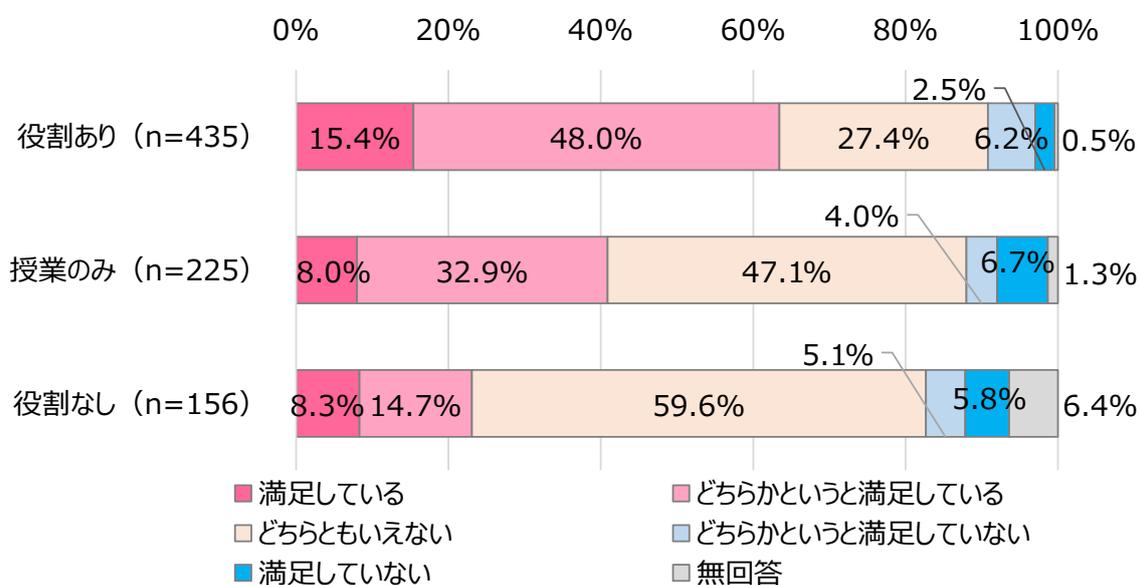
図表 4-12 WWL 事業の課題や問題点（複数回答）



4-2-8 WWL 事業への満足度

- WWL 事業への満足度については、役割ありの教員では「満足している（満足している+どちらかという満足している）」の割合が 63.4%となっている。
- 授業のみ、役割なしの教員は「どちらともいえない」の割合が高い。

図表 4-13 WWL 事業への満足度

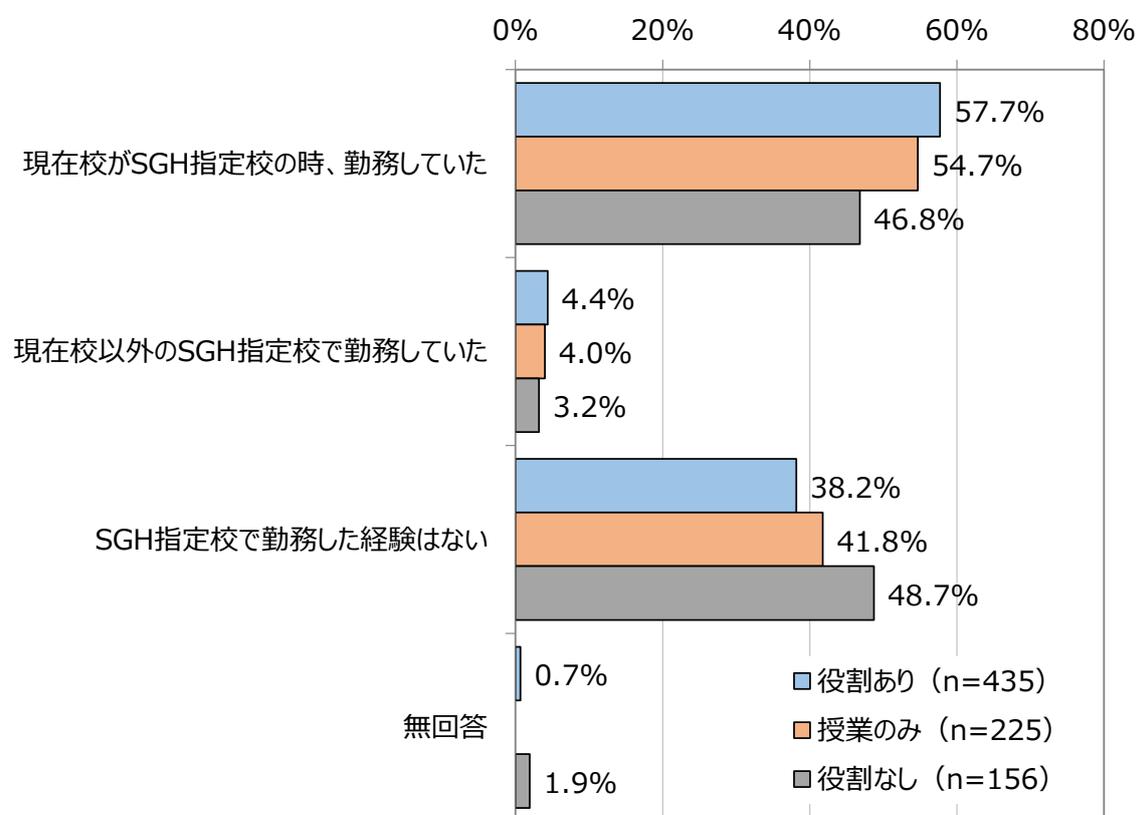


4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務

4-3-1 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験

- 5割程度の教員は、現在校がSGH指定校の時に勤務経験がある。役割ありの教員で、その割合が高い。

図表 4-14 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験（複数回答）

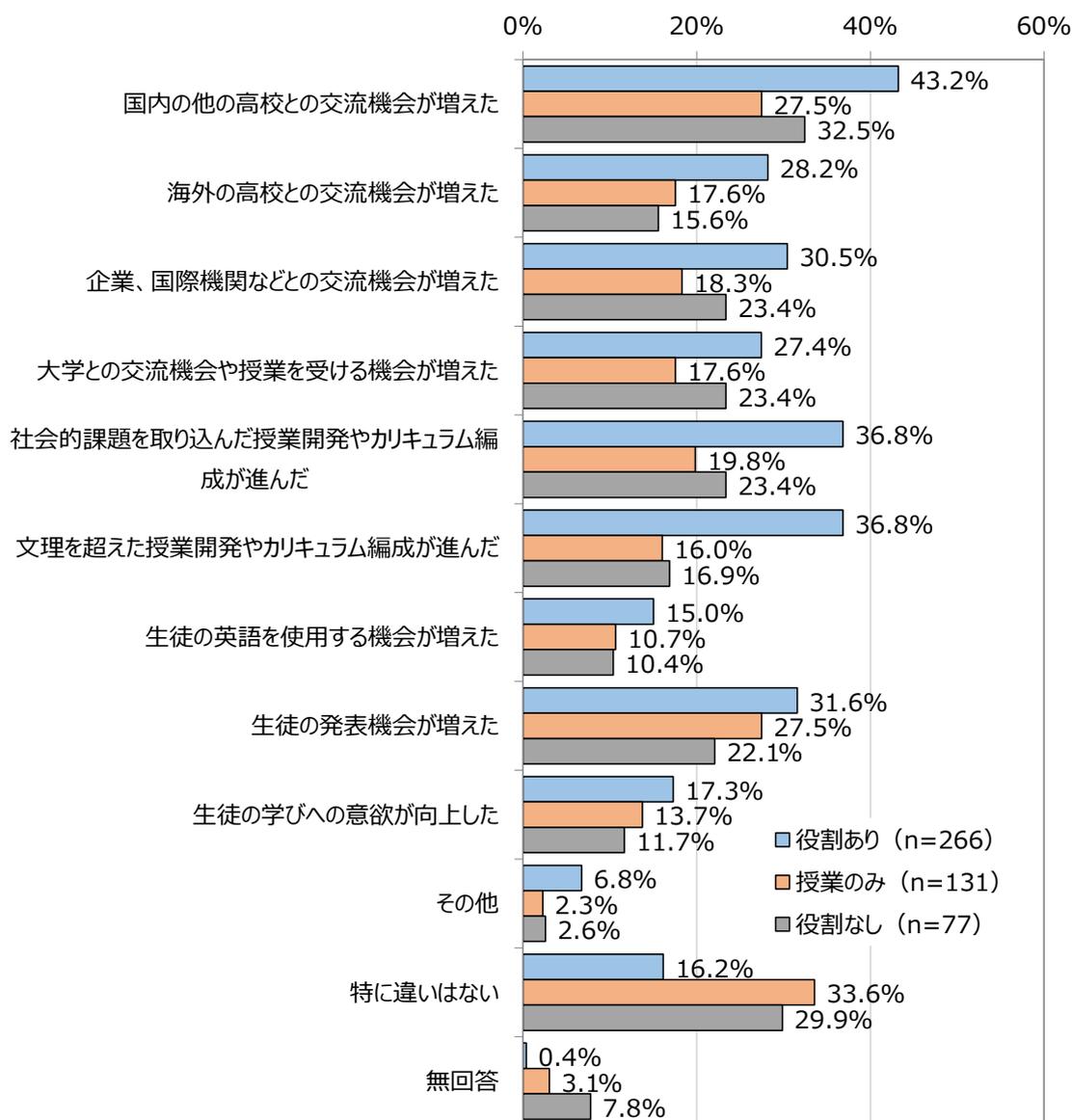


4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い

- 役割ありの教員からみて、SGH 事業と WWL 事業の違いとして「国内の他の高校との交流機会が増えた」「社会的課題を取り込んだ授業開発やカリキュラム編成が進んだ」「文理を超えた授業開発やカリキュラム編成が進んだ」等の割合が高い。
- これらの項目は、授業のみ、役割なしの教員では必ずしも割合が高くなく、WWL 事業の関わりの薄い教員は、SGH 事業との違いを認識していない可能性がある。

図表 4-15 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い

(複数回答：SGH 指定校での勤務経験ありのみ)



第5章 卒業生へのアンケート調査

5-1 調査概要

5-1-1 調査対象

WWL 事業・SGH 事業の卒業生を輩出している拠点校のうち4校の卒業生

5-1-2 調査方法

郵送・メール配布、Web による回答

5-1-3 調査時期

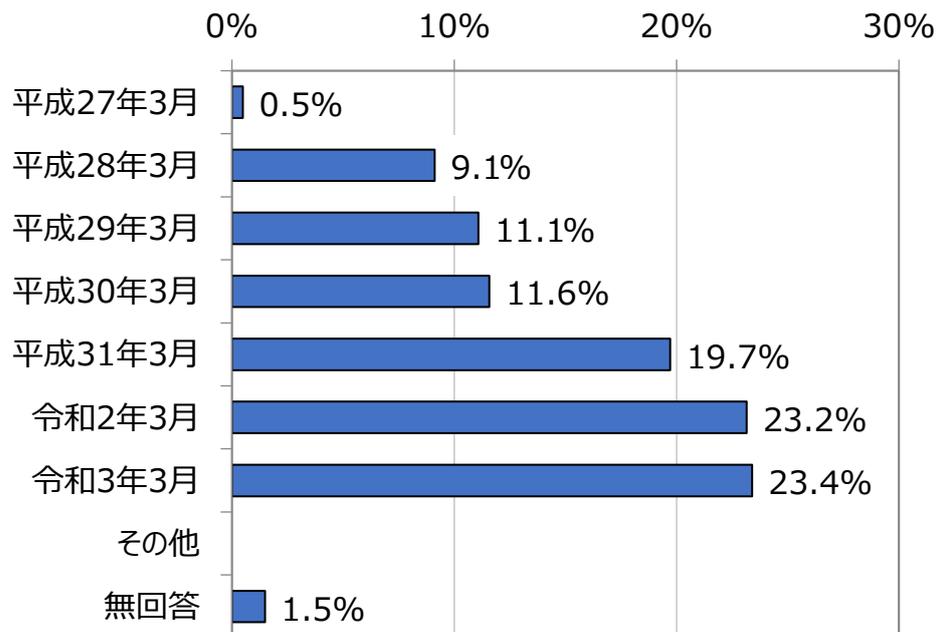
令和3年12月23日～令和4年2月28日

5-1-4 回収状況

406件

5-1-5 回答者属性

図表 5-1 卒業年次 (n=406)

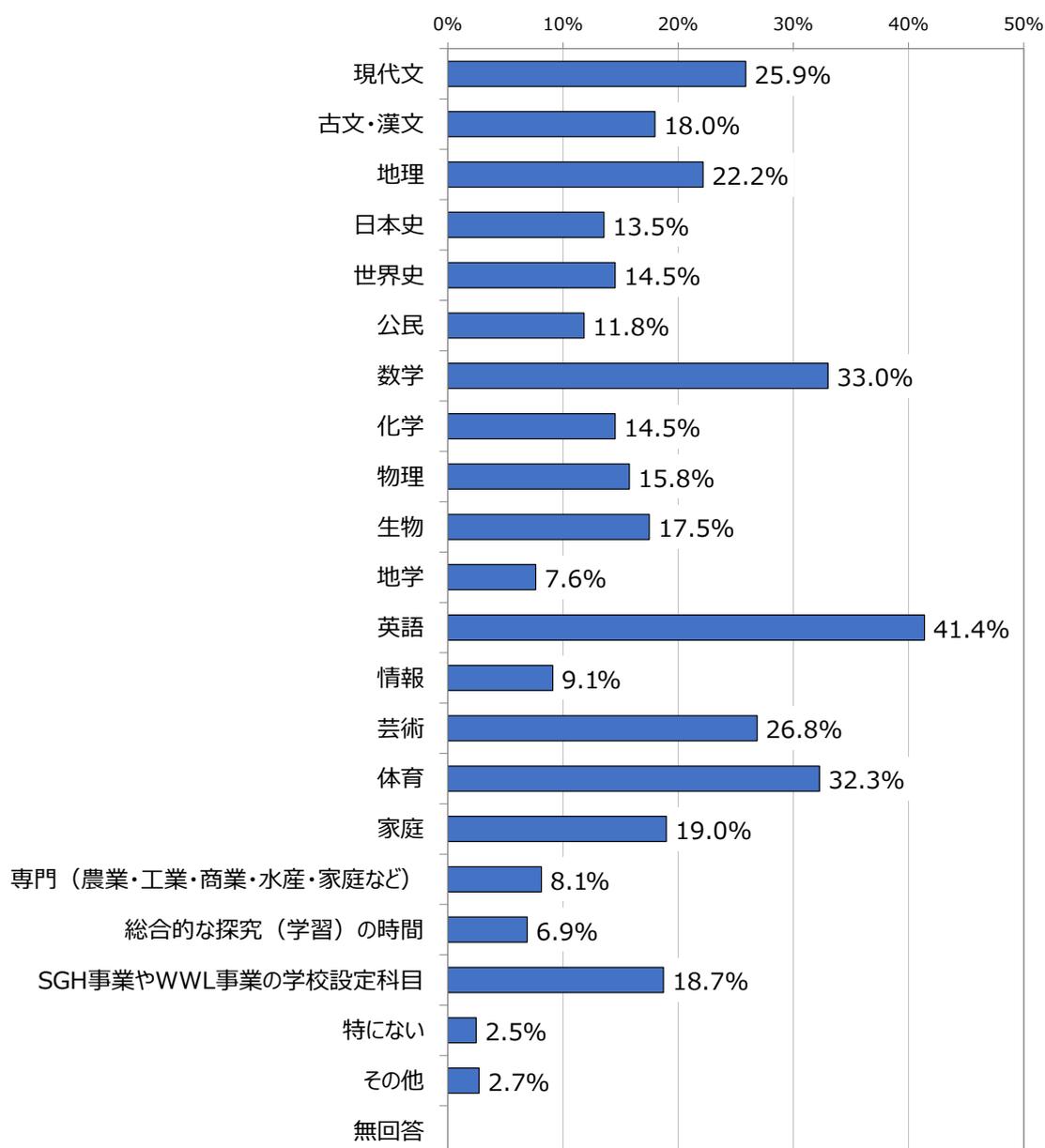


5-2 高校時代の生活

5-2-1 好きだった科目

- 最も割合が高いのは「英語」で41.4%。次いで「数学」が33.0%、「体育」が32.3%と続く。

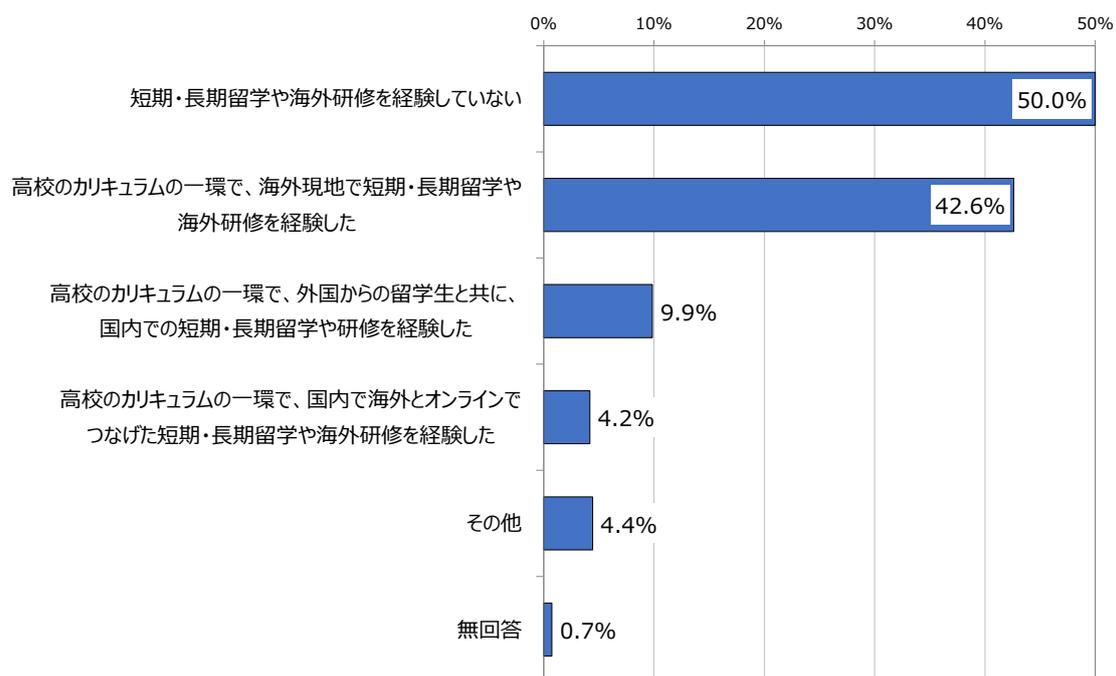
図表 5-2 好きだった科目（複数回答）（n=406）



5-2-2 短期・長期留学や海外研修の経験

- 留学経験や海外研修の経験については、「経験していない」と回答した割合が 50.0% と最も割合が高く、次いで「高校のカリキュラムの一環で、現地や短期・長期留学や海外研修を経験した」が 42.6%である。

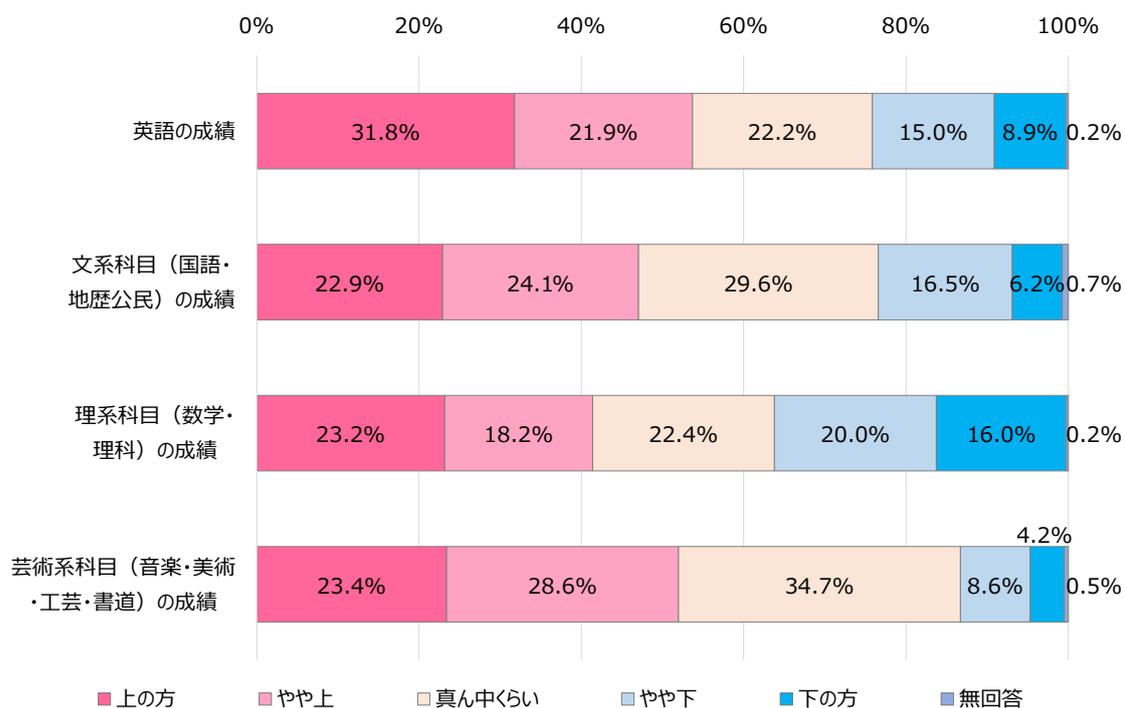
図表 5-3 短期・長期留学や海外研修の経験 (n=406)



5-2-3 高校時代の成績

- 高校時代の成績については、どの科目においても、各割合は概ね同じ程度であるが、英語の成績に関しては「上の方」と回答した割合が約10%高い。

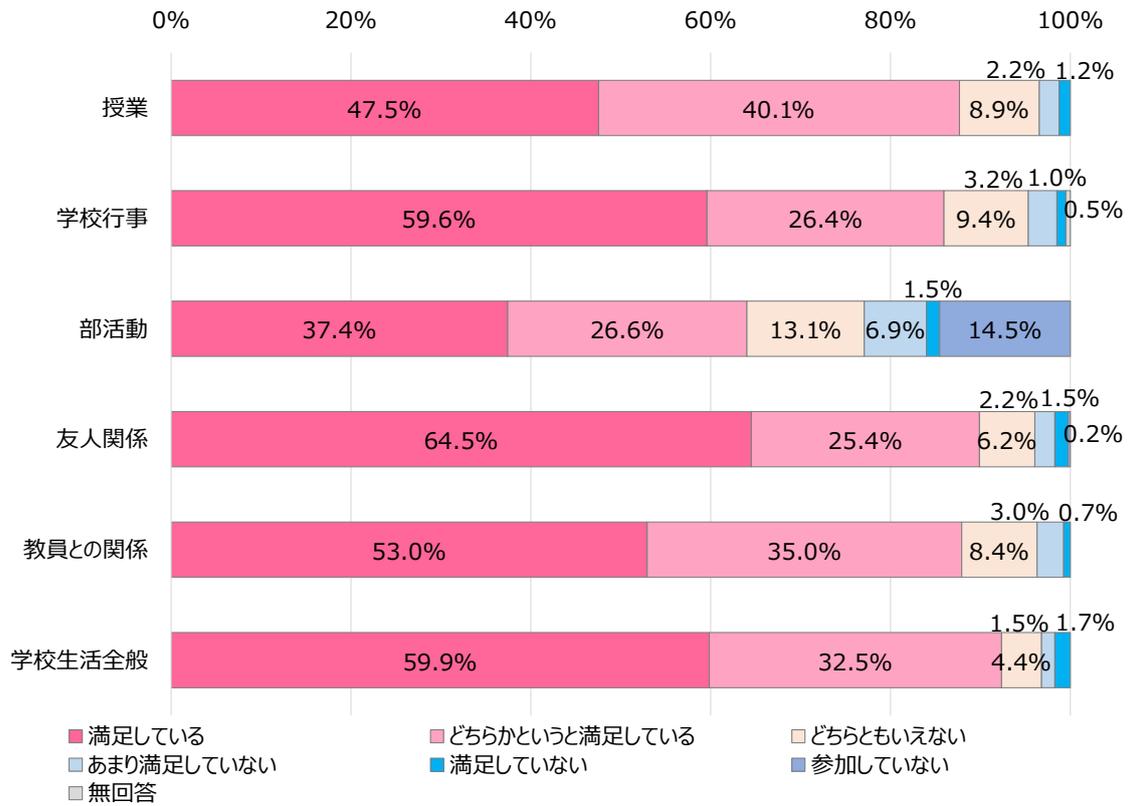
図表 5-4 高校時代の成績 (n=406)



5-2-4 高校生活の事柄における満足度

□ 高校生活の事柄における満足度については、「友人関係」「学校生活全般」「学校行事」「教員との関係」が「満足している」が5割を超えて高い。

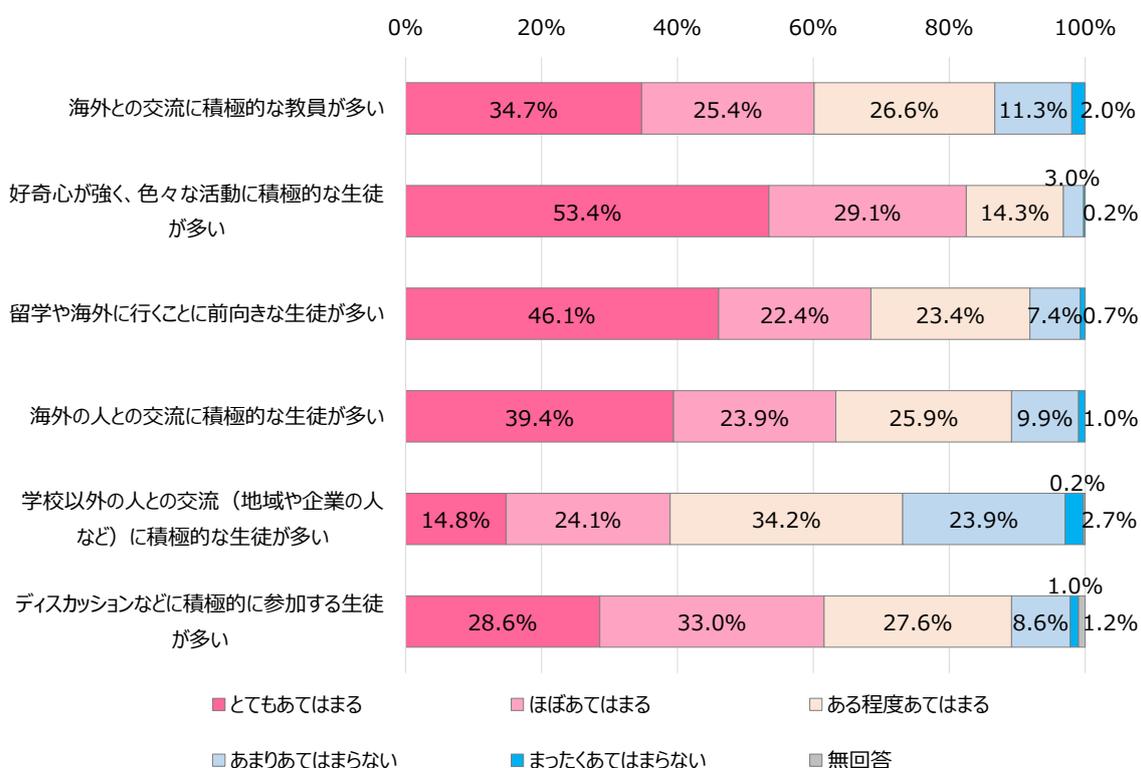
図表 5-5 高校生活の事柄における満足度 (n=406)



5-2-5 高校や自身の周りの生徒

- 学校や周りの生徒にみられる特徴として、「好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い」「留学や海外に行くことに前向きな生徒が多い」の回答割合が高い。

図表 5-6 高校や自身の周りの生徒 (n=406)

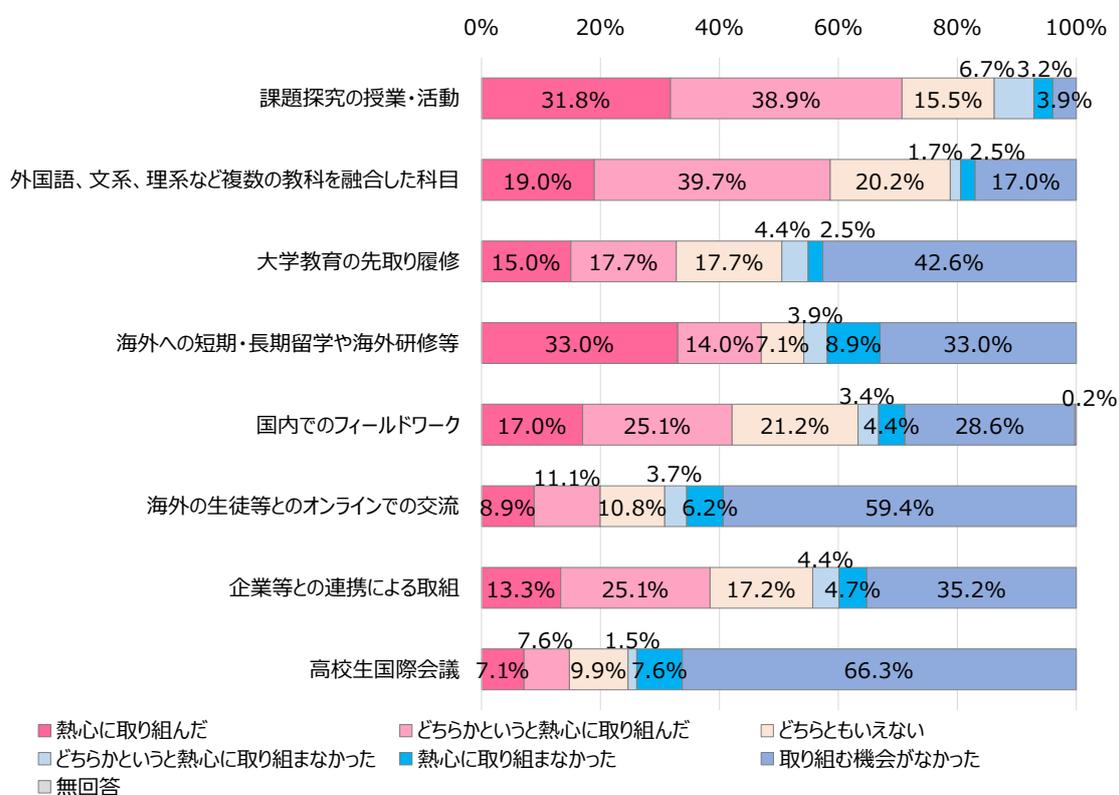


5-3 高校時代の SGH 事業や WWL 事業の経験

5-3-1 各事業の活動への熱心さ

□ 「熱心に取り組んだ」事業として、「海外への短期・長期留学や海外研修等」「課題探究の授業・活動」の割合が高く、「どちらかという熱心に取り組んだ」を含めると、「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」が挙げられた。

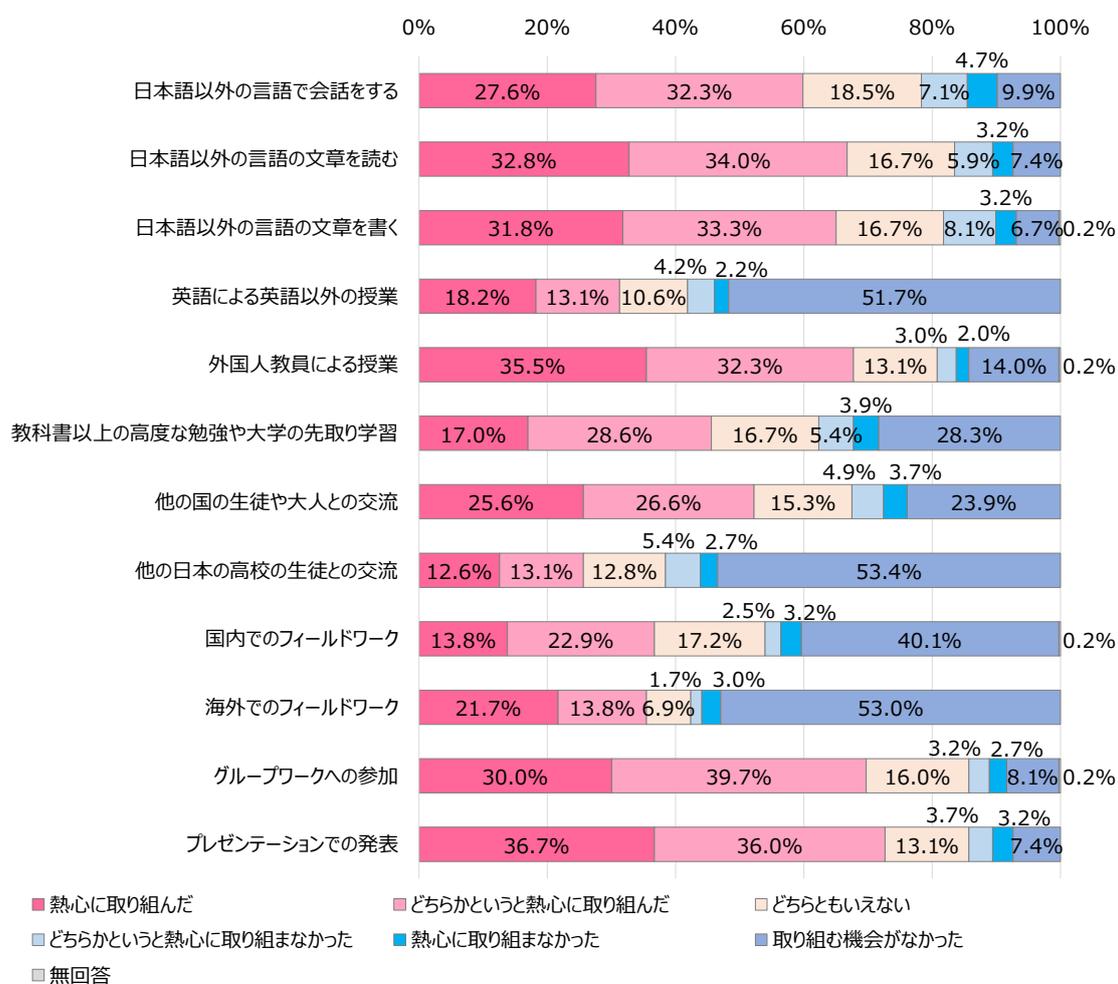
図表 5-7 各事業の活動への熱心さ (n=406)



5-3-2 各活動への熱心さ

- 「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答したのが多い活動は、「プレゼンテーションでの発表」「外国人教員による授業」「日本語以外の言語の文章を読む」の順である。
- 「英語による英語以外の授業」「他の日本の高校の生徒との交流」「国内でのフィールドワーク」「海外でのフィールドワーク」は、「取り組む機会がなかった」が4割以上となっている。

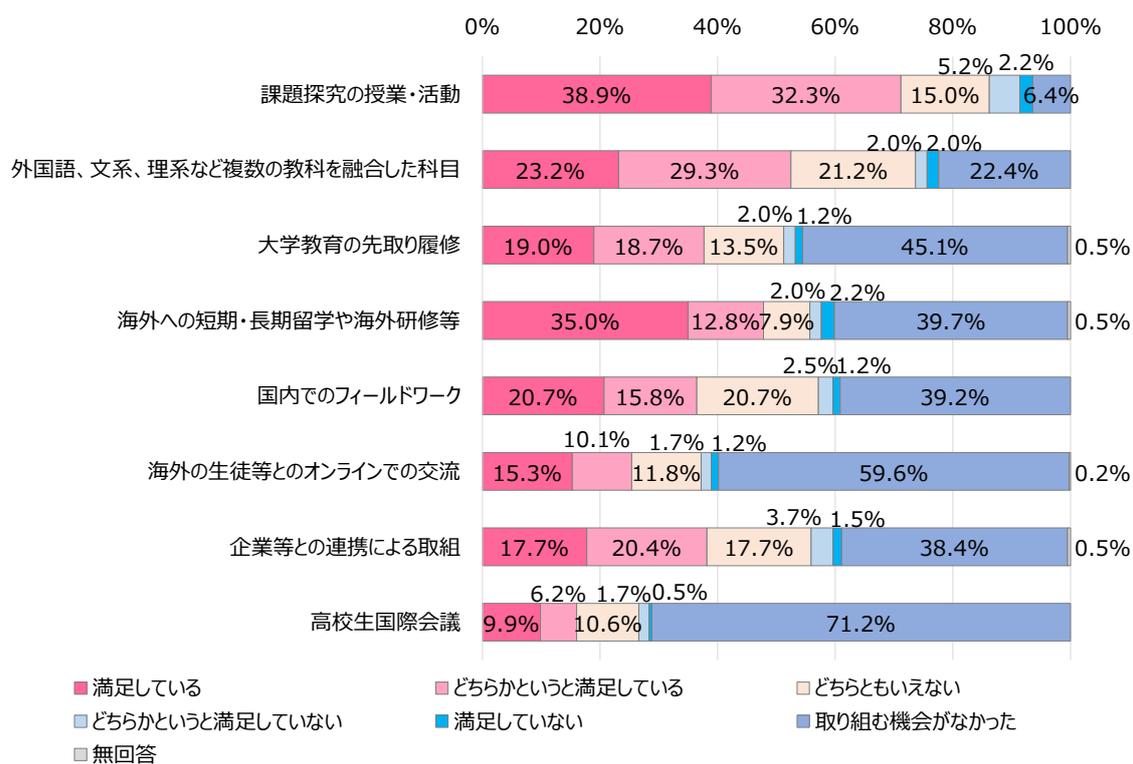
図表 5-8 各活動への熱心さ (n=406)



5-3-3 各事業の活動における満足度

□ 「課題探究の授業・活動」は、「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答した割合が約7割と高い。

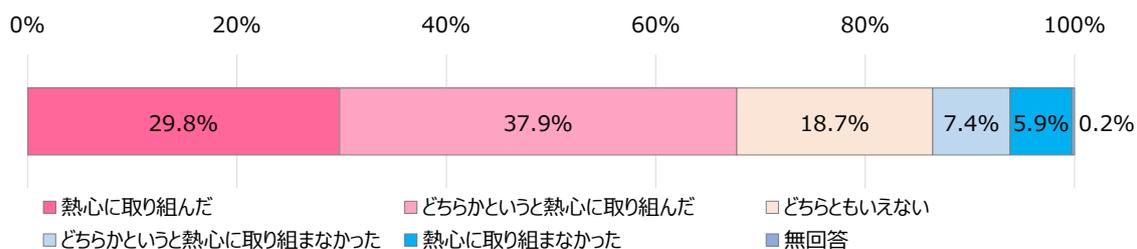
図表 5-9 各事業の活動における満足度 (n=406)



5-3-4 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ

□ SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は、約 7 割が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答している。

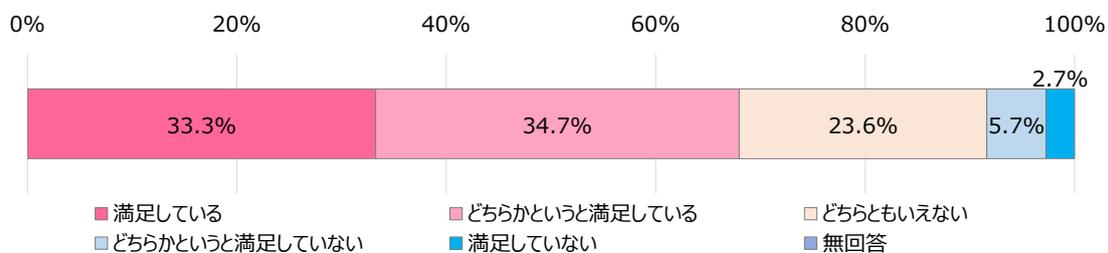
図表 5-10 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ (n=406)



5-3-5 総合的にみた高校時代の各事業への満足度

□ SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は 6 割以上が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答している。

図表 5-11 総合的にみた高校時代の各事業への満足度 (n=406)



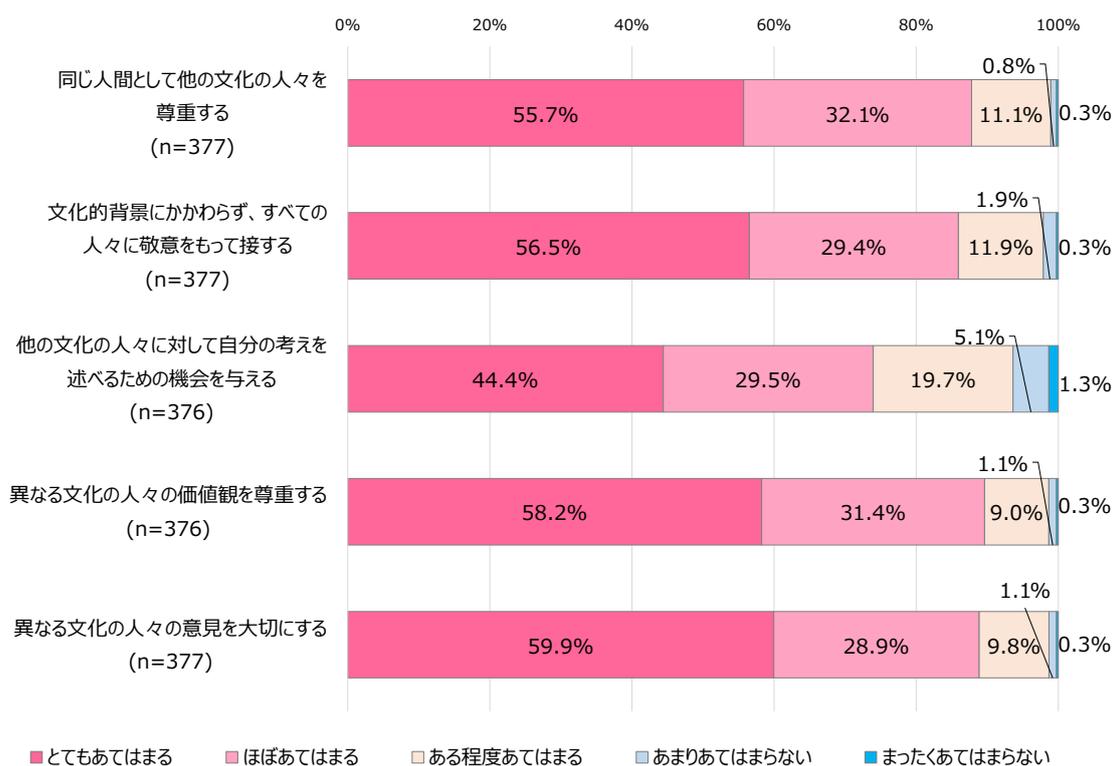
5-4 考えや行動について

5-4-1 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

(1) 高校卒業時

- 高校卒業時のグローバルコンピテンス（多文化の人々の尊重）については、「他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える」を除き、「あてはまる（とてもあてはまる+あてはまる）」の割合が8割以上となっている。「他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える」についても、7割以上があてはまると回答している。

図表 5-12 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）：高校卒業時

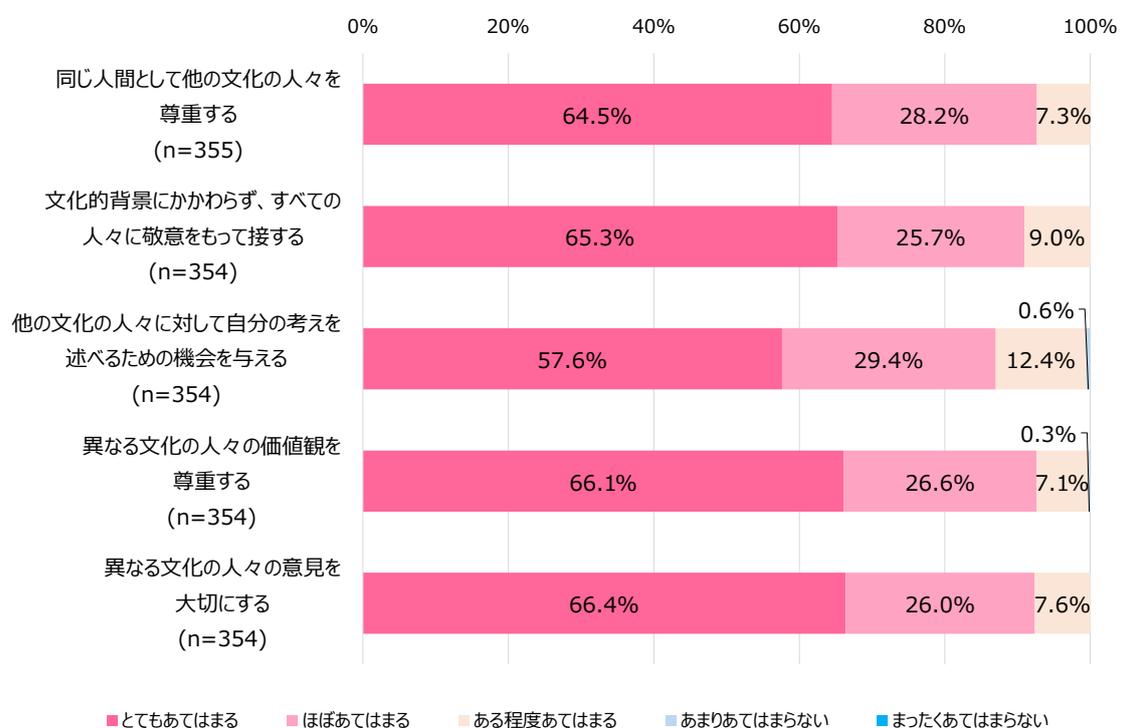


※無回答は除外

(2)現在

□ 現在のグローバルコンピテンス（多文化の人々の尊重）については、高校時代と比較して、いずれの項目も「とてもあてはまる」と回答した割合が、わずかながら増えている。

図表 5-13 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）：現在



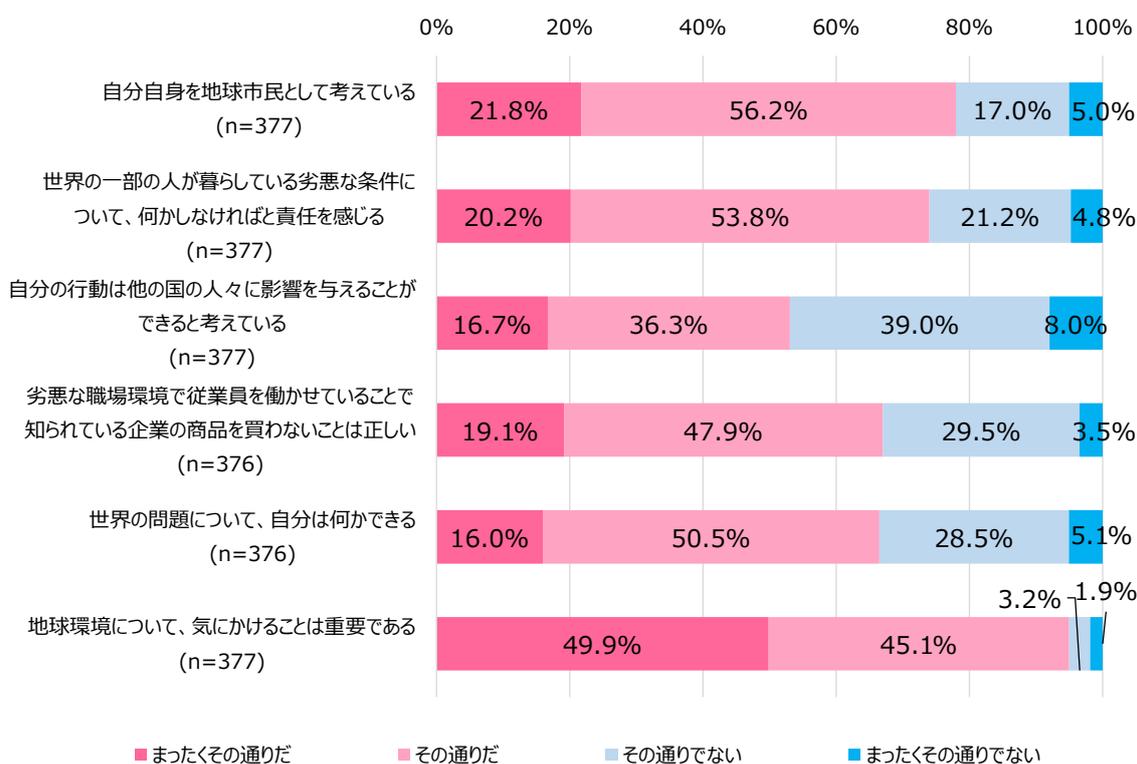
※無回答は除外

5-4-2 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

(1) 高校卒業時

- 高校卒業時のグローバルコンピテンス（グローバル思考）については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ（まったくその通りだ+その通りだ）」と回答する割合が9割以上と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」「世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる」が続く。

図表 5-14 グローバルコンピテンス（グローバル思考）：高校卒業時

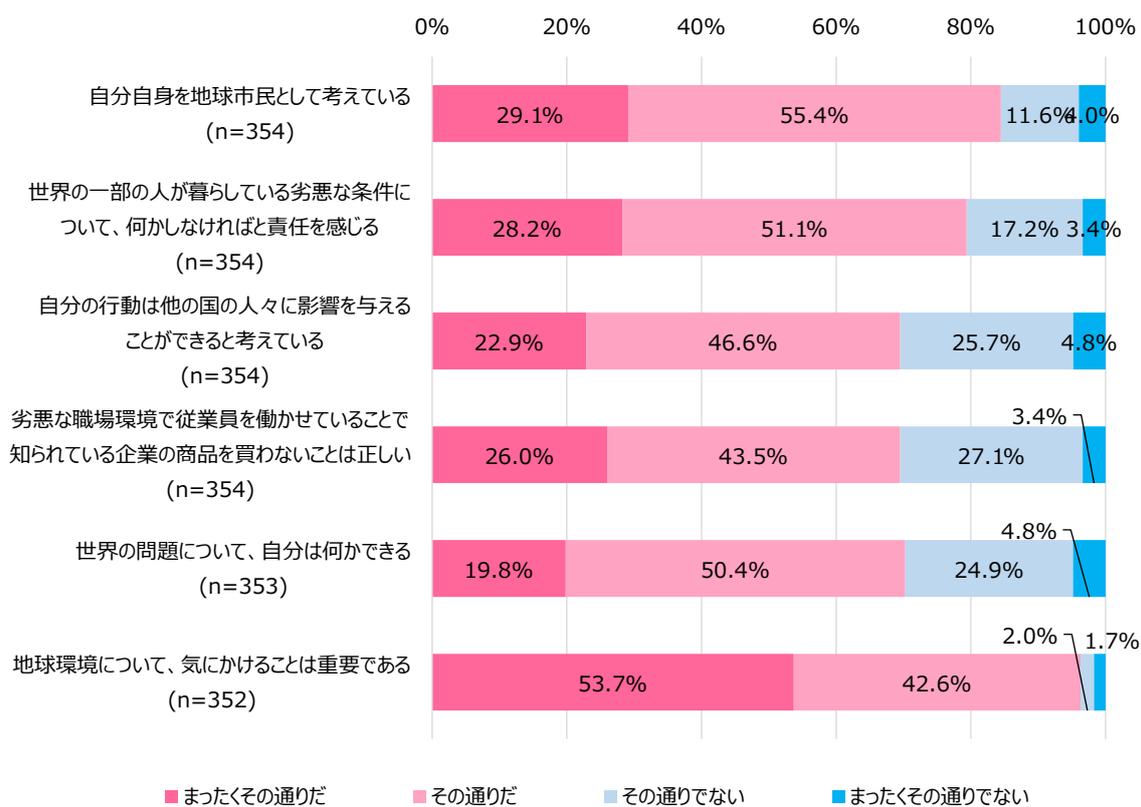


※無回答は除外

(2)現在

- 現在のグローバルコンピテンス（グローバル思考）については、高校時代と大きな違いはみられない。

図表 5-15 グローバルコンピテンス（グローバル思考）：現在



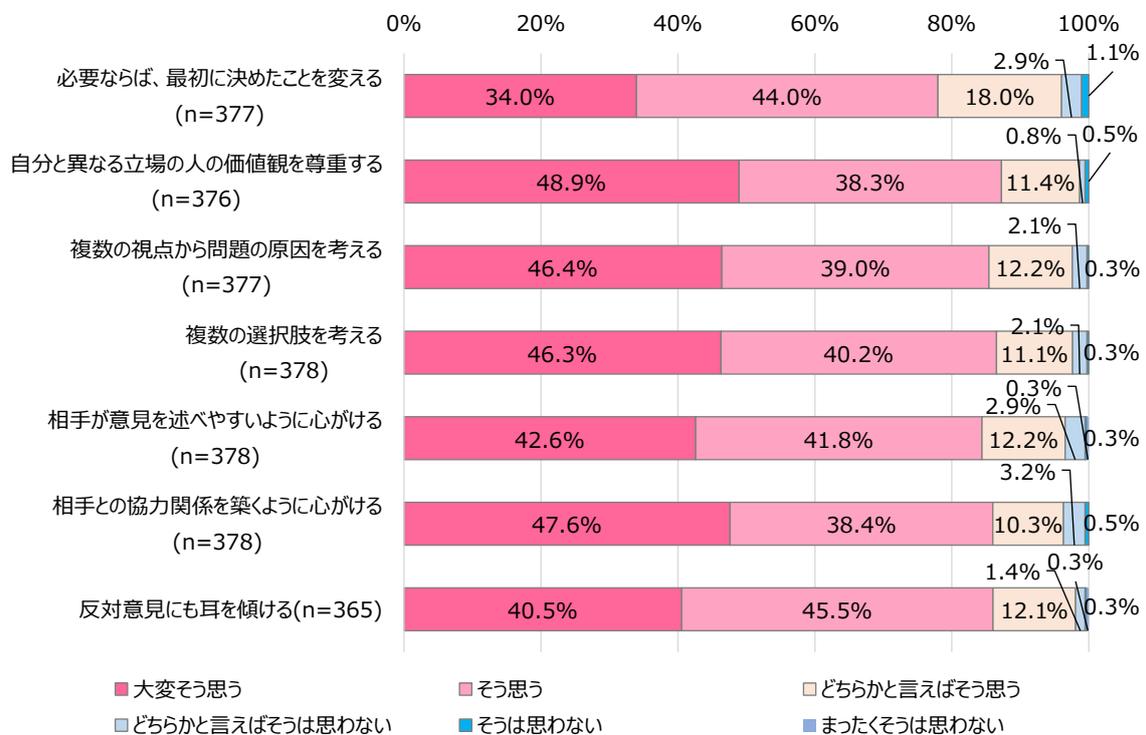
※無回答は除外

5-4-3 異文化対応コンピテンシー

(1) 高校卒業時

□ 異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も 9 割を超えて「そう思う(大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う)」と回答している。

図表 5-16 異文化対応コンピテンシー：高校卒業時

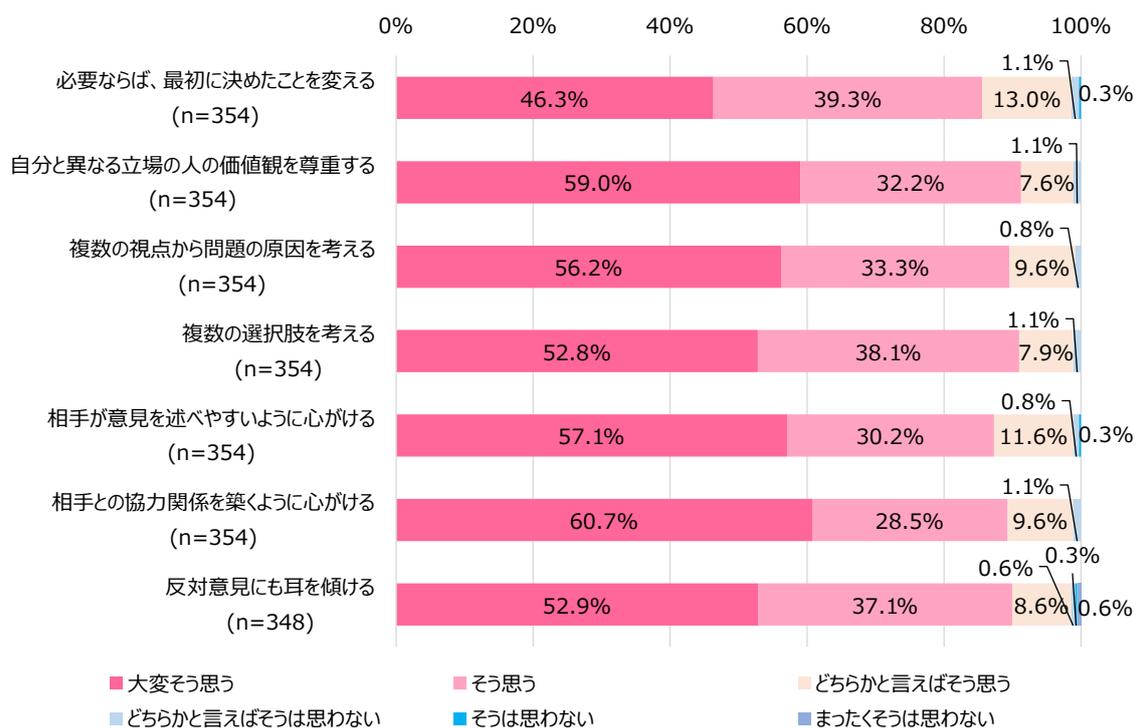


※無回答は除外

(2)現在

- 高校時代と比較して、異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も「大変そう思う」と回答した割合が、わずかながら増えている。

図表 5-17 異文化対応コンピテンシー：現在



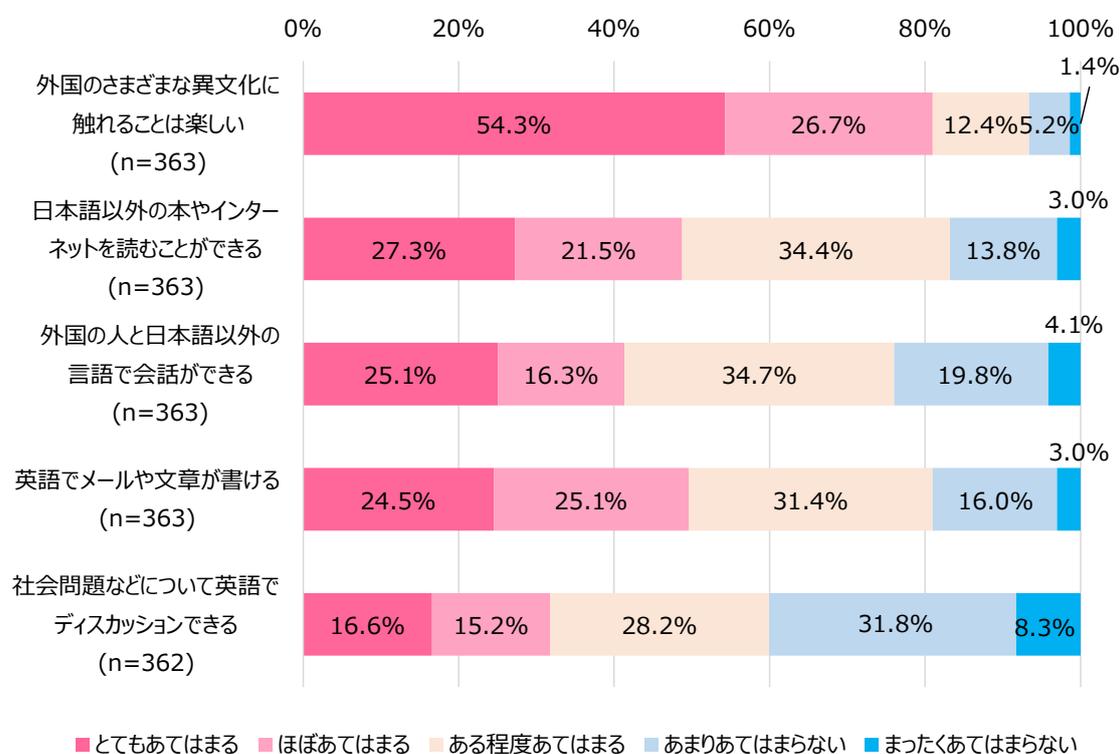
※無回答は除外

5-4-4 外国語リテラシー

(1) 高校卒業時

- 高校卒業時の外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が9割以上となっている。
- 一方で、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、6割程度に留まっている。

図表 5-18 外国語リテラシー：高校卒業時

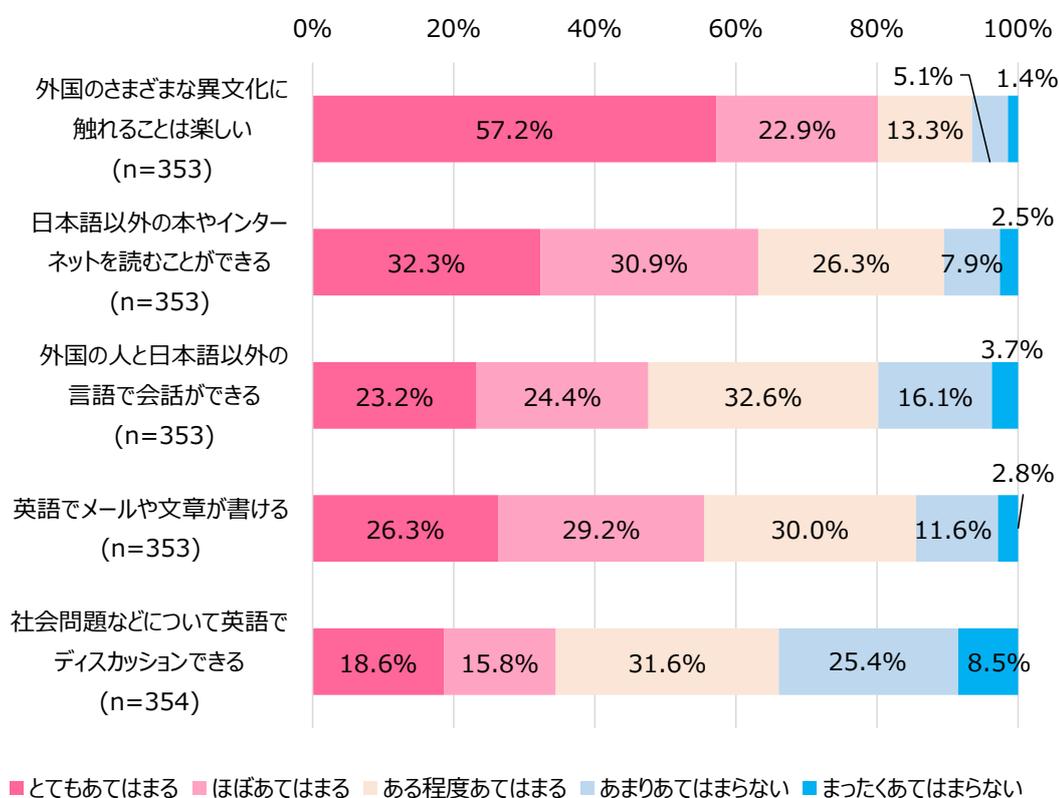


※無回答は除外

(2)現在

- 現在の外国語リテラシーについては、高校時代と比較して「日本語以外の本やインターネットを読むことができる」の割合が高くなっている。

図表 5-19 外国語リテラシー：現在



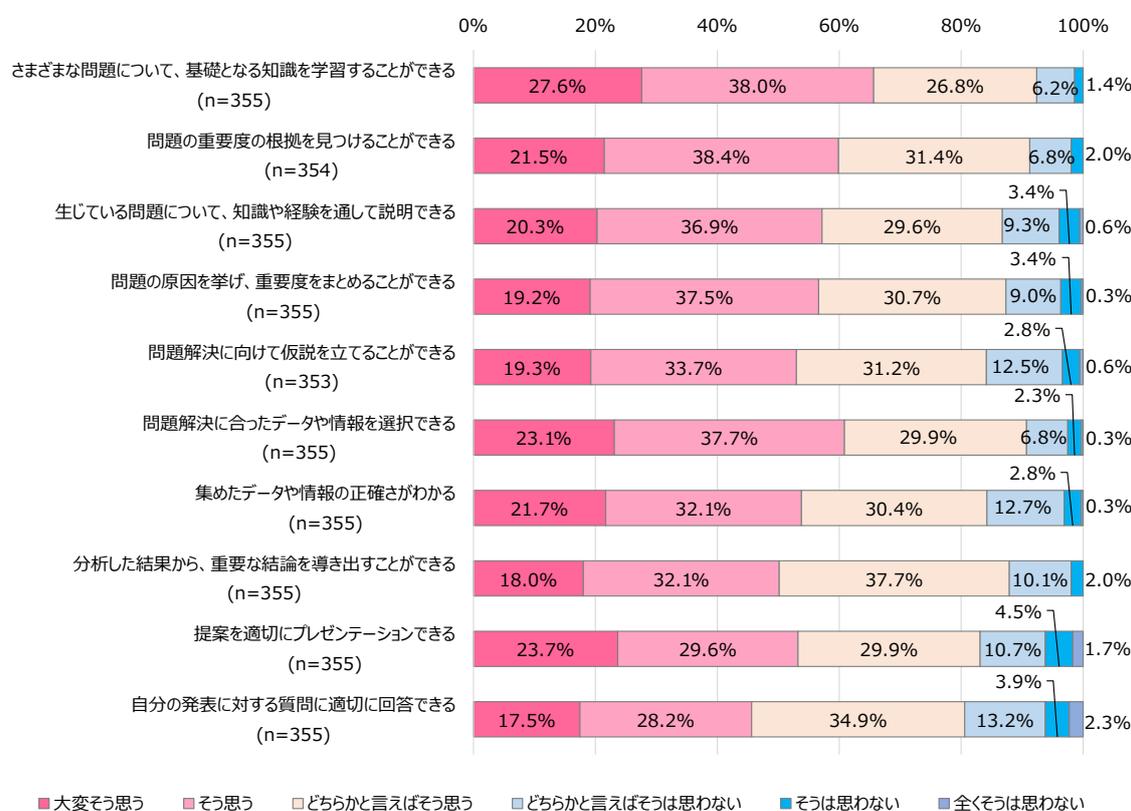
※無回答は除外

5-4-5 PPDAC スキル

(1) 高校卒業時

- 高校時代の PPDAC スキルについては、「さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる」「問題の重要度の根拠を見つけることができる」「問題解決に合ったデータや情報を選択できる」に「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」の割合が9割と高い。

図表 5-20 PPDAC スキル：高校卒業時

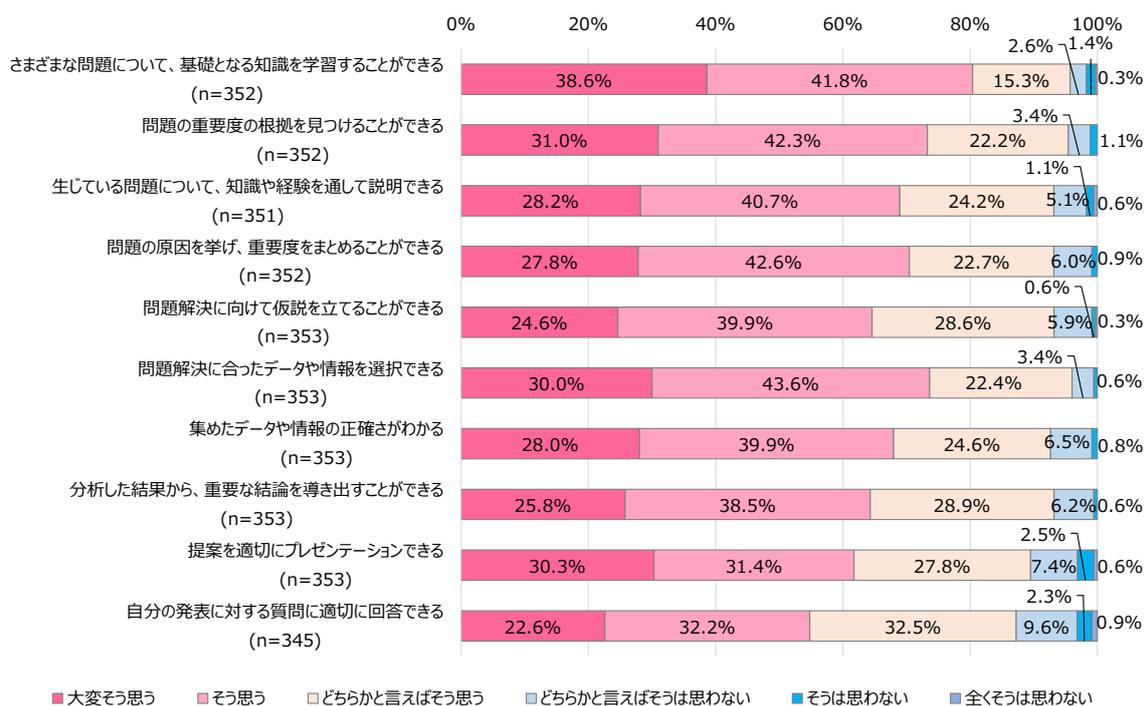


※無回答は除外

(2)現在

□ 現在の PPDAC スキルについては、高校時代と比較して大きな違いはない。

図表 5-21 PPDAC スキル：現在

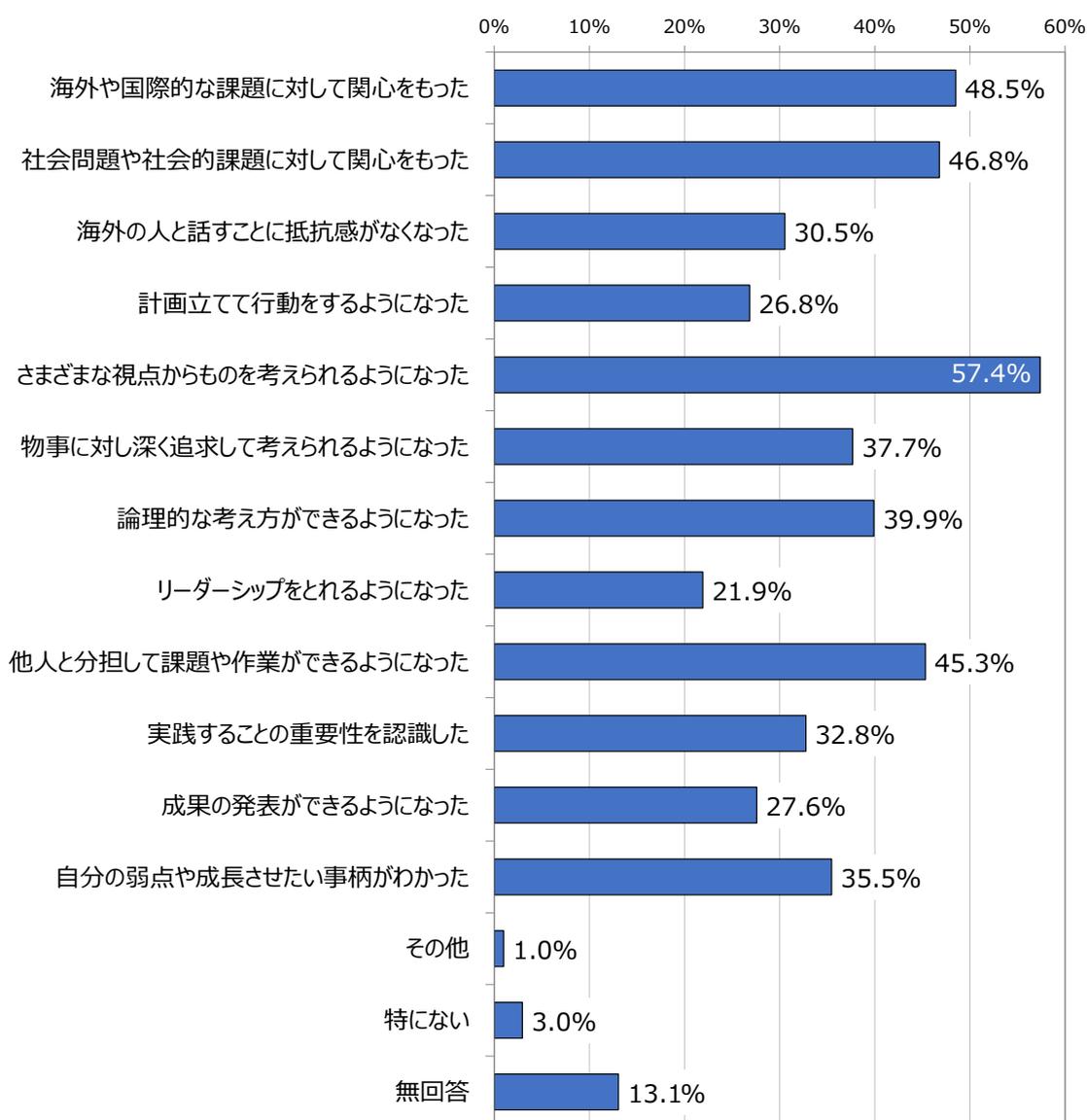


※無回答は除外

5-4-6 高校生活を通じて身についた・成長したこと

- 割合の高い順に「さまざまな視点からものを考えられるようになった」57.4%、海外や国際的な課題に対して関心を持った」が48.5%、「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」が46.8%と続く。
- 海外や国際的な課題、社会問題など、社会に対しての興味関心が増えたことによって視野を広く持つことが出来るようになったと考えられる。

図表 5-22 高校生活を通じて身についた・成長したこと（複数回答）（n=406）

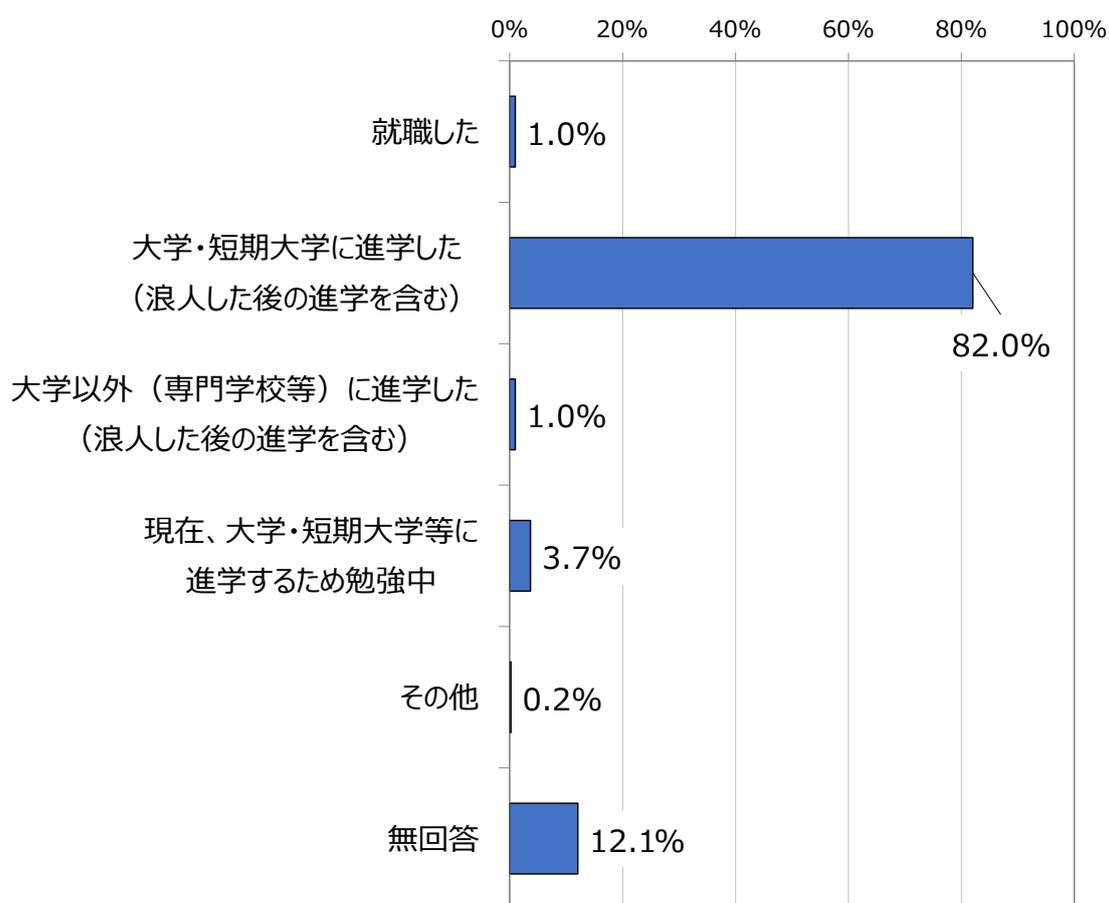


5-5 高校卒業後から現在までについて

5-5-1 高校卒業後の進路

- 高校卒業後は「大学・短期大学に進学した」が最も割合が高く 82.0%である。

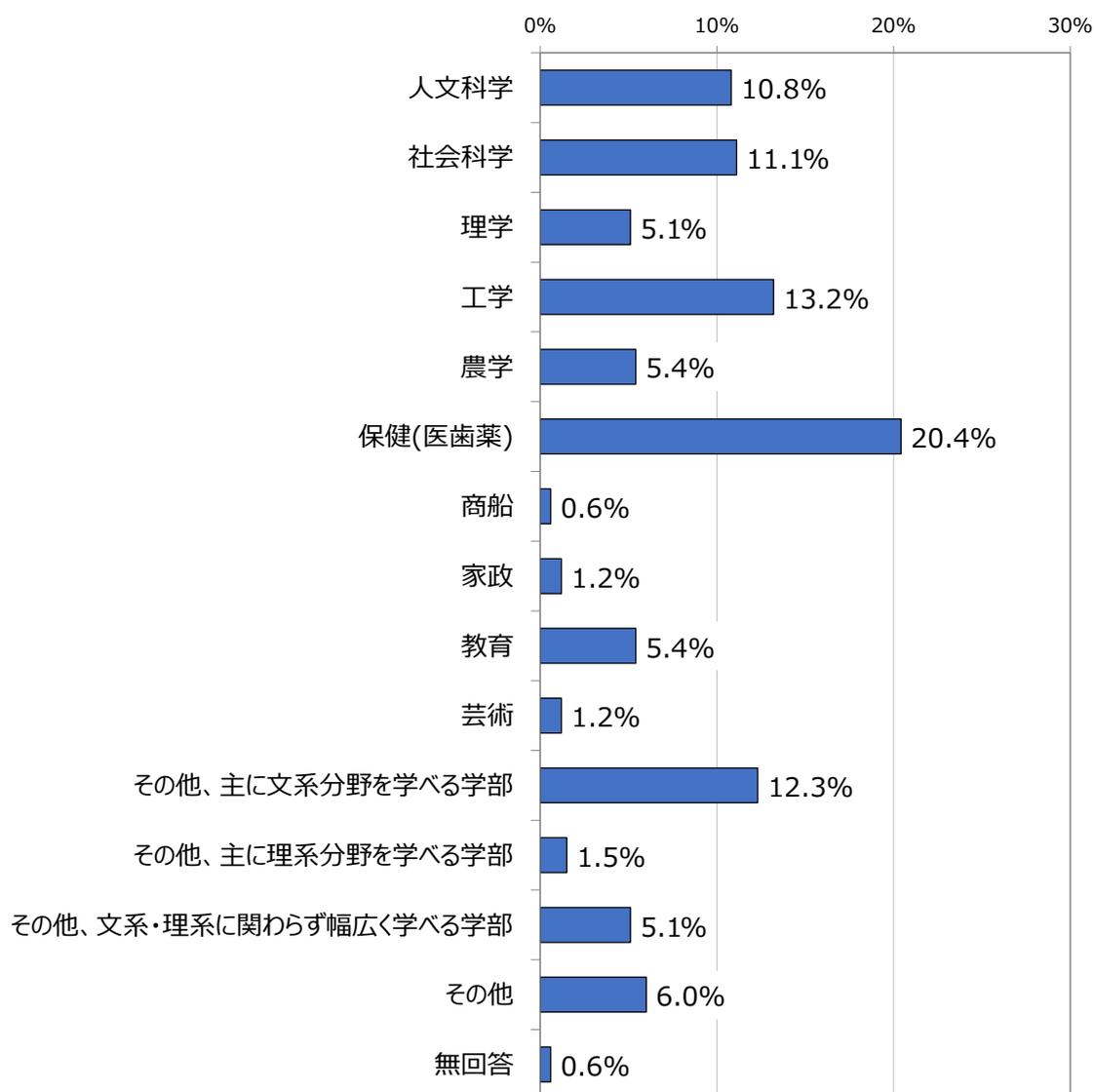
図表 5-23 高校卒業後の進路 (n=406)



5-5-2 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部

- 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部は、「保健（医歯薬）」が 20.4%。
「工学」が 13.2%と続く。

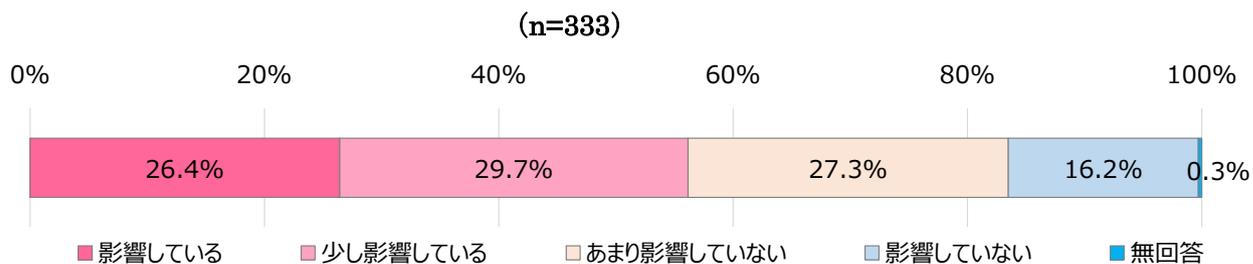
図表 5-24 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部（n=333）



5-5-3 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響

- SGH事業及びWWL事業の経験が高校卒業後の大学の進路選択へ「影響している（影響している＋少し影響している）」と回答した割合は56.1%となっている。

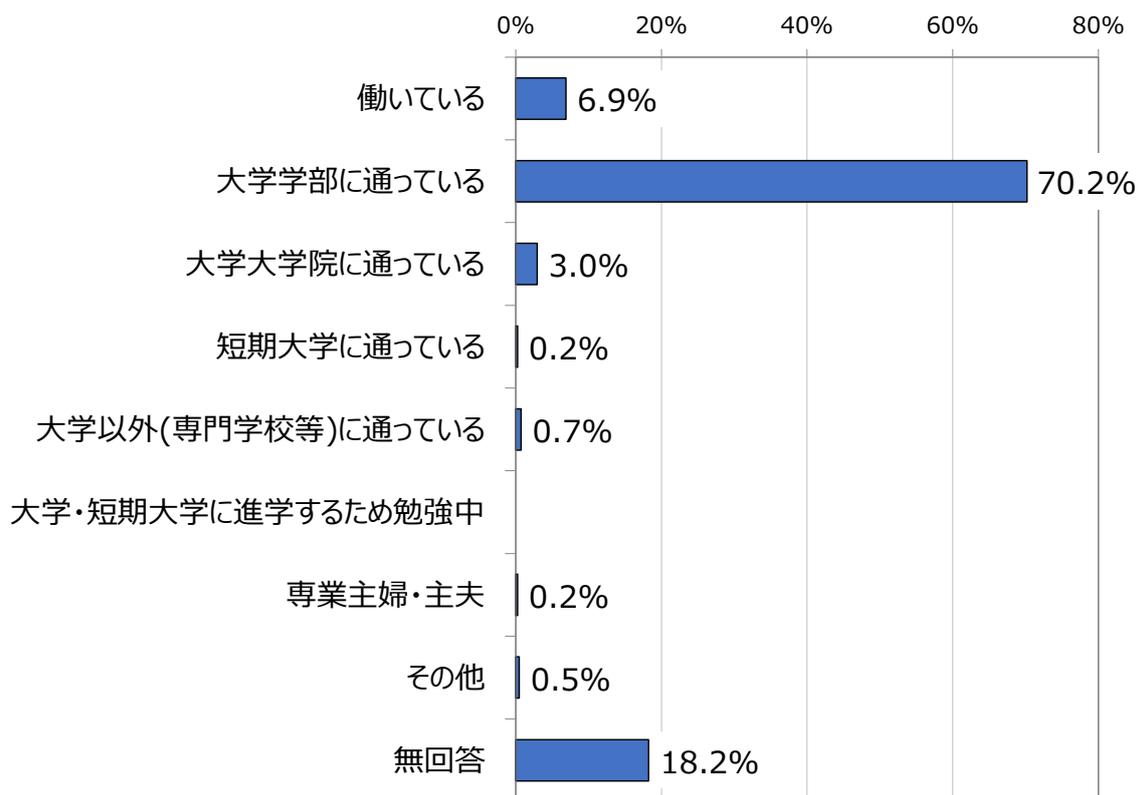
図表 5-25 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響



5-5-4 現在の状況

□ 現在、「大学学部に通っている」が70.2%と最も割合が高い。

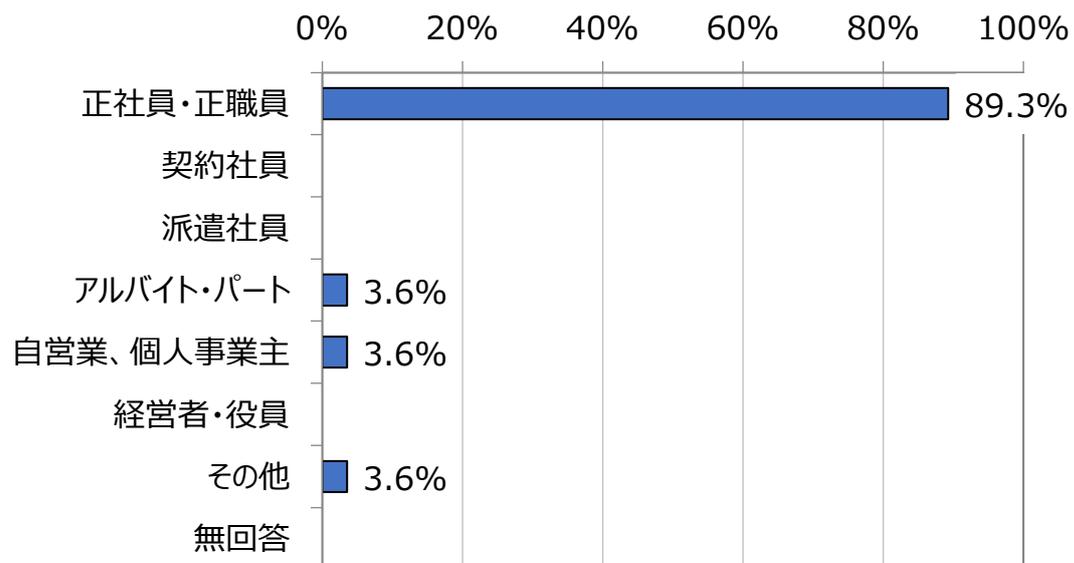
図表 5-26 現在の状況 (n=406)



5-5-5 現在の労働状況

- 「働いている」と回答した中で、労働状況は「正社員・正職員」が89.3%である。

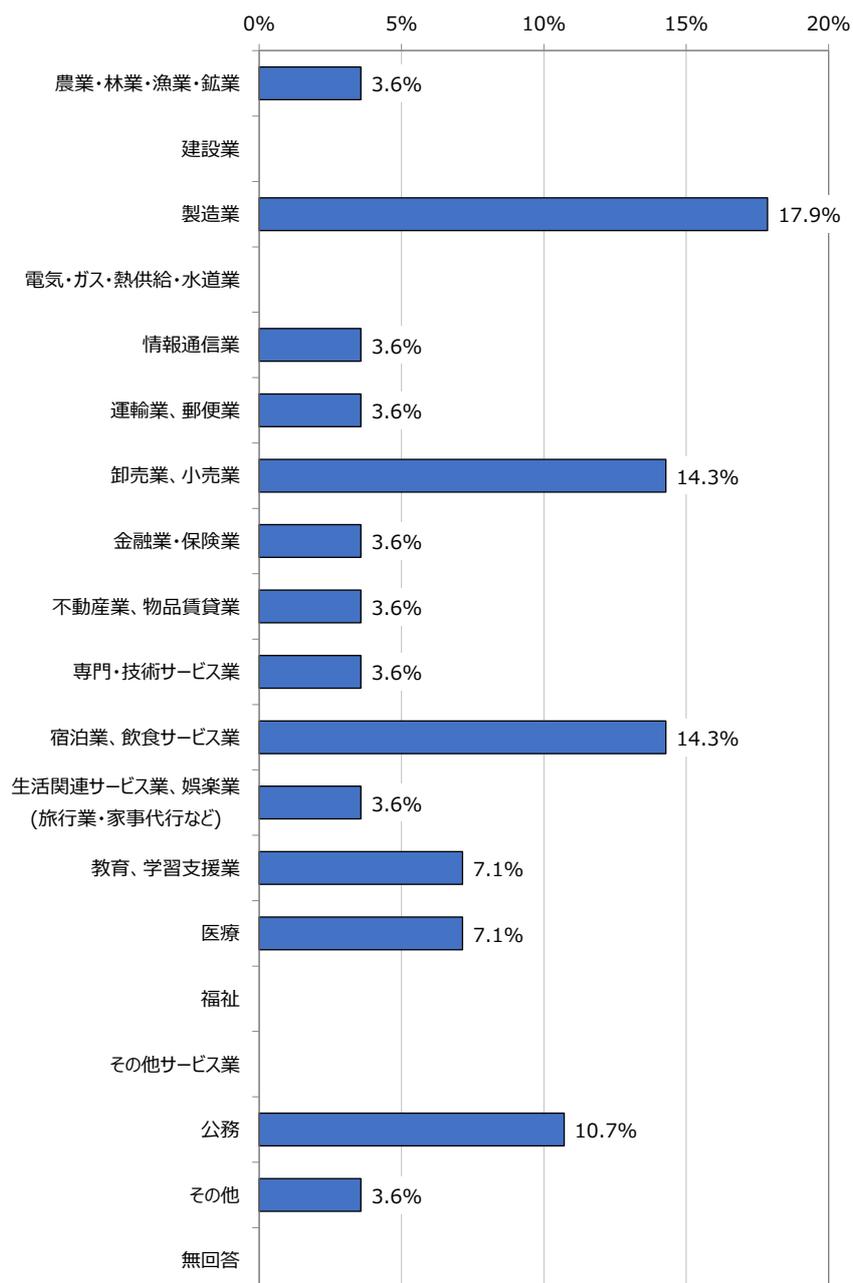
図表 5-27 現在の労働状況 (n=28)



5-5-6 勤務先の業務分野

□ 勤務先の業務分野は「製造業」「卸売業、小売業」「宿泊業、サービス業」など。

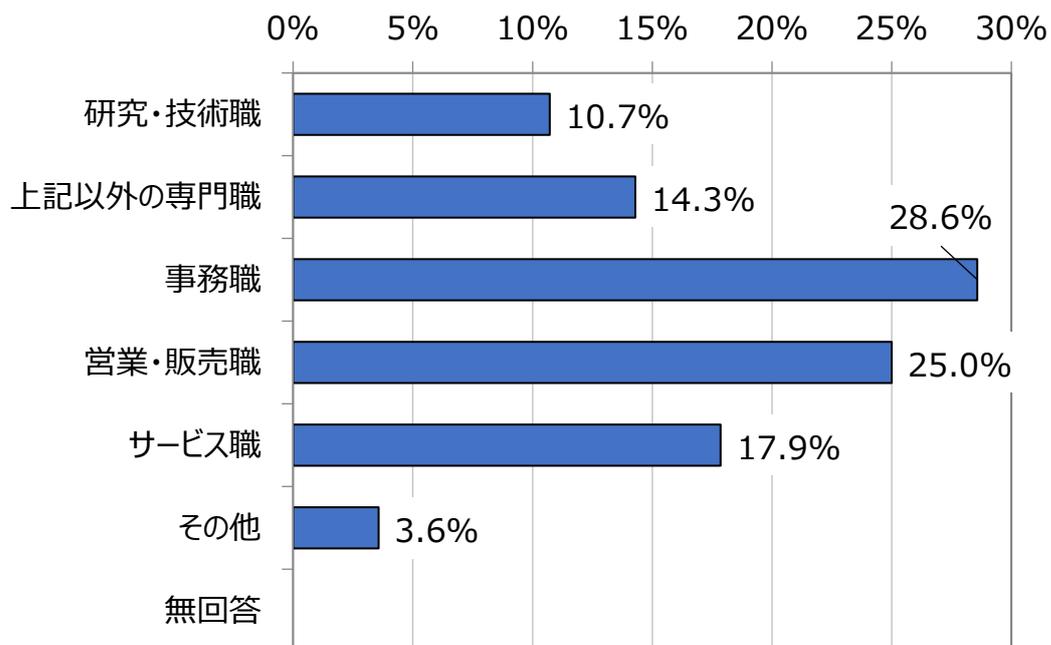
図表 5-28 勤務先の業務分野 (n=28)



5-5-7 現在の職種

□ 「事務職」が28.6%、次いで「営業・販売職」が25.0%、「サービス職」が17.9%。

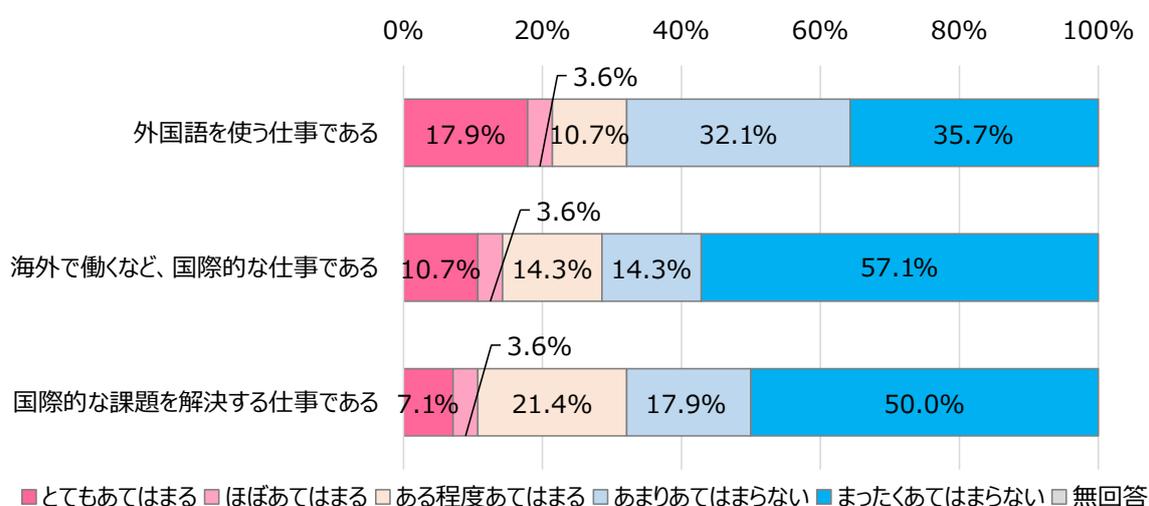
図表 5-29 現在の職種 (n=28)



5-5-8 現在の仕事について

- 現在の仕事に就いて、「外国語を使う仕事」「海外で働くなど国際的な仕事」「国際的な課題を解決する仕事」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答したのは約3割である。

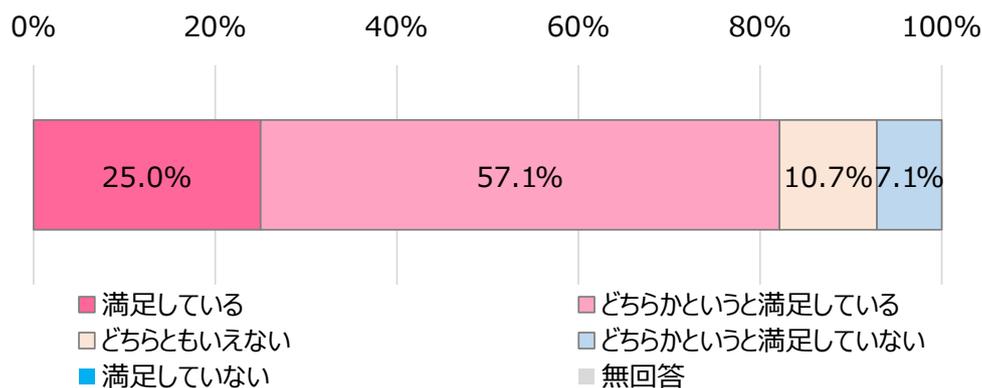
図表 5-30 現在の仕事について (n=28)



5-5-9 現在の職場・仕事の満足度

- 現在の仕事に「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」の割合は、8割を超えている。

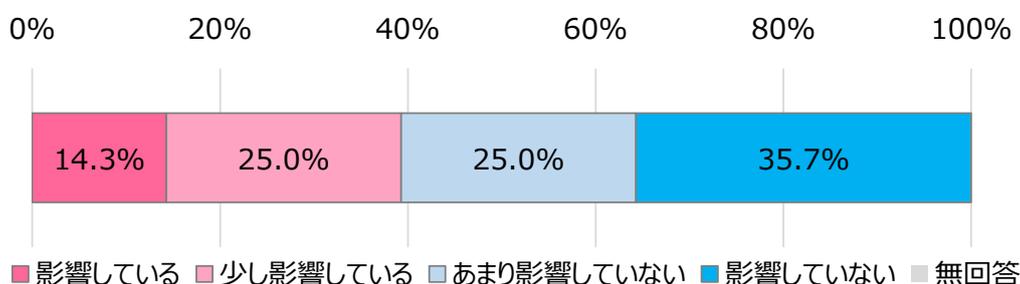
図表 5-31 現在の職場・仕事の満足度 (n=28)



5-5-10 現在の職場・仕事の選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響

- 現在の職場・仕事の選択へのSGH事業及びWWL事業の経験が「影響している（影響している＋少し影響している）」の割合は、約4割である。

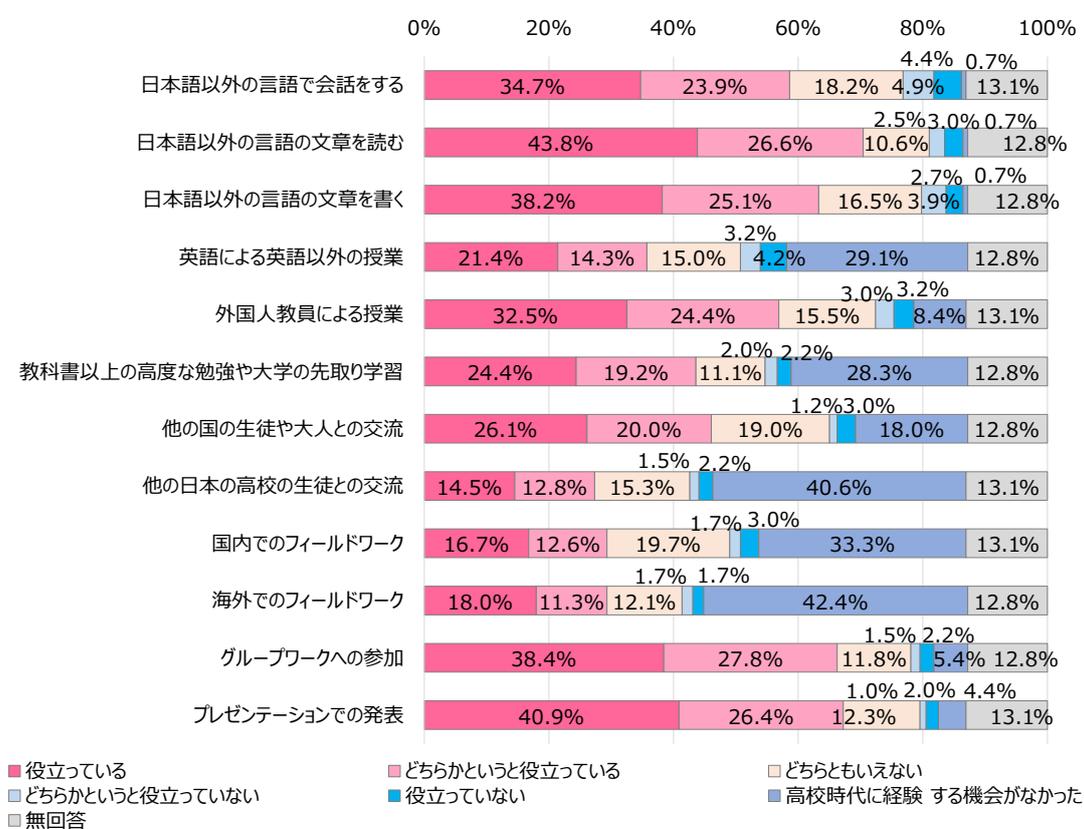
図表 5-32 現在の職場・仕事の選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響 (n=28)



5-5-11 現在の生活に役立っている高校時代の経験

- 高校時代の経験で現在の生活に「役立っている」と回答した中で、「日本語以外の言語の文章を読む」「プレゼンテーションでの発表」「グループワークへの参加」の割合が高い。

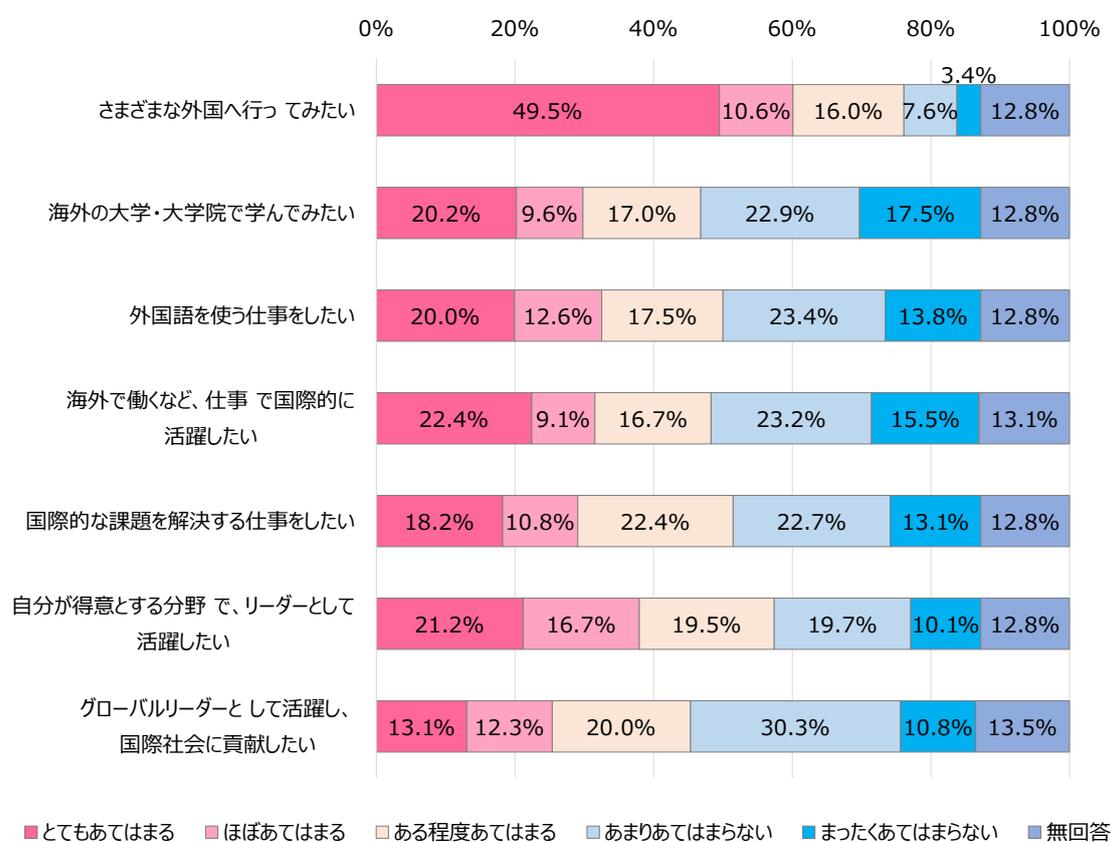
図表 5-33 現在の生活に役立っている高校時代の経験 (n=406)



5-5-12 自身の考え

- 自身の考えとして「さまざまな外国へ行ってみたい」にあてはまる割合が最も高く、次いで「自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい」の割合が高い。

図表 5-34 自身の考え (n=406)



第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング

最終年度のカリキュラム開発拠点校（令和元年度カリキュラム開発拠点校 10 拠点）へのヒアリングを実施した。

6-1 事例紹介

6-1-1 筑波大学附属坂戸高等学校（管理機関：国立大学法人筑波大学）

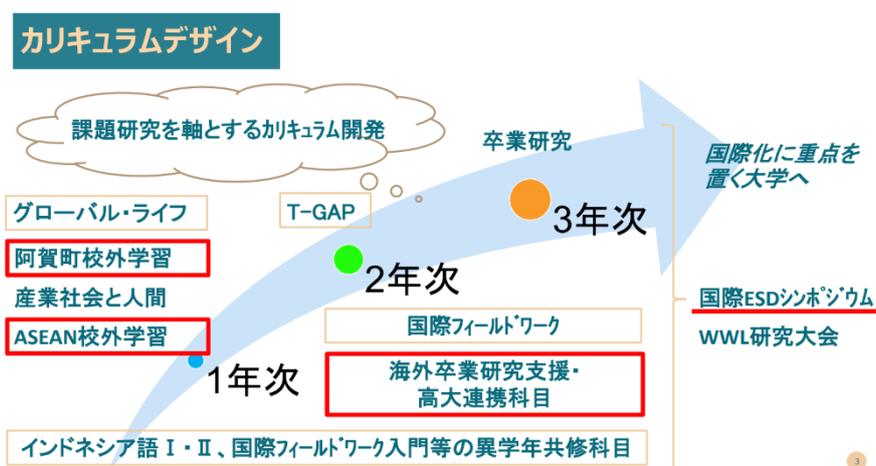
(1)概要

筑波大学附属坂戸高等学校は、2014 年から 5 年間、SGH 校の指定を受け国際教育を推進する様々なプログラムを開発してきた。SGH 校としての取組みを発展させて WWL 事業に取り組んでいる。

(2)探究型学習、海外フィールドワーク・留学等

①概要

WWL 事業以前からグループ・個人での課題研究活動を実施していたが、WWL 拠点校として、生徒全員にグローバルな経験かつ社会課題に向き合う国内外フィールドワークを実施することを計画した。1 年次に社会的な課題について現場調査を経験した後、2 年次・3 年次の課題研究活動に向かうといったカリキュラムデザインを組んでいる。



[出所] 筑波大学附属坂戸高等学校 発表資料「令和3年度「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業における EBPM に向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」成果発表会について」（URL：https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/mext_00036.html）

②フィールドワーク

当初の計画では、1年生の3月に東南アジア3方面（タイ／シンガポール・マレーシア／インドネシア）に訪問しフィールドワークを行い、2年生ではグループの、3年生は個人の課題研究活動を実施する予定だった。だが、新型コロナウイルス感染症流行により海外フィールドワークは中止となり、2021年には地域創生・人口減少等の社会課題をテーマとした国内フィールドワークに変更した。

当初予定していた海外フィールドワークの内容

タイ・バンコク	スラム支援を行う NGO 訪問
シンガポール、マレーシア	パームオイル農園へのホームステイ
インドネシア	国立公園で森林保全のアクションプラン立案

2021年7月に実施した国内フィールドワークでは、1年生の3月に東南アジアフィールドワークに行けなかった2年生全員を対象とした。長崎、静岡、長野、山梨のいずれかに訪問し、地域創生・人口減少・農業の6次産業化・新型コロナウイルス感染症流行以降の観光の在り方といった社会的な課題について、現場を訪問し聞き取り調査を実施した。

③フィールドワークの事前学習・事後学習

事前学習・事後学習として、フィールドワークの内容を1年次必修科目「産業社会と人間」に組み込んだ。事前学習として生徒がテーマに分かれて先行研究を調査、その内容を2月の研究大会で発表し、3月のフィールドワークに繋げる計画であった（上記のよう海外フィールドワークは中止）。

■生徒ヒアリングより

・「産業社会と人間」では「自己理解する」という項目があり、「自分は何に興味があるのか、将来に何になりたいか」となかなか真剣に向き合うことが今までなく初めて真剣に向き合ってみて様々なことを知れたし、また問い立てについてとか、探究の方法・レポートの書き方についても学んで、高校での学びの軸となり今の自分にもすごく活かされており、大

切な授業だったと思う。(2年生女子)

④課題研究

フィールドワークを受けて、2年次では「総合的な学習の時間（ソーシャルアクション、校内名称：T-GAP）」の授業で、グループで社会的な課題を設定して、その課題解決に向けて研究を行う。

3年次には、個人研究活動として「卒業研究」が必修となっている。

■生徒ヒアリングより

・3年次で自分の好きなことをとことん研究出来る「卒業研究」が本当に良かった取り組みだと思っている。「卒業研究」は本当に大変でみんな苦戦する科目ではあるが、本当に自分の好きなことを1年間突き詰められるので、そういう意味では自分の進路に合っているも合っていなかったとしても絶対何かしらの形で将来に生きてくる授業だと思う。(3年生女子)

(3)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

筑波大学附属坂戸高等学校は、もともと総合学科の高校であり、カリキュラムに文系・理系の区別がない。

さらに、1年次の「家庭基礎」を「グローバルライフ」という研究開発科目として実施(SGH指定校時代からの取組)。全ての生徒がグローバルな課題と向き合い、世界の諸課題に対して当事者として関わっていける素養を身に付けるために、「持続可能な社会を作る担い手になる」という視点を重視した授業となっている。

■生徒ヒアリングより

・「グローバルライフ」という、普通科高校では家庭科にあたる授業である。「グローバルライフ」の授業で初めて社会問題に触れた。例えば、服はいま価格がどんどん下がっていて誰でも買いやすいが、実は裏にはさまざまな問題があり、それを解決するエシカルファッションについてだとか、農業・フードライフについて学んで、初めて知ることがいっぱい。「私ってこんなことも知らずに日々生活していたんだな」と、知識的な学びではなく、

現代を生きるためにすごく大切な学びになったなと思っている。(2年生女子)

・「グローバルライフ」の授業で特に印象に残っているのがファストファッションの DVD を見たこと。そのときは何も感じていなかった部分があったが、いま振り返ってみると自分が考えている中で生きてきたりした部分はあると思う。(3年生女子)

(4)大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である筑波大学、さらには筑波大学が国際連携協定を結ぶ海外の大学及びその附属高校との連携を行っている。

①筑波大学との連携

2020 年度、高校生と大学生が同時に履修出来る科目として筑波大学生物資源学類「国際農業研修Ⅶ」が開設され、大学のシラバスに掲載された。

②海外大学との連携

海外大学の附属高校(タイ・インドネシア・フィリピン)とは、交換留学等を行っている。さらには、東南アジア教育大臣機構(SEAMEO)と連携し、SEAMEO に所属する海外の大学生の教育実習を受け入れている。

この他、海外フィールドワークを連携する大学の学生と一緒にいく計画であったが、新型コロナウイルス感染症流行で中止となっている。

(5)高校生国際会議等

「高校生国際 ESD シンポジウム」兼「SDGs Global Engagement Conference」

以前から、毎年、海外姉妹校及び SGH 指定校と「高校生国際 ESD シンポジウム」を開催しており、2021 年 11 月に 10 回目を開催した。

ここ 2 年は、新型コロナウイルス感染症流行により、オンライン開催としている。オープニングにキーノートスピーチの後、分科会に分かれ、テーマごとのワークショップや日頃の課題研究活動について成果発表を行った。2 年生のソーシャルアクション(社会課題解決活動)、3 年次の個人研究活動(卒業研究)で選抜された生徒の発表の場である。

(6)工夫点など

①早い段階で課題発見力を養う工夫

カリキュラムにおいて 1 年次に様々な社会的な課題について知る機会を設け、生徒の課

題発見力・設定力を育成するようにしている。例えば、「グローバルライフ」では、学習指導要領「家庭基礎」の目標に地球市民性を育むため、1) 日常生活の中から世界とのつながりを意識させること、2) 地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせることの2点を追加した。さらに地歴・公民科、外国語科、国際科、農業科、工業科など複数の教科の教員で授業案の作成や授業運営を行っている。

②まずはフィールドワーク先を好きになるようにする

フィールドワークというと課題発見ありきになってしまい、「フィールドワーク先の課題を発見しよう」という頭になってしまう。だが、生徒達には、まずはフィールドワーク先の国・地域を知る・好きになる・仲良くなる、という1ステップを入れるように誘導している。

フィールドワークに先に関心を持ってから、課題を発見するような段階を踏むように指導を行っている。

■生徒ヒアリングより

・フィールドワークを通じて、一番変わったのは自分の中の価値観。海外の方と交流することで、日本とはまったく違う生活や、価値の基準を持っていることを知った。自分の生活を見直すきっかけとなって、例えば手軽に行けるコンビニで買っていたものを「自分で作れるようにならないか」と考えるようになった。(3年生女子)

③教育活動全体で探究の力を育む

1年生「産業社会と人間」、2年生「総合的な学習の時間(T-GAP)」、3年生「卒業研究」が探究活動の柱となっている。さらに、卒業研究の時期が近付いたら英語や数学の授業でも「卒業研究はどうするの?」「テーマはどう考えるの?」というように、日常的に探究の柱を他教科や特別活動で支援するなど、学校の教育活動全体で探究を進めている。

④外部との連携を活用したフィールドワークの実施

他校からの参加者と連携することによって、フィールドワークの幅を広げることができる。また、引率教員の負担軽減も図れるため、他校関係者にも、「ぜひ本校と一緒に参加していただければ」といった旨の声掛け(呼び掛け)ができる。海外派遣の際には、「本校と

一緒に行きましょう」と他拠点校に声をかけたり、教育プログラムを持っている企業や NPO と連携することも多い。また、国内フィールドワークを新たに開拓する場合も、旅行会社等のネットワークを活用して新しい探究型スタディツアーを構築した。

6-1-2 東京都立南多摩中等教育学校（管理機関：東京都教育委員会）

（1）概要

南多摩中等教育学校は中高一貫教校であり、前期生（中学1年生～3年生に該当）・後期生（高校1年生～3年生に該当）の6学年、1学年約160人（4クラス）の生徒がいる。

（2）探究型学習等

①概要

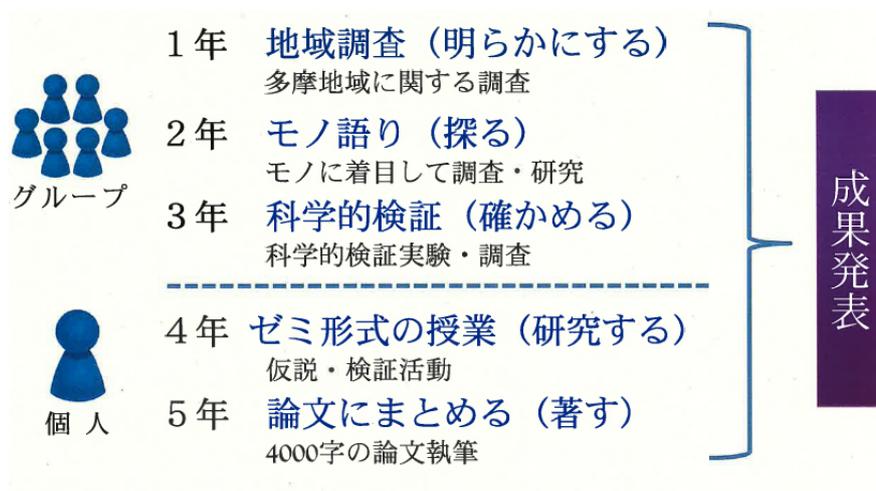
WWL事業開始前から、生徒自ら課題を設定し学ぶ知識活用型のフィールドワーク活動である探究学習に取り組んでいる。4種類の探究力（課題を設定する力／情報を収集・整理・分析する力／論理的に思考する力／発信する力）の育成を目指す。

前期生（中学1年生）から探究学習に取り組む。中学段階でグループ活動を行った後、後期生（高校1、2年）の2年をかけて個人研究を行う。

②各学年の活動

前期生はグループによるフィールドワークを通じて、「テーマの設定→仮説→検証→考察→（新たな疑問を踏まえ）テーマの設定」という探究の一連のプロセスを学ぶ。

後期生では、「ライフワークプロジェクト」と名付けた個人ごとの探究活動を行う。4年生（高校1年生）では、1年間かけて新たなテーマの設定を行う。5年生（高校2年生）では、探究活動の集大成として約4,000字の論文を書く。



■生徒ヒアリングより

・物事をアウトプット／発信する方法を身に付けられた。こういった活動に関わると、自分が調べている内容を他の人に発信する機会が多く、資料のわかりやすい作り方だったりスライドで上手く構造化してわかりやすく作ったりといった技術を身に付けられた。周りの生徒も社会問題に興味がある人が多く、それに感化されて、自分も多くのことに興味や関心を持ち始めた。(2年生女子)

(3)海外フィールドワーク・留学等

新型コロナウイルス感染症流行もあり、オンラインによる学校交流が行われている。モンゴル日馬富士高校、ハノイ チューヴァンアン高校とオンライン交流会を行っている。

さらに、イタリアの IS CARLO DELL' ACQUA 高校からオファーがあり、オンライン交流や SDGs の共同研究を行っている。

■生徒ヒアリングより

・海外の高校との国際交流を通して、英語の技能は力を付けさせてもらったと思う。イベント等で初対面の人と英語で喋るとなっても物怖じせず喋れるようになり、すごく良い勉強をさせてもらった。(2年生男子)

・チューヴァンアン高校とは、お互いの文化の文化について紹介し合った。交流会を実施した時期がベトナムのお正月にあたる時期だったため、ベトナムのお正月について教えてもらい、こちらも日本の行事・日本食・学校生活について紹介した。お正月などの日本と似ている文化もあり面白かった。(2年生女子)

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

①文理融合カリキュラム

各学年に「文理融合カリキュラム」を開発した。

学年	カリキュラム名	内容
3年	データ分析	理科、数学、情報科の融合科目。探究学習(3年生)

		の科学的検証活動でも活用。
4年	地球探究	地理 A、地学の融合科目
5年	MIE(Mathematics in English)	数学の授業を英語で授業を行う（ALT と数学教員がペアを組んで実施）。日本語以外の言語で学習することで、多様な考え方を学び、生徒の視野を広げる。
6年	Pensées	哲学。国内外の社会課題を考察し、ディベート・論文執筆を行う。倫理的なテーマについて、生徒自身が考え、生徒同士で会話・提案を行う。

■生徒ヒアリングより

- ・地球探究の授業の中で、一人一か国を選んでその国について調べて発表しようという課題があり、それは面白かった。普段は積極的でない人も含め、みんな一斉に課題を行い学び合えるというのは面白かった。（2年生男子）
- ・MIE は、今までやってきた数学の知識を英語で復習するといった感じで、英語の勉強も出来るし数学の良い復習にもなるし、面白いと思っている。（2年生女子）

②STEAM 教育講座

ドローン講座、Society5.0 社会における工学、バイオ薬品の開発（大学の研究室）などの講座を実施。希望制で、各講座約 30 名程度の定員となっている。

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

①大学連携による論文指導

東京都立大学、東京外国語大学、東京農工大学の 3 大学と高大接続の覚書を交わし、連携を取っている。5 年生の論文指導や各大学による出前講座などが行われている。

②Tokyo Leading Academy

東京大学主催の Tokyo Leading Academy に参加する生徒もいる。

(6)高校生国際会議等

東京都教育委員会主催で「東京高校生国際会議」を開催している。

(7)工夫点など

①リーダーシップ・フォロワーシップの育成

前期生の教育では、探究学習だけでなく様々な授業でグループ活動を行う。その中で、リーダーシップとフォロワーシップの関係を体験出来るようにしている。グループによってリーダーが異なり、牽引する力のあるリーダーもいれば、内向的な生徒がリーダーになることもある。フォロワーシップでどのようにリーダーを支えていくか考えさせ、リーダーの在り方を考える機会としている。

②課題設定に時間をかける

ライフワークプロジェクトの課題設定には、前述の探究学習テキストとワークシートの30本ノックを活用し、時間を掛けて行う。

また、企業等の研究やビジネスに関する講演、自治体職員による地域社会やグローバル社会についての講演等を開催するなど、視野を広げる様々な体験を用意している。

また、ライフワークプロジェクトを開始する前の前期3年生（中学3年生）時に、東京都立大学での発表の機会を設け、大学でどんな研究が出来るのか、世の中にどんな研究があるのか知ることが出来るようにしている。

③フィールドワーク推進室

探究学習を専門とする分掌「フィールドワーク推進室」を設けており、進路部と連携し進路実現を見据えながら、活動を行っている。

6-1-3 渋谷教育学園渋谷高等学校（管理機関：学校法人渋谷教育学園）

(1)概要

渋谷教育学園渋谷高等学校は第1期SGH指定校であり、WWL事業を実施するにあたり、SGH事業で実施していたプロジェクトを引き継いでいる。ただし、SGH事業では学年別にプログラムを行っていたが、WWL事業となり学年の継続性などを意識して、学校全体の教育目標である「自調自考」を中核として3年間を通じての教育プログラムを展開している。

(2)探究型学習、海外フィールドワーク・留学、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

①Hiroshima Brochure プロジェクト（1年）

Hiroshima Brochure プロジェクトは、「世界の若者たちと一緒にパートナーシップをどう構築していくか」を目標とした1年次の必修のプロジェクトである。

以下の複数教科・課外活動で「広島・長崎の原爆投下」について学び、それらの成果を総合して英語の授業において資料としてまとめ、アメリカの高校生に発信する。

社会	現代社会の中で核の問題に対する考え方を学習する。
国語	小説「黒い雨」を読み、被災した人々の生活ぶりを学習する。
情報	広島を調べ、どんな風な形で街が残っているか探す。
総合的な探究の時間	広島研修旅行に合わせて、それぞれの班で行きたいところを調べてルートマップを作成する。
広島研修旅行	原爆資料館の見学と語り部による被爆講話を必須とする。
英語	Hiroshima Brochure （広島のパフレット）を実際に作成する。 自分たちで学んできたことを、アメリカの高校生に対し「私たちが考えている問題・未来」に向けて学びを発信する。

英語の授業において作成した **Hiroshima Brochure** を連携校である **Saint Stephen's Episcopal School**（米フロリダ州）の世界史の授業で発表し、アメリカの高校生に広島について理解を深めてもらう（コロナ禍前は、現地訪問していたが、コロナ禍においてはリモートでの交流）。「核の被害」「被爆者の悲痛」という観点ではなく、様々な社会課題で戦争・紛争を乗り越え「どのようなパートナーシップを作っていくか」「未来を構築するためにど

ういうことを考えたら良いのか」という観点での取組みとなっている。

■生徒ヒアリングより

・ **Hiroshima Brochure Project** にて選ばれた二組がフロリダの現地に行き、歴史の授業や現地の生徒との交流を行った。フロリダ研修に行く前に、友人と行程を考える時間は楽しかった。しかし、行ってみると自分の無力さ、英語力の無さを実感した。ただ、それがそれからの学習の仕方が変わったきっかけになった。(3年生女子)

・ 広島研修に行く前に受けた平和学習が自分のチームは影響を受けた。現代文の授業で黒い雨を読んだり、日本の映画で原爆を使われる際の描写の仕方とアメリカの映画との描写の違いを比べる授業があった。広島に行った際、語り部の方から話を伺って、より悲惨さを実感した上で、原爆に関する作品を集めてフロリダの現地の方に伝える **brochure** を作った。現代文の授業の影響は大きかった。(3年生女子)

②Partnerships for the goals プロジェクト

2年次には数多くのプロジェクト型教育を行っており、その中で代表的なものが **Partnerships for the goals** プロジェクトである。教科の枠を超えて企業・団体などと連携し **SDGs** について学び、その結果を発表する。また、プロジェクトの一環として、生徒全員がサービスマーケティングも行う。

地理では「気候変動」、家庭科では「子供の児童福祉・人権」をテーマとした授業、その他、英語の授業でも **SDGs** をテーマとした教材を活用とした授業を行うなど、**SDGs** などの課題が社会にどのようなインパクトを与えているかを授業中で取り扱う。気候正義に関心が高い生徒も多く、京都大学・宇佐美先生による出張講義なども開催し、気候正義を学ぶ機会を設けている。

さらに、各授業で社会課題を学ぶだけでなく、ボランティア活動に参加し、行動によって社会に発信するという経験を積むことを目的としサービスマーケティングを実施している。学校が、生徒の社会発信・行動を応援するという観点からカリキュラム設定をしている。

例えば、他校生徒と一緒にプロジェクトを考え、「海洋プラスチック問題」「渋谷区でのゴミ拾い」「子ども食堂のボランティア」などのボランティアを行う。自主的に、他校と連携する生徒もいる。PRU (**Plastic Removal from Us** : 渋谷区ゴミ拾い活動チーム) では、大学・他校の生徒と一緒に活動を行っている。

③Research and Analysis プロジェクト（1～3年）

Research and Analysis プロジェクトは、生徒全員がそれぞれ研究テーマを決め、3年間研究を行い、同校が発行する論文集「自調自考論文」にて論文を発表する。

1年次に教員1名に対し生徒10～15名からなるゼミを立ち上げる。ゼミ内で中間発表や面談を行う。

テーマは、生徒によって異なり、例えば、Hiroshima Brochure Project を通じて広島の大千羽鶴に関心を持ち、「千羽鶴の二次利用について」をテーマに、千羽鶴の保管・維持について広島の高校生にアンケートを取り、分析する生徒もいる。一方で、「アフリカの医療政策」「臓器移植ネットワーク財団法人の医療支援」「子供の人権問題」「ブリの切り身の変色を防ぐ」といったこれまでの授業とは直接関係のないテーマを設定する生徒もいる。生徒が自分の身の回りに関心を持ち、自分が将来どのような社会人となり、社会に貢献していく人材になりたいのかを考える機会とするカリキュラムとなっている。

1年生は、テーマ決めが中心となり、1年次の春休み～2年次のゴールデンウィークである程度決まることが多い。2年生の夏頃までに大枠を作成し、2年生の後半から教員が論文を読み直し・戻しを行う。

(3)大学教育の先取り履修等、大学との連携

電気通信大学・東京外国語大学と連携を取っており、出前講座など教授の指導を受ける機会を設けている。

(4)高校生国際会議等

令和3年8月に、企画運営も全て生徒の手で行う学びのオリンピック「SOLA2021[※]」を開催した（[※]Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021）。

SGH 指定校期最終年度（2018年）に「Water is Life／世界高校生水会議」を実施している。WWL 拠点校となり新たなことを実施しようと起案した会議が「SOLA」である。Water is Life では、会議に参加出来る生徒は3人～5人であり、それ以外はボランティアとしての参加であった。しかし、国際会議の内容・日程が固まっていたこともあり、ボランティアの生徒自身による工夫がほとんど出来なかった。そこで、「SOLA」は、1から生徒が企画する会議とした。スタッフを集めるところから企画まで生徒自身に任せ、多くの生徒に「自分たちが主体となってやった」という経験をさせることを目的とした。

参加者は17の国と地域+国内27都道府県100校、約600名+同校参加生徒約70名+スタッフ約200名(中学生含む)と900名近い生徒が参加するイベントになった。

「SOLA」では、大きく「コンペティション(競技として順位が出るもの)」「発表」「模擬国連・模擬G7」の3種類の企画を行った。20の企画があり、16個の国際Ver.(英語で実施)と4個の日本語Ver.があった。例えば、「冷戦プロジェクト」では、冷戦時代を世界の高校生と一緒に考え、どのような教材を作ればお互い理解出来るのか議論した。



■生徒ヒアリングより

・実行委員をやっており、SOLAが立ち上がった際、全体ポスターやロゴのデザインを校内募集することになっていたが、「生徒に呼び掛けても誰も応募してくれないだろう」「私たちの気持ちをわかってもらえないなら、実行委員たちで簡単に作って終わらせてしまおう」と考えていたが、先生から「みんなでやったほうがいい」とアドバイスをいただいた。先生のアドバイスどおりにデザインを出来る生徒を探し依頼したことで、全校的なイベントになったし、見事に先生のアドバイスどおりになった。20種目の運営についても、20種目全て実行委員側が手掛けることは不可能であり、そういう意味では任せることを学んだ。200人の運営生徒も一人一人やる気を持ってやってくれたおかげで当日も問題なく開催出来た。(2年生女子)

(5)工夫点など

①普通の授業に探究に関わる題材を用いる

渋谷高等学校の取組みは、「総合的な探究の時間」だけで探究活動を行うのではなく、普段各教科の授業において探究に関わる題材を学びながら、その成果を組み合わせることで自調自考が出来るようにカリキュラムデザインを行っている。SDGs などについて特別な講義などを設けなくても生徒の意識付けを行えるようにしている。

シラバスの年間計画において、各教科で「この時期にこのテーマを扱う」という設定を行っている。

- 1 年生の例：広島研修に向け、現代文で「黒い雨」、現代社会で核兵器、英語ではアメリカ側の核兵器の主張（英文）について学ぶ。
- 2 年生の例：家庭科で子供の人権・女性の人権、現代社会で人口動態・女性の社会進出、歴史でイスラム教の歴史を学ぶ。

②英語の授業においてアウトプットの機会を設ける

上記のように各教科でインプットした知識を、英語の授業で議論させて、アウトプットする機会を設けている。英語の授業では、各教科で習得した知識をもとに会議・ディベートなどのロールプレイや日本の大学で学ぶ留学生を招いてのインタビューを実施する。生徒の選択科目によって知識が異なるが、例えば、エネルギー問題について、地理を選択した生徒と化学を選択した生徒で異なる視点からの議論を行うことが出来る。地理、化学の授業では、当該テーマに関する授業を先に行い、英語の授業で知識が活用出来るように調整している。

■生徒ヒアリングより

- ・色々なプロジェクトを経験して、海外大学を目指すこととした。海外大学を選択したのは親の意思もあるが、それを抜きにしても高校時代に色々なプロジェクトやったことも大きいし、それが無ければ海外大学を選ぶ選択肢がなかった。(3年生男子)

③テーマ設定に向けた工夫

Research and Analysis プロジェクトでは、最初のテーマ設定時期に、卒業生による「クエスチョンってどうやって立てるのか」というワークショップ形式の間立て練習会を行う。

また、同校の中学 3 年生～高校 2 年生までの 3 学年が、高校 2 年生 3 学期時点の優秀論文選抜者 15 名による論文発表・ポスターセッションに参加している。Research and Analysis プロジェクトを開始する前の段階から、優秀論文の発表を聞く機会を設け、論文作成とはどういうものなのかを実感出来るようにしている。

6-1-4 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校（管理機関：国立大学法人金沢大学）

(1)概要

2014年度から5年間SGH指定校であり、従来から総合的な学習（探究）の時間に入力していた。

(2)探究型学習等

個人研究として、1年で地域課題研究、2年でグローバル課題研究、3年でグローバルキャリアパス（自己の振り返り）を行う。「地域」→「グローバル」→「自己」という流れを意識している。

1年次の地域課題研究は、総合的な探究の時間の2単位で全員必修科目である。開始当初はグループ研究であったが、令和3年度は個人研究としている（将来的に、個人研究である2年生の研究と接続させる予定）。地元、金沢をフィールドとして、地域の課題を発見・解決策の提案を行う。例えば、金沢の交通機関の改善、商店街の活性化がテーマとなった。



2年次ではグローバル課題研究の1単位の授業となる。取り扱う課題をグローバルに広げ、個人研究を行い、発表や論文作成をする。ゼミ形式での実施となり、教員1人に対し6～10人の生徒がつく。基本的には、個人単位の研究だが、シンガポールの高校生と共同研究を行ったケースもある。

3年次は、グローバルキャリアパスという1単位の授業である。2年間の自己の経験をま

とめ、将来設計を立てる。2年間の学びを踏まえて自分に何が出来るかをまとめる。

- ①「学びの履歴書」作成：2年間の経験と学びをまとめる。
- ②「学びの設計書」作成：自己の分析と、将来の目標設計。
- ③オンラインキャリアパス：卒業生15人を招き、(オンラインで)講話。

■生徒ヒアリングより

- ・学校外の人と関わる機会が貴重な体験だったと思うのと同時に、自分たちで学校外に課題を見つけてどんな取材し解決していけるかなど、中学校とはレベルが違う内容であり、どうやったら良いだろうと迷うことが多かった。(3年生女子)
- ・シンガポールとの共同研究を行った。シンガポールの学生と定期的に Zoom で会議をした。とても大変だったことはテーマ設定。NJC 校もいくつか提案してくれて、それをもとに設定したが、シンガポール側の課題であり日本にはあてはまらなかった。3~4か月経過した頃にそこからテーマを考え直さなくてはいけなくて大変だった。でも今までやっていた研究が無駄ではなく、以前調べたことで活かせる部分もあったため、途中で回り道をしながらか、探る中で一つの研究に仕上がっていくのもありなんじゃないかと感じた。(3年生女子)

(3)海外フィールドワーク・留学

シンガポール研修(連携校シンガポール NJC 校)を予定していたが、コロナ禍により中止となった。そこで、国内・山陰地方にフィールドワーク先を変更し実施。

また、シンガポール NJC 校とは、リモートによる共同研究を実施した。

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

1年生の総合的な探究の時間の2単位のうち1つを「国際教養基礎」とし、探究の方法を指導した。課題研究の基本的なスキルとして、ポスター作成・プレゼンテーション法や、様々な思考ツールについて学ぶ科目とした。

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である金沢大学において、科目等履修生の出願資格を「高等学校等に在学している者」へ拡大し、大学の授業に参加できるようにした。この制度を活用し、WWL 事業の一

環として、附属高校から5名（1年2名、2年3名）が大学の開講科目を履修した。

(6)高校生国際会議等

第1回を令和3年3月にリモート開催した。テーマは、「パンデミックの時代に私たちはどう生きるか」。コロナ禍における個人の行動変容に重きを置いて、分科会で分かれてディスカッションを行った。4テーマ12分科会（3分科会が英語）を行い、国内連携校、北信越3校、エジプトやアメリカなどの海外在住者、述べ参加人数66人となった。

分科会 A：地球温暖化と異常気象・災害
分科会 B：科学技術のこれから
分科会 C：コロナ禍で考える私たちの学び
分科会 D：高校生ソーシャル・イノベーション

第2回を令和3年8月に同じくリモート開催した。2回目は個人研究に重きを置き、国内外の生徒が行っている課題研究についての意見交換会とした。国内連携校、北信越4校、東北1校、シンガポールNJC校が参加し、述べ参加人数143名となった。

■生徒ヒアリングより

・全部英語で大変だった。日本人だけでなくエジプト人もいた。馴染みのない水問題など、国によって課題が違うことが知れた。同じグループに大学の感染症専門の教授がいて、今後の日本の感染症はもっと増える可能性はあることを聞けるなど良い経験になった。(3年生女子)

(7)工夫点など

①研究テーマ決定へのサポート

1年生は地域が研究テーマで、2年生はグローバルが研究テーマとなる。2年次になった時、急にグローバルと視野が広がるので、苦勞する生徒も多い。テーマ決めの期間は2～3か月と時間をかけて行う。決まらない生徒には、面談を繰り返し実施している。教員は、生徒の興味を引き出す面談を心掛けている。また、市販の教材である啓林館「課題研究メソッ

ド」を活用しており、役立てている。

②留学生を活用した英語でのプレゼンの機会創出

大学の附属高校であることを活かし、金沢大学の留学生に、英語で作成したポスターを見せたり、英語でプレゼンをしている。

6-1-5 静岡県立三島北高等学校（管理機関：静岡県教育委員会）

（1）概要

SGH 指定校であり、SGH 指定校期間が終わるにあたり、この活動を継続し県内他高校に取組みをより波及させたいと考え、WWL 事業に申請・拠点校となった。

（2）探究型学習等

総合的相互な探究の時間において、「Crisis（クライシス：危機）に負けない持続可能な社会づくりを目指して～SDGs の視点からの多面的なアプローチ～」をグランドテーマとし、探究型学習のカリキュラム開発をしてきた。いずれもグループにおける研究活動で、2年間同じグループで活動を行う。

SGH 指定校期のグランドテーマが「安全な水の確保」であり、この時のカリキュラムを発展させて現在の取組みとなっている。

SGH 指定校期は、1年ごとにグループを変えていたが、クラス替えを挟んでもそのまま継続し、2年間計画で探究を深めるようにしている。これは、SGH 指定校期において、1年間だと探究のサイクルを回している途中で終わってしまうチームが多く見られたためである。

さらに、2年間同じ研究チームだと冗長になってしまう恐れもあったため、2年生後期にはソーシャルビジネスの視点を加えて、研究結果を踏まえて社会課題を解決するビジネスプラン作成まで行うようにした。社会を変える実感を持つ機会とし、さらに思考を深める力を付けていく狙いがある。

■生徒ヒアリングより

・探究は本当に自分たちがやりたいことについて、自分たちで全部考えて動くことが出来た。他の授業はやりたくなくてもやるといった受け身の部分があるが、探究は全部を自分たちが動かなければ何もしないまま終わる授業であり、やりたいことをやれて楽しかった。（2年生女子）

・小学校や中学校でこんなに大規模な「自分たちで目標を立ててその達成のために何か行動する」ということはあまりしてこなかった。最初にテーマを決めたとき、何となくすぐグループの中で達成することが出来るのではないかと思っていたが、フィールドワークに何ヶ所か行ったりアンケートを取ったりする予定は実現することが難しく、色々な視点から

考えたときに様々な問題が発生してしまうという壁にぶつかったりもした。(2年生女子)

- ・自分が活動する前は、「こういうところはこういう解決法がある」と、一つの問題に対して一つの視点だと思っていた。しかし、フィールドワークやアンケートをすることによって、全ての関わる人や国によって問題も違うし、その人によってコミュニケーションの取り方も違う。少しでも色々な視点から物事を見ないと問題に対して多くの人が満足する解決方法にならないということを学んで、一つでも多くの視点で物事を見られるようになったと思う。(2年生男子)

(3)海外フィールドワーク・留学

選択科目として1年生を対象とした海外研修を設置。現地の研修だけでなく事前事後研修も含めて週1単位の授業である。令和3年度は10名の学生が参加した。

ベトナムで現地研修を行う予定であったがコロナ禍の影響で中止となり、令和2年度に関しては、下記「STEM for SDGs」と合同で長崎・壱岐研修を行った。壱岐ではSociety5.0の実現を目指す取組みを島全体で行っている様子を学んできた。

令和3年度は、東京のJICA地球広場や東京の企業を訪問し、生徒のプレゼンテーションやワークショップを行った。また、12月にはホーチミン貿易大学の学生との交流や、現地でSDGsを目指しながら企業活動を行う日本企業とのオンライン研修を行う。その他、立命館アジア太平洋大学の学生とオンライン交流や、JICA協力隊員経験者による出前授業を行った。

■生徒ヒアリングより

・海外研修のプログラムで、どういう研究方向で行こうか各グループで決めたが、そのとき分野別に文化や環境などで分け、「文化だったらこういう問題がある」とさらに枝分けして、こういう問題のときはこういう人が困るといった事例を知るプログラムがあった。最初は難しかったがだんだんと色々な意見が出て、そのプログラムをやったことで色々な視点から見るといふ考え方が深まったと思う。(2年生男子)

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

2年生の選択科目「STEM for SDGs」を実施。物理、化学、生物のアプローチで研究活動を行う。令和3年度は18名が履修、週に約1回程度の講座を開催している。

物理、生物、化学の3つの班に分かれて研究を行う。例えば、物理班では、「宇宙エレベーターの中でどのような発電活動が出来るか。それをどのように地球に送電出来るか」という課題に対し、モデルの作成などを行っている。

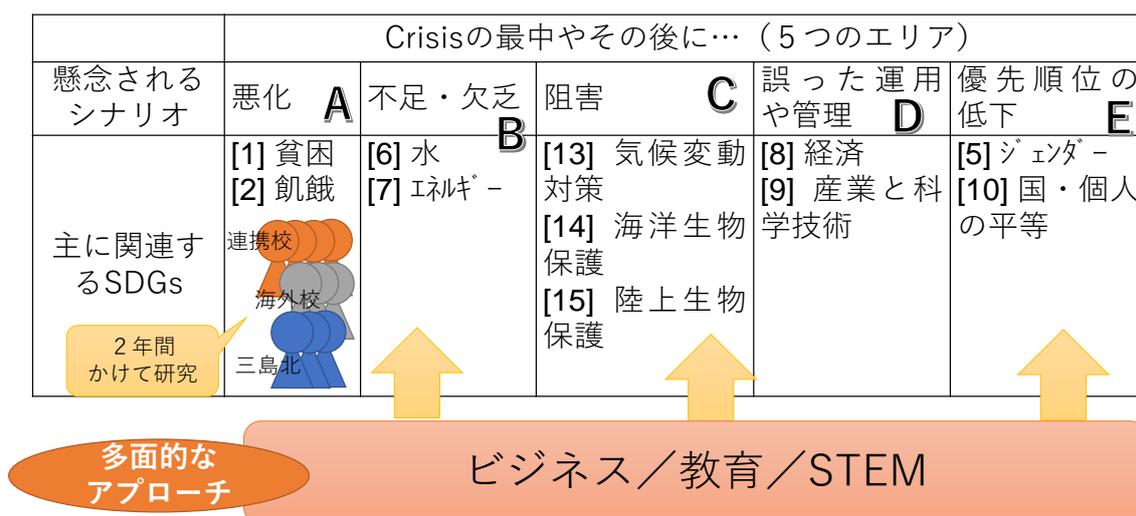
なお、一部の生徒が3月にミネソタ研修を予定していたが中止となっている。代替研修として、令和2年度は長崎・壱岐研修、令和3年度は1泊2日で筑波研修をした。

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である静岡県教育委員会主導で大学教育の先取り履修の仕組みを整備している。静岡大学と連携し、大学1年生の必修科目「数理データサイエンス入門（オンデマンド授業）」を、高校生にも提供出来るようにした。静岡大学に入学する場合は認定済み単位となるよう検討を進めている。令和2年度には、三島北高校2年生280名が教科「情報」の中で受講している。令和3年度は、県内連携校3校からも希望者を募り、合計66名の生徒から応募があった。

(6)高校生国際会議等

令和3年9月に、「Crisisに負けない持続可能な社会を目指して」をテーマに高校生国際会議を開催した。対面（県内の高校のみが参集）とリモートのハイブリッドで開催し、5つのプログラムに分かれてディスカッションを行った。



海外校、連携校、三島北高校からなる5人（異なるエリアについて研究したメンバー）の混成分科会を組み、大学生アシスタントがサポートし議論を行った。5つのプログラムに対

し、5か国11校15チーム、総勢50名の生徒が参加した。

3日間の開催で、上記メインプログラムは2日目の開催とした。初日は市内のホールに集まり、オープニングセレモニーや基調講演を実施した。

最終日午前中には、海外校と県外校は学校ごとに、三島北高校に集まった県内連携校は混合メンバーで、3分間のムービーを作った。Cross-border Proposal Movieとして、5つの国の生徒が自国以外の国の社会的課題について、自国の行っている活動を元にしながらか「こうしたらいいのではないかと提案する内容となっている。午後には、開会式に先立って全員で鑑賞した。

この他、課題探究ポスターセッション等の並行プログラムを実施する予定だったが、WEB上のデータでの公開に切り替えている。

■生徒ヒアリングより

・国際会議の発表のとき、自分たちが考えたアプリの提案をしたところ、海外の方から目の見えない障害の方にはどう対応するのかと意見をいただいた。自分の身の回りに障害を持った方がいなかったため、そういう方々を含んでいなかったことに気づき「しまった」と思った。(2年生男子)

(7)工夫点など

①外部との連携でモチベーションを上げる工夫

外部機関との連携を活用している。1年生の探究では、6月と10月に1回ずつ外部の方(NPO法人、企業、大学の先生など)とセッションを行っている。2年生は、プレゼンの審査委員として10名程度、外部の方を招いている。

また、外部の方には、答えを生徒に提示しないように依頼している。生徒にうまく質問をして「こんな考え方もあるよね」と示すにしても、生徒が求めている答えをズバリ言わないように依頼し、外部の方に評価してもらい、大人に真剣に耳を傾けてもらえるという場を設けている。

②モデルとなる授業案の作成

課題研究は、教員全体で関わっている。そこで、WWL推進室の中核となる先生が授業案を作成し、教員全体で共有している。

さらに「こんな声掛けをして、このタイミングでこういう生徒に発表させて、こんな感じで授業の流れを作ってはどうか」といったミニデモ動画を作って他の教員に見せている。

6-1-6 立命館宇治高等学校（管理機関：学校法人立命館）

（1）概要

SGH 指定校として IB コース（国際バカロレアコース）、IM（留学必須コース）において取組みを行っていた。その後、2018 年度より、文理融合のカリキュラムを作り、探究をカリキュラムの柱とするカリキュラム改革に着手してきた。この改革が、WWL 事業の狙いとも一致する部分が大きいため、WWL 事業への参画を決定した。

（2）探究型学習

SGH 指定校時代に IB コース（国際バカロレアコース）、IM コース（留学必須コース）で行っていた探究学習を、WWL 事業では IG コースにも展開する。IM コースはグループで、IG は個人（グループも可）で課題探究を 3 年間かけて行う。

IG コースでは、「コア探究」と呼ばれる 3 年間 5 単位相当の総合的な探究の時間を実施している。同校では、探究活動にキャリア教育の要素を含め、生徒が自分自身の本当に組みたいテーマを見つけることを重視した探究的な学びを行っている。最終的なゴールを、高校 3 年次で生徒自らが「自分のテーマ／自分のプロジェクトとして、これからも深めたい」と思うテーマを決め、論文、プロジェクト実施、起業プラン作成のいずれかとして形にする。「生徒が高校 3 年間で何か見つけて、大学に行ってほしい」という考えの下、実施している。

IM コースでは、GLS（Global Leadership Studies）という名称で総合的な探究の時間を実施している。IM コースは 3 年間のうち 1 年間は留学期間であり、実質 2 年間で 4 単位相当の取組を行う。留学前に、色々な方の講演を聞くなど「視野を広げる」活動を行うとともに日本文化探究を行った。留学から帰国後、高校 3 年次においては「生徒が社会を変える」をテーマにし、国内外の地域の活性化に取り組む。

例えば、海外との交流として「ラオス研修」というプログラムを実施している。ラオスコーヒーの仕入れ農家支援では、地域の方に焙煎していただき、興風祭（文化祭）や地域の祭事で販売し、その収益をラオスの教育に還元するなど実際の活動まで結び付ける。

IG コース、IM コースいずれも 3 年間に掛けて探究学習に取り組む。各学年で途中段階の発表を行う機会を挟みながら、3 年生の 1 月後半に全生徒参加の公開研究会を行う。

この他、特にプロジェクト型の研究では、他校の発表会への参加やプロジェクトアワード、ビジネスプランコンテスト参加など外部への活動も増えている。

■生徒ヒアリングより

- ・自分たちで課題設定をして、取り組んでいくことの難しさをたくさん感じる事が出来た。自分たちで計画を立てて実行しながら、先生方のネットワークを紹介してもらうことも出来た。たくさんの方の協力を得ることや、今後大学生・社会人になってからも活かせる経験がたくさんでき、その点はすごくやりがいのある活動になった。(3年生男子)
- ・週 2 時間分を活動に充てるが、授業外の時間を活用して問題に取り組んでいかなければならなかった。どうやって一人一人の時間を捻出して問題に取り組むかに苦労した。対策として、いかに授業の中で効率的に出来るかを調整したり、複数のメンバーで出来ること・個人で出来ることに分けて限られた時間の中でどんどん進めていくという形を取るなど、マネジメントしていくことで問題を解決出来た。(3年生男子)

(3)海外フィールドワーク・留学等

海外研修、国際会議参加や海外からの学生招聘など海外交流を盛んに行っていたが、コロナ禍の影響で実際の交流が出来なくなり、オンラインに切り替えている。

IM コースのラオスに一週間滞在する渡航プロジェクトも、現地のスタッフが Zoom にて日本国内の WWL 連携校（福岡・横浜・埼玉）も繋いだ交流イベントに切り替えた。1名の教員に対し 10名の生徒を連れてラオスに行く予定が、リモートでは 1名の教員に対し 40～50名の生徒がラオスの市場や農園を見ることが出来たなど、良かった面もある。1年間の海外留学は、時期と期間を変えて実現している。

IG コースでは、希望制の短期留学や夏休み研修を、コロナ禍以降は希望制のオンラインイベント（海外渡航・海外研修）に切り替えて実施した。

■生徒ヒアリングより

- ・1年次（新型コロナウイルス流行以前）にラオス渡航が出来た最後の学年だが、ラオスに行った際に自分の世界を見る視点が変わった。それまでは社会問題を解決するのは遠い存在であり、社会問題自体も遠い場所で起きている問題だと思っていたが、ラオス渡航に行ったことで、自分の行動・考え方自体が社会問題に影響を及ぼしている面も多くあるということを知り、社会問題・SDGs に取り組みたいと思った。2年生になって SDGs の授業を選択した際、その授業では自分のプロジェクトを行えると知り、SDGs という授業を通

して自分も社会に対してアクションを起こしたいと思い、自分のプロジェクト「SDCs」を立ち上げた。(3年生女子)

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

①科学と人間生活

文部科学省指定科目(理科)の「科学と人間生活」を、文理融合カリキュラムとして1年次に設定している。

「科学と人間生活」は理科学科目であるが、人の身近にある様々な科学の現象や人間生活に関係ある科学の実証を生徒たち自身が考え探究する内容が含まれており、当校では文理融合科目として相応しいと考え実施することとした。

②Science for SDGs、SDGs

2科目ともイマージョンで実施された。IMコースでは、Science for SDGsとして、科学的な観点からSDGsを考えていく内容。IGコースのSDGsを含め、SDGsに係わる実例の学びからプロジェクトを実行する。

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

立命館大学と高大連携プログラムを設定し、当校生徒が参加し大学の先生から直接学びを受ける機会を設けている。大学での講義聴講、大学講師が来校しての講義、ゼミ参加などがある。

この他、APU(立命館アジア太平洋大学)の学生海外研修への参加を企画していたがコロナ禍のため実現しなかったが、APU国際学生とのディスカッション企画を新たに実施するなど、グローバルイシューに対するディスカッションの場を設定することが出来た。

(6)高校生国際会議等

WWL拠点校事業1年目(2019年度)に6種の国際交流イベントを対面で開催した。2020年以降はコロナ禍の影響により全てオンラインとなっている。

①全国高校生SRサミット FOCUS

毎年8月に実施する「全国高校生SRサミット FOCUS」は、対面実施時は約100名の生

徒参加であったが、2020 年度にオンラインに切り替えて参加者数が 350 名に増えた。

「FOCUS」では、全国各地の PBL 型学習を行う学校のプロジェクトが集結する。プロジェクトメンバーが他校のプロジェクトに参加し合い、各々のプロジェクトで意見交換や他校の知識・エッセンスを吸収し、最終的に自分のプロジェクトをブラッシュアップする。

②World Youth Meeting

World Youth Meeting は、海外の他の学校の生徒 2 校がペアになり、大会のテーマに沿って課題解決の提案プレゼンテーションを行う。そのテーマに沿って違う国の生徒との間でプレゼンを事前に作ることで、コンフリクション（衝突、対立、葛藤）が起こり、それを乗り越えて一つの目標を持ったものが作れたことで生徒同士が仲良くなるという経験をす

③Global Youth Fair

Global Youth Fair は、WWL の総決算として、生徒たちが自分たちで「こういう会議を持ちたい」と計画・テーマ設定・運営まで生徒が主体となって行うイベントである。

2021 年度は、参加人数は当校から 12 名と運営スタッフ 50 名、連携校・連携校以外国内校、海外校全体で 250 名以上の参加となる。

■生徒ヒアリングより

・ FOCUS でリーダーを務めたが、それらに参加する前は「これが正しい」「これをやって」とメンバーに自分の考えを決めつけていた。FOCUS は海外・国内の高校生や企業の方とプロジェクトをブラッシュアップするが、文化の違い・場所の違いから異なる意見がたくさん出て、最初はそれをネガティブに捉えていたが、「それは一つの個性だ」と思えるようになり、正解は一つではないと感じ、たくさんのアイデアを受け入れることが出来るようになった。最初は一つのことしか考えられなかったが、プロジェクトをたくさん経験してきた中で、多くの違う意見も尊重できるようになり、みんなの意見を聞けるリーダーになったかなと思っている。(3 年生女子)

(7)工夫点など

①時間をかけたテーマ設定

IG コースでは、2 年生をテーマ設定の 1 年間としている。「論文からテーマを設定する」「自分でプロジェクトを企画してテーマを設定する」「進路探究の中からテーマを設定する」など、色々な切り口でテーマ設定を行い、それらを合わせた上で 3 年次の最終テーマを決めるようにしている。2 年次の 1 年間は、学校側が色々な情報を生徒に与え、どれが生徒に響くか試行錯誤しながらテーマ設定に取り組ませるようにしている。

②生徒による他の生徒の巻き込み

学校内において探究活動やプロジェクトに興味がある生徒、興味がない生徒はどうしてもいる。そこで、まずは興味のある生徒を中心に活動を行う。その際、メディア部隊（チラシ作成／YouTube 用動画作成チームを編成し、イベント参加者募集や終了後の報告動画を作成し、他の生徒へ普及を行っている。

例えば、FOCUS においては、HP を作成し過去 3 年分の資料を全て掲載している。興味を持てば、過去の資料・プレゼン・参加者を見ることができるようになっている。

③AL network MTG

コロナ禍が始まった 2020 年 4 月～6 月に、AL network MTG として 2 週間に 1 度、連携校・連携企業が集まり、オンライン授業や WWL 事業のやり方などお互いの取組みを共有し、教育実践に活かした。これは AL ネットワークの大きなメリットであった。

6-1-7 大阪府立北野高等学校（管理機関：大阪府教育委員会）

（1）概要

大阪では、医・商・工連携による最先端医療開発と、グローバルビジネスの実現に向けた取組みが進められている。また、2025年の大阪・関西万博では、「多様で心身ともに健康な生き方」をテーマに、「健康・医療」分野での社会貢献が構想されている。このような社会的な動きを踏まえ、大阪府では、構想名を「いのち輝く未来を創造するイノベティブなグローバル人材育成」とし、「健康・医療」と「幸福」をテーマとしたプログラムを展開している。

（2）探究型学習等

以下の2つの探究型学習を実施している。

①学内留学

学内留学は、1年次の希望制（課外活動）である。英語をツールとしながら課題解決・課題研究の手法を学ぶ。ネイティブ講師から英語で大学教養レベルの内容を学ぶ。講義に加えてディスカッション、データリサーチ、プレゼンテーション等の活動を行い、英語の4技能の向上に加えて思考力、情報収集力、分析力、表現力を鍛える。

なお、授業、発表全て英語で行う。海外に関心があり、英語力を伸ばしたい生徒が参加している。定員80名のところ、100名以上の申込があった。

②課題研究

北野高等学校では、2年生のグループによる課題研究を行っている。このうち、WWLコースの生徒は、「健康・医療」、「幸福」をテーマに課題研究を行う。

なお、WWLのテーマに関する課題研究コースを行う生徒をWWLコース生として1年生の段階で募集している（令和3年度は60名）。

WWLコースの60名は、学校設定科目「WWLグローバル探究」を選択し、英語科、社会科、理科、体育科のいずれかのグループに所属し、健康医療、幸福のテーマに関わる研究を行っている。

上記のうち、英語グループでは、日本人高校生と留学生が英語で探究活動をする。ネイティブの英語教員が、WWLグローバル探究の英語グループを担当している。

■生徒ヒアリングより

- ・海外経験がある。世界中の文化、それに触れることで自分を成長させたいと思い、北野高校に入学し WWL コースを活用して、自分で機会を作っていこうと思った。(2年生女子)
- ・学校に入ってからこういう取組みがあると知った。今年には行けなかったが、英語を学ぶことは大事と思い、それには現地に行くことが効果的と感じ、海外の人と話をしたいと思い、生の英語に触れる機会が欲しいので参加した。(2年生男子)

(3)海外フィールドワーク・留学等

WWL コースの生徒は必修として海外研修を実施。1年春にオーストラリアと台湾、2年夏にハワイ、東南アジアを計画していた。だが、コロナ禍により、令和元年度夏の海外研修のみの実施となり、令和2年度以降は英語研修を代替として実施した。

令和2年度

2年生	WWL グローバルリーダー 養成英語集中講座	国内にいる大学／大学院に通う留学生と共に WWL テーマに関する知識を深め、自身の課題研究を進める。
1年生	WWL 淡路島研修	WWL テーマに関するフィールドワークを行い、課題研究への知見を得る。

令和3年度

2年生	クリティカルシンキング ワークショップ	クリティカルシンキングについて英語で学び、自身の探究テーマを批判的に考える。
-----	------------------------	--

また、代替研修に加えて令和3年度は海外連携校（オーストラリア、台湾）とオンライン交流を実施した。WWL コースのうち、グローバル探究の英語グループ13名が参加した。海外連携校の生徒に事前に課題研究のプレゼンテーションを視聴してもらい、そのトピックやプレゼンテーションの内容について意見交換を行った。

■生徒ヒアリングより

- ・WWL コースの課題研究に参加して良かった点は、海外の学生と交流が出来たこと。普段

の日本の授業は決められた時間の中である程度話さなければならず、日本語を用いたり、緊張して言えなかったりしたが、オンラインミーティングではゆっくりと考えて言いたい表現を探せて、英語を話す抵抗感が減ったし、実際に英語を使えてよかった。(2年生女子)

・英語の作文を書く際、自分が書いた文章を海外にいる相手に見せて感想を聞くといろんな返事が返ってきて、自分の伝えたい言葉をどう英語に変換するか考えた。最初は言葉が出なかったが今は改善されてきている。視点に偏りがあることを実感し、日本だけにいることが少なからず影響していると思う。知らないうちに決めつけていたことがあったことに気付けた。(2年生男子)

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

学校設定科目「国際情報」が融合科目となっている。1年次の必修科目である。なお、情報の授業を「国際情報」の科目に組み替えており、情報科の教員を中心に授業を進めた。

2年次に行う課題研究の基礎として、データ解析、統計処理を学ぶ(情報、理科、数学科の教員によるチームティーチング)。例えば、物理の実験では、データを取ってプレゼンテーションをした。

また、英語でのディベートやプレゼンテーションを行うなど、英語運用能力・プレゼンテーション力向上も目的とした授業も行う(授業は、情報、英語の教員によるチームティーチングで行われる)。英語の発信力を鍛える即興型ディベートを行い、4人に分かれ15分で準備し2対2のディベートをする。その後、英語による統計に関するプレゼンにも挑戦した。

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

大阪府教育委員会、北野高校、大阪工業大学の3機関が事務局となり、高大連携を実施している。大阪工業大学の教員から、課題研究についての指導を受けている。また、大阪工業大学と「AIやデータの力を最大限活用し展開できる人材」の育成をめざした高校生向けの特別授業を実施し、北野高校や連携校の生徒20名が参加した。

その他、大阪大学、大阪市立大学、奈良県立医科大学、大阪教育大学など大学の教員を招いての講演などを実施している。

(6)高校生国際会議等

大阪府教育委員会主導で高校生国際会議を実施した。

1 回目は、令和 2 年 12 月末にオンラインで実施。日本の高校生 113 名（拠点校＋連携校）と留学生 20 名が参加し、基調講演とグループに分かれての協議を行った。グループでの協議では、SGDs や健康・医療のテーマの中で得た知識をもとにディスカッションをした。

2 回目は、令和 4 年 1 月にオンラインで実施。拠点校・連携校の 2 年生生徒 71 名と海外（インド、インドネシア）の高校生 64 名が参加した。基調講演と、“Should online classes be continued after the pandemic？”をテーマにグループでの協議を行った。

(7)工夫点など

①グループでのテーマ決めについての工夫点

生徒が具体的なイメージを持てるように生活の具体的なところで問題点はないか考えるよう指導している。担当であるネイティブ講師も WWL 事業で初めて探究活動を担当したが、理科の探究に詳しい教員からアドバイスをもらいながら進めていた。

また、毎年 9 月に中間発表を行うが、その時点では研究も粗く指摘も多い。この中間報告を受けて、1 月の再発表までの 3 か月で研究し、テーマを絞り、研究の質を高くしていく。

課題研究のグループごとに研究ノートを作成し、調べたこと、次に調べたいことを書き、その内容を教員が確認し、適宜アドバイスをしている。

②WWL 推進室の設置

WWL 推進室を設置し、校内の他の分掌と同じように一つの分掌と位置付けた。WWL の講演なども学校行事の一つとして行った。学校の方針を決める運営委員会にも、WWL 推進室も参加した。

なお、次年度以降は、WWL 推進室に代わる組織として、“学力向上推進室”を設置し、学校全体の探究活動の更なる充実や国際交流の継続を図る。

6-1-8 神戸市立葺合高等学校（管理機関：神戸市教育委員会）

(1)概要

5年間SGH指定校として国際科にて事業に取り組み、グローバルスタディーズという学校設定科目を創設した。

WWLでは、普通科に学際的科目を設定し、カリキュラム開発を行う。

(2)探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

SGH指定校において国際科で行った教科横断的な英語での探究型授業（グローバルスタディーズ）の更なる開発と普通科における文理融合型のカリキュラム開発を行った。

下記のような文理融合型学際的科目を設定した。

1年生	家庭基礎（普通科／国際科） 情報の科学（普通科／国際科） グローバルスタディーズⅠA（国際科）
2年生	学際リサーチ（普通科）※理科と地歴公民の融合 学際国語（普通科） グローバルスタディーズⅡB（国際科）※英語による課題研究 グローバルスタディーズⅡC（国際科）※地歴公民と英語の融合
3年生	学際フードデザイン（普通科） グローバルスタディーズⅢC（国際科）

このうち、2年生の学際国語（普通科では英系／文系を全員が選択）、学際リサーチ（普通科の選択科目、理科と地歴公民科の教科間連携）、3年生では学際フードデザイン（普通科の選択科目）で探究型授業を実施している。

例えば、学際国語では、文系・理系の文献を読み、生徒が自分で興味があるものを調査し、調べた結果を新聞記事に取りまとめる。

また、これらの学際的科目の成果の発表の場として、WWLフォーラムを1月に開催する。普通科2年生の学際国語や学際リサーチ、国際科2年生のグローバルスタディーズの代表生徒による研究発表、1年生は総合的な探究の時間での取組みの発表を行っている。拠点校の発表が中心ではあるが、神戸市立高校の共同実施校の3校と連携校1校の代表生徒

にも参加を呼び掛けている。

■生徒ヒアリングより

- ・課題研究や授業中のプレゼンテーションが多くあり、人の意見を英語で聞いて理解したり、自分の意見も英語で話したりと、英語でコミュニケーションを取れるのが楽しかった。英語を使うことで論理的思考を求められるため、大変だったが身に付いたものは大きかったと思っている。(3年生女子)
- ・2年次に学際国語を選択した。様々な社会で起きている問題を自分たちで課題と解決策を自分レベル／世界レベルで考えるという探究を行った。普段、社会問題に目を向けようと思っても自分の生活に精一杯で目を向けられていない部分を深く考えることができ、社会問題により関心が深まった。3年生からは学際フードデザインを選択している。2年次に栄養を選択し、食についてもっと知りたいと思った。また、学際フードデザインは今年から始まりどんなことやるかわからなかったが、2年次に学際国語を選択したことで「学際的にどんなことを学べるのか」と興味を沸いた。PPTを作ったり、課題研究をしたりと慣れないことが多く大変なこともあったが、みんなで協力して課題研究などを行う中で、学びが深まったかなと思っている。(3年生女子)

(3)海外フィールドワーク・留学等

スウェーデン、オーストラリア、アメリカなどに希望制の海外研修を予定していたが、コロナ禍で中止となった。

代わりに、産官学プロジェクト (Stanford e-Kobe) (神戸市とスタンフォード大学 (米国))、オンライン国際交流プログラム (神戸市と With The World(株)) などで国際交流を行っている。

(4)大学教育の先取り履修等、大学との連携

神戸市立外国語大学の教員による特別講座や、生徒を派遣しての発表見学等を行っている。

神戸市教育委員会のプログラム「Stanford e-Kobe」(Stanford e-Japan の神戸版) に適合高校生徒 18 名が参加している (合計人数は 30 名程度)。

(5)高校生国際会議等

毎年7月に高校生国際会議を開催している。SGH 指定校期に始めたものを継続し、国際科の生徒は全員参加している。令和元年度は対面、2、3年度はオンラインで実施とした。令和3年度は、国際科、普通科の全校生徒が参加し、国際科生徒だけでなく、普通科の学際フードデザイン選択生徒もプレゼンテーションを行った。

海外連携校等と分野（教育・環境・健康など）に分かれ、共通の課題についてプレゼンテーションを行い、解決策について議論を行う。

高校生国際会議のテーマ

1年目	Local Action for Global Impact
2年目	Risk Management International Cooperation during the Covid-19 Global Crisis
3年目	Resilience in Action During the COVID-19 Global Crisis

■生徒ヒアリングより

- ・ディスカッションのファシリテーターとして参加した。場を和ませてみたり、逆に自分が引っ張っていくリーダーシップだったり、意見に中立でありながら、要約し次の人に渡すファシリテーション能力を求められた。そのような活動を高校生の段階から授業で担当することは、貴重な経験だと思った。(3年生男子)
- ・普通科はPPTを使って発表したり、自分たちが考えていることを発表したりといった機会があまりなかった。今回その機会があり、自分たちが考えるだけでなく相手にわかてもらえるように伝える、さらに英語で行うということがすごく苦労した部分ではあったが、伝える力が短期間で成長したと思う。(3年生女子)

(6)工夫点など

①学際的カリキュラムを作る際のポイント

文理融合型科目開発に向け、数学・地歴公民・理科など複数の科目の教員で議論し、「どの教科なら文理融合が出来るか」「地歴公民と理科で1つの教科にしてみよう」「国語は扱う教材が多岐にわたるから理科的なものも扱えるのではないか」「家庭科は元々学際的な科

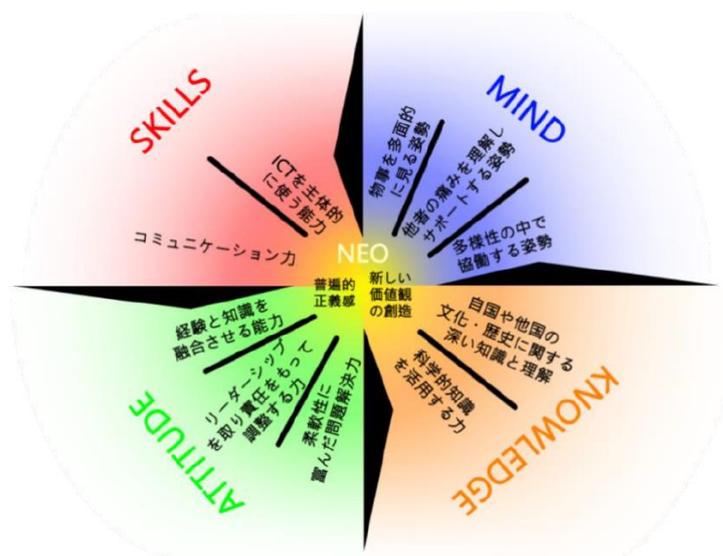
目ではないか」などの意見を出し合った。

授業計画を作成する際には、融合するそれぞれの教科の強みを出し合いながら担当者が共に作成する。例えば、環境問題にしても、地歴公民的な視点、理科学的な視点など、多面的な視点で生徒が考えていくように授業を進めている。

②「Neo MAKS」12の力の設定

WWL事業の効果を検証するため、「Neo MAKS 12の力」を設定している。1年次6月、2年次6月、3年次12月に質問紙調査を実施し、12の力の獲得状況を把握している。3年間の調査で「物事を多面的に見る力」「多様性の中で協働する力」「コミュニケーション力」が伸びていることがわかった。

一方、「他国の文化や歴史への深い知識や理解」に関しては顕著な伸びは見られなかった。その理由は、海外との直接交流が実施できなかったことだと考えられる。



6-1-9 関西学院高等部（管理機関：学校法人関西学院）

(1)概要

これまでの SGH 指定校での取組みを活用し、新たなカリキュラム開発に取り組んだ。1 年生の課外科目「グローバル探究 BASIC」を受講した生徒を中心に、2 年次以降も WWL 関連科目を選択していく。

(2)探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

①グローバル探究 BASIC

1 年生の課外科目として「グローバル探究 BASIC」を新たに設定した。30 名程度の生徒が参加出来る。

第 1 フェーズでは、第一線で活躍されている方の話を聞くと共に、SDGs の理解を深めていく。第 2 フェーズでは、フィールドワークを通じて第 1 フェーズで関心を持った分野の理解を深める。第 3 フェーズでは、フィールドワークを通じて得た学びをまとめ、2・3 年生でどのような活動をしていきたいのかを発表する。

第1フェーズ

SDGs の概念や、17 のゴールについて理解を深めます。身近な社会で起こっている SDGs の問題に目を向け、その解決策を見出していく中で、自分たちの生活に結び付けて考えることの大切さを理解します。



第2フェーズ

フィールドスタディを通して地域において様々な SDGs の取り組みをしている団体や人々の生の声を収集します。グループで協働してその現場を訪問することで、社会との接点を作り出す経験をします。



第3フェーズ

フィールドスタディで経験した「社会を知る・社会の中の自己を知る学び」を発表内容にまとめる過程の中で、これからの社会で高校生である自分たちが起こすべきアクションの方向性について考えを発展させます。



希望制であるが人気は高く、30 名定員に対し 70 名程度の応募があった。

■生徒ヒアリングより

・受講してよかった。受講しなければ考えることのないことが多くあった。戦争、平和について、1 年次にはエネルギー問題や食品ロスについてなど勉強した。そもそも受講するま

で SDGs という言葉も知らなかったのです。他の高校生がやらないことを先取りして学べたのが良かった。(3年生男子)

・1年生の時に、フードバンクの施設に実際に行ける機会があり訪問した。普段自分が使う駅の近くにあることを知り驚いた。実際に自分の身近に、イベントで見たような施設があり、活動していることを知った。問いを調べていく中で、予想していた結果が得られなかったり、単純な解決策では解決出来ない複雑な問題があることを知った。授業で習う簡単な問題ではなく、実際に行くことで複雑な社会問題があることを知った。(3年生女子)

②「グローバル探究」関連科目

2・3年次には、「グローバル探究」関連科目として、「AI活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」の3つの科目を開設した。グローバル探究 BASIC を受講した生徒を中心に、それぞれ30名程度が受講をする。

a) AI活用

AIを利用している企業への訪問などを通してAIについて学び、AIを活用して様々な課題を解決する技術を学ぶ。身の回りのどういったものがAI活用されれば課題解決に繋がるかなど、AIの機能を使つての商品開発やSDGsの問題解決方法などを提案していく。

b) ハンズオンラーニング

教室の外に出て、大きなテーマに対して問いを立てて解決していく授業。テーマについて、身近なところからアプローチし、社会課題の発見と解決方法を探る。

令和3年度のテーマは「戦争と原発」。戦争を自分たちの問題にした時、どんなことが考えられるかを検討していく。西宮や関西学院は、過去、戦争に巻き込まれたことに気付き調査を始め、平和教育資料館への訪問や、関西学院の歴史管轄など文献を探して、キャンパスにも様々な戦跡があることに気付く。

c) グローバルスタディ

オンラインディスカッションを用いて、外国の高校生と共に身近な社会問題の解決に取り組むPBL型授業。例えば、温暖化をテーマに、グreta・トゥーンベリ氏のこと、フィリピンの方とのやりとり、温暖化について授業で得た知識の獲得、解決に取り組んでいる企

業・NGOについて、などを通じて生徒それぞれの課題を発見し、解決方法を探る。

■生徒ヒアリングより

- ・2年生の時、平和について勉強したとき、「火垂るの墓」の舞台が西宮・神戸だった。学校内に戦跡があるなど、戦争が自分に近いものを感じた。(3年生男子)
- ・中学生の頃から貧困問題や教育問題について興味があり、高校生になったらそれを学びたいと思ってこの学校を選んだ。人前で話すことが苦手なため、プレゼンテーションが多いこの授業を取ることでそれを克服出来ると思い受講した。(3年生女子)

③ソーシャル探究

ソーシャル探究は、1年生・2年生が学年全体で取り組む活動であり、まず1年生3学期の毎週1時間、地域の様々な社会問題について知識を深め、その問題についてリサーチし、解決策について発表を行う。

2年生では、6月に校外学習で地域の課題を見つけるフィールドワークを行い、課題に対する解決策を検討していく。12月の文化祭において、自治体の担当者に来ていただきプレゼンを行う。その後、2年生の終わりにある修学旅行に繋げていく。

行事と連携とすることで、全ての教員を巻き込むことに挑戦している。

(3)海外フィールドワーク・留学等

グローバルスタディにおいて、1年生の終わりにフィリピンでフィールドワークを予定していたがコロナ禍で中止となっている。

なお、コロナ禍で中止となった海外研修については全てオンラインのツアーに振替、希望者の参加とした。2020年度フィリピン、2021年度フィリピン、ザンビアとのオンラインツアーを実施した。

■生徒ヒアリングより

- ・苦勞した点は、フィリピンの生徒とZoomでディスカッションやプレゼンをする時に、自分の英語力の無さから、伝えたいことを伝えられなかったり、相手の言いたいことは分かってもすぐ返事ができなかったりしたことで、最初は戸惑った。今は開き直ってではない

が、自分の言いたいことは伝えたり、テーマが決まっている時は事前に準備するようになった。(3年生女子)

(4)大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である関西学院大学が主導で、AL ネットワーク・プログラムを実施、様々な講座・イベントを開催している。例えば、以下のような講座がある。

AI 活用入門講座 (オンライン)	AI 活用に関する基礎知識を習得する。さらにそれを活用して、現実の諸問題を解決する能力を文系・理系を問わず涵養する。最終講義では、それまでの知識等を活用し、どのように高等学校での探究・課題研究活動に活用出来るのか等にも言及。
AI 活用 for SDGs ワークショップ	SDGs の実現に向け、AI をどのように活用出来るのか AI についての講義や SDGs についての講義を受け、グループワークを通じて考える。
WWL・SGH×探究甲子園	日本国内の高校において取り組まれた探究活動の成果を発表し、共有する。SDGs に関するテーマで「探究活動プレゼンテーション」・「グループディスカッション」2つのセッションで構成して実施している。

この他、高大連携科目として関西学院大学が開講している科目は、高等生3年生の5・6時間目の選択科目の授業として受講することを可能としており(約20-30科目から選択)、来年度より、高校と大学の両方で単位修得が認められる形となった(大学では科目履修生)。

(5)高校生国際会議等

高校生国際会議を、IOM(International Online Meeting)と題して、オンラインで令和3年の3月、6月、9月の3回開催した。生徒が中心となって企画から行った。各回国内10校150名海外は4-5カ国100名程度の参加となった。

3回継続して実施することで、企画力やファシリテート力、英語でのスピーチなどを身に付ける狙いもあった。1回目は、参加する国内外の生徒が打ち解けて交流を促すことを目的

に、世界のコロナ禍の状況を共有した。2回目は、300名20セッションに分かれ生徒の各研究テーマについて議論を行った。3回目は、SDGs達成に向けてチームのプレゼンを行い、最後は自分たちで何が出来るかをまとめて宣言した。

■生徒ヒアリングより

・3回とも実行委員をやらせてもらった。他校の生徒だけではなく海外の生徒も関わっている。普段一緒に活動するメンバーとは違うメンバーで、またオンラインでしか会ったことのない人と一つのことを作り上げていくのが大変だった。英語力が足りず、言いたいことを言えないこともあったので、英語が出来ないのはもったいないと感じた。これから自己主張する上で英語は必要だと感じた。(3年生女子)

(6)工夫点など

①全ての教員の巻き込み

WWL事業を、意識して全ての学校活動として活動に関わりの薄い教員も巻き込もうとしている。半自動的に先生同士が相談しなければならない仕組みを取り入れている。例えば、「ソーシャル探究プログラム」では、活動を行事に位置付けることで、他の教員も活動に参加するように方向付けをしている。

②生徒がテーマ設定する上での工夫

生徒が教室の中に留まらないことを心掛けている。オンラインでやったとしても、人との関わりには生徒自身の行動に責任が伴ってくる。すると、授業の中で「やらされている感」が薄れ、社会課題を生徒が自分の問題として捉えるようになってくるのがわかった。

6-1-10 広島県立広島国泰寺高等学校（管理機関：広島県教育委員会）

（1）概要

世界の平和に重要な使命と役割がある広島という場所だからこそ出来るグローバル人材育成という視点から、「グローバルな視野と強い使命感を持って持続可能な社会の構築や国際社会の平和と発展に貢献する人材」の育成を目指す。

（2）探究型学習等

総合的な探究の時間において、1年次は社会課題の考察、2年次は課題研究（個人）、3年次は論文作成を行う。従来から行っていた「総合的な探究の時間」に、WWL 事業拠点校として SDGs・平和学習を組み込んでいる。

1年次は、広島で原爆ドームに最も近く当時の在校生が被爆した学校であることから、戦争に対する狭義の平和な社会について考察する。その後、戦争の解決以外の平和への取組み（世の中の社会課題解決）の観点から、SDGs の学習を行う。「SDGs とは何か」から学び、SDGs に取り組む様々な立場（企業、大学、行政）からの講演や訪問を行い、現状の SDGs への取組みについて学びを深める。

2年次では、「平和について、自分との繋がりから考える」個人の探究活動に入る。「自分が取り組もうとしていることはどのような社会貢献に繋がるか」「SDGs の 17 のゴールのうちどれを解決することになるか」という観点から 1年間研究を行い、社会人 TA や留学生に向けての発表などを経験し、最後は 3月に研究成果発表会を行う。

3年生では、1、2年次で取り組んだ研究を論文にまとめる。平和な社会の実現に向けて、高校生として何が出来るか、この問題の解決にどのように取り組んで行くかを主体的に考える。

■生徒ヒアリングより

・学校に入学する前は世界で起こる出来事をニュースで目にしていても、興味・関心はあっても他人事というか自分が行動を起こして変わることはないと思っていた。しかし、授業を受けてみて、起こっている現状だけでなく、自分たちには何が出来るのか、SDGs も絡めて自分事として捉えられるようになった。（3年生女子）

(3)海外フィールドワーク・留学等

当初、フィリピンへの海外研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症流行の影響により中止となっている。

令和 2 年度は海外に渡ることが出来ず、代替プログラムとして広島県教育委員会が考案したオンラインを用いた探究活動を行った。生徒各自の SDGs の研究に沿って「自分の研究は平和とどう繋がるか」というテーマで探究活動を行った。探究活動では、各生徒の研究テーマ決定から、研究を深めるまでの間に海外からのゲストにディスカッションに参加していただき、生徒の探究活動についてフィードバックをいただいた。

(4)外国語や文理の教科を融合した教科・科目

①グローバル平和探究

地理、歴史、理科、数学、英語と公民の一部を融合した「グローバル平和探究」を開設した。2 年次の必修科目となっており、週 2 単位の科目である。

例えば環境問題や人口問題など、社会の様々な課題がなぜ起こっているのかを地理の視点で説明し、数学・理科を用いて解決方法を解説する。最終的にはその各課題について英語でディスカッションなどを行う。



■生徒ヒアリングより

・自分は英語が得意ではなく、グローバル平和探究では最初のころは周りの人に助けてもら

ってばかりだった。しかし、だんだん英語が読めるようになり、実際に SDGs の問題に触れているときに、ただ知っているだけ・読んだだけだと上辺のことしかわからないが、グループのみんなと話し合っ、自分とは違う考えを持っている人と話が出来たり、大学生と交流することで、もっと社会問題を知りたい、もっと社会問題に貢献出来る人になりたいといった夢が膨らむような活動をするのができ楽しかった。(3年生女子)

②グローバル・イングリッシュ

国際会議に対応できる高い英語力を身に付けたグローバル人材を育成するために、英語表現Ⅱとの選択科目として「グローバル・イングリッシュ (GE)」を設置しカリキュラム開発を行った。コミュニケーション活動等のアウトプットの時間を確保するため、授業で文法・語法の基礎知識を扱う時間は総時間数の3分の1程度とし、「自宅でインプット・授業でアウトプット」を実践した。知識の活用に重点を置く授業を展開するとともに、英検2～準1級の取得を奨励した。年間を通して MVP プロジェクト (Messages on the Voyage toward Peace) を計画し、「平和」「核軍縮」等をテーマとしたレシテーション、ディスカッション、プレゼンテーション、エッセイライティングに取り組んだ。

■生徒ヒアリングより

・グローバル・イングリッシュの授業では、文法などの英語の基本的なことだけではなく、それをどのように自分の生活の中で使うか、専門的な事柄に対してどのように英語を活用していくかということ学んだ。かなり高い能力が必要なことだったし、一筋縄ではいかなかったが、それを仲間と一緒に勉強していくことで、大変なことばかりだけでなく楽しみながら、お互いに刺激し合いながら、技術を身に付けていけることが良かった。(3年生女子)

(5)大学教育の先取り履修等、大学との連携

①高大連携による先取り履修等

広島大学、県立広島大学と連携し、大学の講座を高校生も受講出来るようになっている。

両大学の講座受講は、大学の単位化がなされる。両大学に入学した場合は、申請すれば単位の認定をいただける。

高大連携の実績（令和 2 年度）

広島大学	3 講座	受講者数 150 名（そのうち単位取得者 77 名／単位取得率約 67%） ※夏季集中講座（オンデマンド）を受講
県立広島大学	5 講座	受講者数 35 名（そのうち単位取得者 30 名／単位取得率約 86%） ※オンデマンド講座（一部リアルタイム）を受講

②Stanford e-Hiroshima

Stanford e-Hiroshima では米スタンフォード大学と連携し、同大学が広島の高校生向けの遠隔講座を実施する。Stanford e-Japan の広島版となっている。

広島県内の WWL 連携校以外の高校生にも参加募集を行っており、令和 2 年度・3 年度の両年度ともに県内 29 名の高校生が参加している。

講座のトピックは、広島県から多くの移民がハワイ島に渡ったことに因んだ移民研究や、平和・シリコンバレーの起業家精神など、全 6 レッスンである。一カ月 1 テーマ、最後にプレゼンテーションを行う。

最終的に、最優秀成績者 2 名がスタンフォード大学現地に招かれて、生徒によるプレゼンテーションと表彰式を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症流行の影響によりオンラインで実施している。令和 2 年度は、最優秀成績者 2 名のうち 1 名が広島国泰寺高校の生徒であった。

(6)高校生国際会議等

広島県教育委員会が生徒実行委員会を立ち上げ、高校生国際会議を実施。企画運営については、生徒たちが学校を超えて準備をした。国際会議に向けて生徒たちで WEB サイト「HIP HOPE (Hiroshima International Peace for HOPE)」立ち上げた。

5 カ国 19 校（日本：15 校、海外 4 校）が参加し、「平和」をテーマとした探究活動の成果などを発表するとともに、実行委員会生徒から平和に関するメッセージを発信した。

■生徒ヒアリングより

・私は国際平和実現に向けて、WEB サイトを立ち上げたり国際会議を実施したりと、色々活動した。しかし「国際平和実現なんて簡単じゃない」と言われたり、「WEB サイトを見て下さい」と声を掛けても興味のない人が多く、どうすれば興味を持ってもらえるか、価

値観の違う人とどのように対話をすればいいのか、何を一緒に行動すれば同じような思いを感じてもらえるのかと、国際平和実現という大きなゴールを目指している分、同じ思いを持っている人達で活動してしまっていて、あまり興味のない人を巻き込み一緒に何かを作り上げることが出来ず悔しかった。(3年生女子)

(7)工夫点など

①テーマ設定の工夫

生徒のテーマ設定については、2年生になっていきなりさせるのではなく、1年生の段階から準備を進めている。

例えば、1年生の時点は一つの視点から取り組むのではなく、色々な角度（企業・研究機関・行政など）からそれぞれの取組みが社会貢献に繋がること、自分の興味関心がどのように社会貢献に繋がるのか、というような多角的な視点からのものの見方を教える。

②外部評価を受けさせる

同窓会に依頼し、卒業生に発表を聞いてもらう機会を設けている。多様な分野で活躍されている社会人に研究内容を聞いていただくことで、新たな視点に繋がるアドバイスをもらうことができる。また、自分の提言がどれほど根拠やデータの裏付けのある現実的なものかを知り、「本物の」研究にさせることを目指す。

③推進委員会による情報共有

WWL 拠点校になり校内に推進委員会を組織して、毎週定例会議を行っている。「総合的な探究の時間」「グローバル平和探究」「グローバル・イングリッシュ」などの各担当が、それぞれ進捗状況を説明し合う。

また、各担当も個別会議をしている。例えば「総合的な探究の時間」を担当する教員は2週間に1回は会議をしている。「グローバル平和探究」の担当は、毎週時間割内に関連する教科の担当者10名が集まり情報共有しながら授業を進めている。

6-2 カリキュラム開発・実施のポイント

事例を踏まえて、カリキュラム開発・実施のポイントを整理する。

6-2-1 探究型学習について

(1)生徒が課題・問題を見つけるための工夫

探究型学習等において、カリキュラム開発拠点校では、生徒が課題・問題を見つけるための工夫として「生徒が自分のことから考えるように促す」「様々な社会的課題について触れる機会をつくる」「生徒が繰り返し考えるように働きかける」「高大接続の利用（大学の教員による指導等）」「探究型学習に関する市販の教材の活用」などを行っていた。

●生徒が自分のことから考えるように促す

- ・探究学習は、生徒が「社会を1mmでも動かす」ことを目標に、生徒自身がどこで社会を動かすかマイテーマを定め、アクションを起こすというカリキュラムを組んでいる。もしかしたら、SDGsに絡めるべきとすれば、探究が終わったあとに絡めることが良いと考えている。より良い持続的な社会を生徒が主体となって作るとした際、その視点にSDGsは当然含まれてくる。生徒にSDGsを最初から提示し過ぎると、生徒はどうしてもその中から選んで調べ学習的になってしまい、探究が深まるといった感じがしない。生徒たちが幅広い視点を持ち本当に真剣になって考えたテーマで、その中からいろいろな活動を起こしていくことによって「こんなことがSDGsと繋がっている」と気付いていくほうが本物の探究が作れていくのではないかと考えている。「問題を発見する」ということに関して、「問題の発見（テーマ設定）が自分事になっていないと探究活動自体が大変なことである」ということを指導の中に入れ込むことに実現している。
- ・生徒は自分と関わりが薄いことへの興味関心を持たずにいるため、学校はさまざまなミッションを提示している。何が生徒にとっての自分事になるかわからないが、1つでも関心の持てるものがあればと考え、アプローチしている。

●様々な社会的課題について触れる機会をつくる。

- ・教員個人の力量で指導に差がでないように、1年次のうちに様々な社会的な課題について知る機会を設けている。「グローバルライフ」の授業では、家庭科の視点から「持続可能な社会を作る担い手になる」という社会的な課題を考える機会としている。また、年度末

の国内外のフィールドワークによって、現場で探究力を身に付けてから、2年次の課題研究活動に向かうという流れを作っている。

- ・先端科学の研究者や企業の方に、生徒の視野が広がるような講演を頂いており、テーマの設定に有効に働いていると思われる。
- ・テーマ設定については、1年生の時点は一つの視点から取り組むのではなく、色々な角度（企業・研究機関・行政など）のそれぞれの取組みが社会貢献に繋がること、自分の興味関心があることはどういう風に社会貢献に繋がっていくかを最初に考える。
- ・テーマ設定は難しいものである。テーマを見つけるために大事なことは、本物と出会うこと・人生に残るような原体験をすること、この二つが外せないと考えている。そのため、講演などのテーマとの出会い・体験の機会を作っている。
- ・生徒には「自分の足で歩きなさい」を言い続ける。逆に「見える景色はみんな違って良い」ということは教員も思っている。どのプロジェクトもはまる／はまらない生徒の差はあるが、生徒にやりなさいとは言わない。入試問題には答えがあるが、発表・プレゼン・ディベートなどには正解がたくさんある。どれが正解かわからない。最短距離でいかない経験を織り交ぜることで、むしろ最短距離で行く勉強が浮かび上がる生徒もいる。色々な学びが自分で出来るようになった生徒は、出来事・物事・人について多様性を持てるようになる。

●生徒が繰り返し考えるように働きかける

- ・探究学習は、テキスト化。このテキストにはワークシートが付属しており、4年次の自身で研究課題を設定した際に「自分の問いに対する30本ノック」を記述。また、この30本ノックを発表し、友人やTAから指摘を受ける。
- ・いきなりグローバルと言われてもピンとこない生徒も多く、思った以上に生徒は苦勞している印象がある。決まらない生徒にはひたすら面談を繰り返している。生徒の興味を引き出す面談をする。

●高大接続の利用

- ・高大接続の一つとして、課題研究を始める前に連携先の大学の教授に「課題研究のテーマ設定について」という題目で出前授業を行っていただいている。テーマ設定が上手いのか

ないと課題研究が進まないことを大学の教授に教えていただいている。

- ・高校3年次は一人1テーマを持って卒業研究に臨むが、一部の生徒は、そのテーマに関連する研究を行う大学の先生と繋ぎ、研究のブラッシュアップを図っている。また、例えば農業であれば、農業の実習は大学農学部のセンターで実習を継続的にやっている。

●市販の教材の活用

- ・市販の教材「啓林館 課題研究メソッド」を使っている。課題研究をやっている学校は割と導入している。

(2)生徒が課題・問題を探究する姿勢などを身に付けるための工夫

探究型学習等において、生徒が課題・問題を探究する姿勢などを身に付けるための工夫の工夫としては、「生活や社会との繋がりを考えさせるようにする」「焦らず時間をかけた指導を行う」「基本的な勉強を行った上で、課題探究に移る」「同級生や先輩たちの活動する姿を見せる」などを行っていた。

●生活や社会との繋がりを考えさせるようにする

- ・「自分たちが探究しているテーマが社会とどう繋がるか」という点を生徒自身が考えるようにすることである。「出来るだけ何らかのアクションを起こそうね」と生徒に話し研究のサポートをした。まだ高校生であるため、最初は社会に自分たちで働きかけるということが難しい生徒もいたが、だんだんと自分から「どんな風に繋がっていったら良いか」ということを考えて取り組む生徒が増えた。
- ・具体的なイメージを持てるように生活の具体的なところで問題点はないか考えるよう指導している。

●焦らず時間をかけた指導を行う

- ・2年生はテーマ設定の1年間としているが、「論文のからテーマを設定する」「自分でプロジェクトを企画してテーマを設定する」「進路探究の中からテーマを設定する」の3つのステップに分けて、それらを合わせた上で次年度のテーマを決める。2年生の1年間は、学校側がいろいろな玉を投げてどれかが生徒にヒットするといった形でテーマ設定に取

り組んでいる。

●基本的な勉強を行った上で、課題探究に移る

- ・1年生の取組みから徐々に2年生の探究活動へ移っており、いきなり「何かテーマを決めて調べなさい」とやっているわけではない。1年間しっかり取り組むことで、動機付けになって2年生の探究活動や最後の発表に繋がられると思う。

●同級生や先輩たちの活動する姿を見せる

- ・当校内においては興味がある生徒／興味がない生徒はどうしてもいる。まずは興味のある生徒を引き付けていくとして走り出した。その中でも、メディア部隊（チラシ作成／YouTube用動画作成チーム）がイベント参加者募集や終了後の報告動画をきっちり作ったことで年々継承された部分があると思われる。
- ・フォーラムなどでの先輩の活動を後輩が見る機会を設け、下級生に「来年は、ああいう活動を自分たちもする」と認識させている。良い影響を与えることが出来ていると思う。

6-2-2 外国語や文理の教科を融合した教科・科目での工夫

外国語や文理の教科を融合した教科・科目においては、融合する教科を担当する教員同士でアイデアを出し合いながら、新たな科目を作っているケースが多かった。

また、授業のテーマについて、生徒の視点に立ったものにするなど、生徒の興味関心をひくようなものにする工夫が行われていた。また、授業のアウトプット（課題・成果物）を工夫することで、生徒の新しい知識を得ようとする意欲を高めているケースもあった。

●教員同士の話し合いでカリキュラムを作成

- ・グローバル平和探究の授業は地歴公民・英語・理科・数学が入れ替わって授業を行っている。グローバル平和探究の主担当者が地理教師であるため、地理から社会課題を見るという授業を行っている。例えば、人口問題や気候問題など、そこに他の教科がどう絡めるかということのを他教科の教員に意見をもらった。そのときに、地理の立場で「あれしてください」「これしてください」と要求するのではなく、「人口問題に対して理科はどう入れますか」「数学ではどのように関わられますか」と他の教科から提案してもらうようにし、最

後は英語で発表出来るようになるカリキュラムとした。

- ・文理融合教科開発のために数学・社会・理科の教員と複数の科目の教員が参加して、「どの科目なら文理融合が出来るか」「社会と理科で融合科目を考えてみよう」「国語は教材内容が多岐にわたるから、理科的を加えることが出来るかもしれない」「家庭科は元々が学際的な科目ではないか」という議論を会議で行った。お互いの強みを出し合いながら、担当教員同士が二人で授業を作っている。例えば、環境問題にしても、社会的な知見・理科的な知見の二つを使って生徒が課題を考えるような授業を進める。

●生徒の視点に立った授業のテーマ設定

- ・英語・地歴公民の教員が組んでいる融合型授業では、例えば、環境問題を考える中で、特設「環境問題はこういうものがあるね」と話をするのではなく、「発展途上国がどのような状況にあり、その状況がどのような我々の生活にどのような影響を与えているのか」という視点で授業を行っている。
- ・授業内容の話題性が大事である。生徒にとって話題性は重要であり、テキストを作る難しさにもなっている。

●アウトプット（課題・成果物）を工夫することで、学ぶ意欲を高める

- ・教科横断型プロジェクトを通じて、生徒の知識と意識が高まっている。生徒の知識は明らかに増えた。英語の授業でディベートを行うにあたり、他教科での知識を吸収することが良い影響を与えていると考えられる。
- ・ただ単にレポートにまとめるのではなく、アプリを使って新聞記事を作るといった、アウトプット面で生徒に興味を持たせる仕掛けをしている。

6-2-3 高大連携や大学教育の先取り履修等での工夫

大学教育の先取り履修においては、高校の生徒が大学の教育についていけるように補助教材を用意するケースがあった。

また、高大連携においては、大学教員に講義や指導をしてもらうだけでなく、大学生や留学生との交流を学びに活かすケースもみられた。

●補助教材の作成

・1年目は、大学の先取り履修について、大学生と同じように受講したところ、良かったという感想を持つ生徒もいたが、どちらかというとなんか難しいという生徒が多かった。そこで、2年目は1年目の課題も踏まえて、補助プリントを学校が用意して授業を受けさせた。大学からも「生徒の理解度は深まっている」と報告を受けている。

●大学生や留学生との交流

・大学附属校であり、「高大連携」は強みである。大学の教員と高校の教員・生徒が関わるだけでなく、大学生や大学院生、留学生などとも交流している。

6-2-4 国際会議での工夫

国際会議の運営においては、会議のファシリテーターを生徒や卒業生に任せるケースも多かった。ファシリテーション講座を開催し、事前準備を行う例もあった。この他、国際会議において学年を超えた交流を行う機会とする事例もあった。

また、英語力に不安のある教員のため、英語教員の授業を調整し、会議（紹介した事例は会議参加のための審査）に参加してもらう事例もあった。

●生徒に議論のファシリテーションを任せるため、ファシリテーション講座を実施

・国際会議を高校生が運営するにあたり、ディスカッションなどを行う際にファシリテーション役を高校生に担わせた。そのためファシリテーション講座を立ち上げた。文化的背景が異なる人たちと一緒にディスカッションする際に大事なものは、英語力以上に「どんな風になるとディスカッションが深まっていくか」ということである。「色々な文化を持った人とディスカッションするとき自分たちが気を付けなければならないことは何か」など色々なテーマを使いながら、生徒たちが自分たちでディスカッションする際のファシリテーションの練習をしながら取り組んでいた。

●卒業生の参加

・ディスカッションのファシリテーターは当校・県内連携校を卒業生した大学生が担った。教員がファシリテートすると、特に日本の高校生は答えを待ってしまうところがあるこ

とを懸念し、生徒たち自らが活発に意見交換してほしいため、10名の英語が堪能なファシリテート能力もある大学生に声を掛けてアシスタントとした。

●学年を超えた交流の機会創出

・国際会議では、1年生と2年生を半分ずつに分け、縦割りで発表・ディスカッションを行っている。2年生の発表を1年生が聞き、ディスカッションを行うことで、2年生は1年生より頑張ろうとするし、1年生は「来年自分たちはこういうリーダーシップを取るのだな」と縦で繋がって学び合う仕組みを構築している。

●英語でのプレゼンを審査出来る体制構築の工夫

・7クラスから順位を付けて国際会議の代表チームを決めるにあたり、「英語の発表が通じず、先生が点を付けられない」といった事態を避けるべく、当校の英語教師全9名が担当学年以外も授業を調整して、発表・審査の場には英語教師が入るようにし、プレゼンテーションは英語教師が見て、セッション（質疑応答など）は日本語OKにすると英語以外の教員も見る。また、2月になると3年生担当の教師は授業数的に余裕が出てくるため、そのころに1年間のまとめとして英語で発表する機会を設けている。

6-2-5 実施体制上の工夫

(1)学内体制

WWL事業について、学校内で定着を図るため、カリキュラム開発拠点校では、「WWL事業を行う専門部署・委員会の設置」しているケースが多かった。また、「職員会議でのアナウンス」などにより、教員への普及を図っている。

また、他の教員が授業など行いやすいように、授業指導案や動画などを作成してノウハウを共有するケースもあった。

●WWL事業を行う専門部署・委員会の設置

・毎月 WWL 推進委員会を校内で開催し、課題研究中心に学校設定科目を担当している教員が全員参加し、お互い情報共有している。その内容をさらに全教員に伝えており、協働

の意識を教員に持ってもらうといった取組みをしている。

- ・毎週 1 回行っている校内関係者による連絡協議会（推進委員会）で必要なことを確認し合ったり、別の組織である校務主任会議（校務運営会議）でも情報共有したりして、あらゆる方法で全教職員が WWL に関わり、校内で連携している。
- ・WWL を推進していった組織（推進室）は、他の分掌と同じように一つの分掌として位置づけた。WWL の講演は WWL 推進室がやる、というように学校行事の一つとして行った。担当者は、学校の方針を決める運営委員会にも参加し、職員会議に企画を提示し周知する。

●学年会議、職員会議でのアナウンス、話し合い

- ・探究学習については、学年会の先生が中心となって、学年会で計画を立て、様々な授業の内容・研修について話し合うこととなった。学年会で話し合うメリットは、特定の担当者だけでなくその学年に所属する探究学習の内容・重要性・生徒の変容が見える。
- ・教員全体というところはその数が非常に多いこともあり難しいところもあるが、WWL 事業の取組みは常に教員会議で期日や内容を必ず紹介している。そのため、実際に関わりがない教員でも、WWL での取組みは多からず少なからず理解していると認識している。
- ・出来るだけ情報を細かく伝える。事業計画など職員会議などで周知する。WWL の担当組織が独りよがりにならないよう意識して他の教職員と連絡を密に取った。

●関わる教員を増やすため、学際科目を利用

- ・WWL 事業を行うにあたり、(SGH 指定校時代には関わっていなかった) 普通科の教員をいかに巻き込んでいくかという考えから、学際的な科目を立ち上げて関わっていく教員の数を増やした。

●授業指導案等の作成（探究型授業）

- ・核になる先生が授業案を作り、他の教員たちはそれを参考に授業を実施している。また「こんな声掛けをして、このタイミングでこういう生徒に発表させて、こんな感じで授業の流れを作ってはどうか」といったミニデモ動画を作って他の教員に見せるといった取組みも行った。

(2)学外連携

学外連携については、「互いにプラスとなる連携を意識する」ことが関係構築において重要なポイントとなる。また、連携をすることで負担が増え過ぎないように気を付ける必要がある。

●互いにプラスとなる連携を意識する

- ・ネットワークの構築について、長く維持し付き合っていく・深めていくにあたり、Win-Winの関係性を持つことが必要だと考えている。例えば、企業と提携した際には、そのアンケートを生徒に取っていただき、アンケートを利用し新しい開発に繋げるといったこともある。また、今後自走していくことを視野に入れると、受益者負担的なものの必要性も考えている。各学校とは「お互いどのような教育活動をやっているか」という点において交流することで互いにプラスになる部分が非常に大きい。最近の例では「オンラインを使って同時に授業をやりましょう」といった取組みを行っている。お互いに一つの授業を主体的にやっていく中で、教師がモチベーションを高く持ち授業を実施出来るといったことも、継続できる要因ではないかと考えている。
- ・シンガポールとの連携は、1年目より2年目で深まってきた。日本の学生にアンケートを取ってほしいという依頼もあった。シンガポールの生徒の研究にこちらのコメントが役に立つなど、向こうにとってもメリットがある。国際会議など意見交換がプラスになる。

●連携による教員の負担軽減

- ・海外大学への派遣の際に「本校と一緒に行きましょう」と他の拠点校に声を掛けたり、教育プログラムを持っている企業やNPOと組むなど、負担の大きい海外フィールドワークなどを他と連携して進めることもある。学校単独でプログラムを作成していくことは教員の負担が大きくなるので、連携することで負担を減らしている。その他、新規に立ち上げることになったフィールドワークなどは、旅行会社のネットワークを活用して訪問先を開拓した。

第7章 まとめ

これまでの分析結果から得られた知見は、下記のとおり。

7-1 WWL 拠点校の活動や WWL 事業に参加した生徒の状況

- カリキュラム開発で設定したテーマで最も多いのは「SDGs」で 89.3%の拠点校でテーマとなっている。
- 拠点校は、いずれも探究型学習について力を入れて実施している。特に「生徒自らによる探究課題設定」は、7割の学校が「特に力を入れて実施している」
- 高校生国際会議や大学教育の先取り履修等は「カリキュラム拠点校中心」「管理機関中心」など実施形態は様々。
- コロナ禍の影響もあり、令和2年度以降は海外との直接の交流は減っている。一方で、リモートによる交流は増えている。
- WWL 事業に参加した生徒は、「課題探究の授業・活動」「複数の教科の融合科目」を中心に取り組んでおり、熱心度も高い。「国内でのフィールドワーク」「企業との連携活動」なども熱心度が高い。
- WWL 事業において、「外国人教員による授業」「グループワーク」「プレゼンテーション」に取り組む機会が多く、熱心に実施している。「日本語以外の言語」での話す・読む・書くについても8割以上が実施。
- WWL 事業・SGH 事業を経験した卒業生にとっても、現在、「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」などが役立つと回答。
- 6割の生徒が、WWL 事業に熱心に取り組み、満足している。また、WWL 事業などを通じて生徒の世界や視野が広がっている様子が伺える。

7-2 「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力」「PPDAC」

- 事業の成果目標である「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力」「PPDAC(探究型行動)」は、令和3年9月から令和4年1月の4か月の間で、わずかではあるが成長がみられる。また、WWL 事業に参加していない生徒に比べて、

獲得している割合が高い。

- これらの能力の獲得は、WWL 事業への取組みの熱心度で大きな差がある。さらに、WWL 事業に「熱心に取り組んだ」生徒は、4 か月間での成長がみられるが、熱心に取り組んでいない生徒は変化がない。取組み姿勢で、大きな差が生じている。生徒が課題・問題を探究する姿勢を身に付けることがポイントだとアンケートからもよみとれる。
- 熱心に取り組んでいない生徒は「テーマに関心が持てない」「英語に苦手意識」「課題が難しい」「海外の人と触れ合うのに苦手意識」などの割合が高く、グローバルな課題設定や英語などの使用に障壁意識がある生徒も一定数存在。
- ただし、熱心に取り組んでいない生徒でも WWL 事業は、「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」ことに繋がっており、WWL 事業は、自分を見つめ直す機会になっている可能性がある。

7-3 教員からみた WWL 事業

- WWL 事業に役割を持って参加した教員は「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」などの変化を感じている。一方で、参加していない教員においては、その変化を認識している割合は4割程度にとどまっている。
- WWL 事業に役割を持って参加した教員は、「他の教員と連携・協働する力」「課題研究型授業に関する指導力」「社会的課題に関する知識や理解」を必要とする割合が高い。参加していない教員においては、これらの項目は必ずしも高くない。
- SGH 事業と WWL 事業の違いとして「国内の他の高校との交流機会が増えた」「社会的課題を取り込んだ授業開発やカリキュラム編成が進んだ」「文理を超えた授業開発やカリキュラム編成が進んだ」などの割合が高い。ただし、これらの項目は、授業のみ、役割なしの教員では必ずしも割合が高くなく、WWL 事業の関りの薄い教員は、SGH 事業との違いを認識していない可能性がある。
- 「WWL 事業による生徒や学校の変化」や「WWL 事業に必要な資質・能力」「SGH 事業と WWL 事業の違い」は、外からの認識と実際に担当している教員でギャップがあることが分かる。教員間での情報発信も重要なポイントといえる。
- 教員は必ずしも「英語力」を重要視しておらず、英語などに障壁意識を感じる生徒と

の間にギャップがある可能性もある。

- なお、「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、働き方改革を意識しつつ WWL 事業を行う必要がある。